



風の丘―追悼の記



山岡 瑞雪

全ては父が倒れてから始まった

深い眠りの中にいた。

その淵から呼び覚ましたのは、けたたましい電話の音だった。二〇一〇年十月七日の早朝六時、父のレベルが落ちたという看護師のか細げながらも緊迫した声に、まだ回転の遅い頭はぼんやりと、どうしたらいいのだろうと考えた。

「どの位で来られますか」との問いに「うーん、寝ていたので……。三十分、いや四十分……」とやっとのことで答える。

「気をつけて来てください」と看護師は繰り返し言った。

母はまだ眠っている。八十六歳になる母、佐紀子は体調が悪く、朝が遅い。その母を起こして準備させてなど、悠長にはしてられない緊急事態に違いない。大急ぎで身支度を済ませ、声を掛けて家を出たが、母は理解したのかどうか。

街は白々明けて、車の通りも少なく、スムーズに病院に着いた。病院の中も森閑としていて、まだ機能していない。廊下には人影もなく、父の病室も分からない。二週間ほど前に救急で入院して以来、頻繁に部屋を移動させられていて、行くたびに部屋が変わっていたし、さて、どこに行けばいいのやら。

三階の廊下できょろきょろしていると、一人掃除をしている女性が「どうされました？」と声を掛けてきた。丁度そのとき、詰め所の奥から「小松さんが……」という女性の声が聞こえた。医師が駆けつけたばかりらしく、三人顔を合わせると無言のまま病室に向かう。父のベッドの周りには点滴などの医療器具も何もなく、一人ぼつんと寝かされていた。

「えっ、全部外されてる……？」

私は顔を手で覆って、医師のほうを見た。医師は父に手を差し伸べるでもなく、そばに寄りかかるともせず、父の足元で突っ立ったまま、気の毒そうに私を見て頷いた。

「六時六分でした」という看護師の報告を聞くと、医師はそのまま私を残して部屋を出て行った。想像していたのとは全く違う。医師が手を取って脈を測り、瞳孔を見て「ご臨終です」と宣告する。そういう光景はなかった。全てが静止した冷たく無機質な空間に、ただぼつんと……。そこにはもう父ではない、すでに単なる物体と化した抜け殻が横たわっていた。私は呆然と立ち尽くした。これが父、小松満夫の最期だった。享年九十五。

(二〇〇九年六月二十三日)

父が脳梗塞で倒れた。

今日は月に一度の病院行きの日だった。昼食後、居間で父は横になって、テレビを見ていた。年とともにますます気が短くなっている父は、いつも早めに準備を済ませて私を急かすくせに、なぜか今日は寝そべったまま、なかなか腰を上げようとしない。

「そろそろ行くよ」と声を掛けながら、私も出かける準備をしていた。

母が「お父さん、お父さん」と呼びかけている。そして、「返事もせん」とプリプリ怒っている。母の肩越しに見ると父の様子が変わる。意識朦朧のようだ。

「お父さん、どうした？」と呼びかけると必死に口を動かす。

「ど・う・も・な・い」と微かに聞き取れた。その口の中から分厚く巻きついた舌が覗いた。これは、完全にろれつが回っていない。起きようとしているのか、右手を上突き上げ、空を掴むかのように妙に指を動かしているが、仰向けのまま身体は硬く動かない。目はうつろでかなたをさまよっている。

（これは大変だ、救急車を呼ばなきゃ）と震える手でダイヤルを回す。

（落ち着け！）と自分を励ましながら、電話で状況説明をした。

「救急車が到着するまでに呼吸が止まったら、また電話をしてください。人工呼吸のやり方を教えますから」と言われ、更に緊張してしまう。母はただ父の横に座り込んだまま、おろおろしているばかりだ。

そして、私も救急車に乗り込んで、父は日赤病院に救急搬送された。

救急の医師から、三時間以内に血栓を溶かす薬を用いたいと家族の許可がいると言われた。この薬を投与しないと、寝たきりか、良くて車椅子生活になるだろう。人により違いがあり、投与すれば歩けるようになる人も効果が全く出ない人もある。また強い薬で副作用のリスクもあると聞く。

母に電話をすると、「してもらって」と言う。兄への連絡を頼み、その到着を待った。

救急処置の間、既往症などを繰り返し聞かれ、数枚の書類を書かされる。四年前私が同居してから、思えば毎年のようにいろいろあった。

まず一昨々年、夕食後のこと、横になりテレビを見ていた父の組んだ足がドタンと畳みに落ちた。急に力が入らなくなったという。夜のこと、かかりつけ医に電話したが、あいにく留守。連絡は取れ相談したが、そうするうちに足に力も入るようになっていたので、翌日クリニックへ。検査をしたほうが良いとのことで、N病院を紹介され、母もともに車で連れて行く。

そこで、随分待たされた。散々待たされた挙句、診察室に呼ばれて、医師が言った。何ですぐに連れて来なかったのかと。私の前に母が呼ばれ、しつこく言われていたらしく、母は妙な顔をして医師の前で固まっていた。レントゲン写真を前に母と私に向かって長々と説明しながら、しかし、ここにはこれ以上詳しく検査をする装置がないので、これから日赤に救急搬送すると言った。ならば、説明なんかいいから、さっさとしてくれと内心腹が立つ思いをこらえて、更に救急車が来るまで待合室で待たされ日赤へ。そして、検査入院。一過性の虚血症とやらで一週間ほどの入院だった。

次に、一昨年はやはり月一の検診の日。父がきちんと外出着に着替え、持って行くものなどを用意していたときだった。ガチャンと音がして駆けつけると、鏡台が倒れいろいろなものが散乱し、その中に父は尻餅をついていた。しきりに腕時計を左手に止めようとするばかりで、話しかけても返事をしない。もう私も出かける準備が出来ていたので、このまま車で病院に連れて行こうと思って、散乱した保険証や診察券などをかき集めていると、父は立ち上がり、今度は引き出しを開けて何か探している様子だ。

「保険証ならここにあるよ」と言いつつ、やっとのことで車に乗せ、近所のかかりつけのクリニ

ックへ。そこからすぐに日赤に救急搬送することになった。しかし、このときは日赤について頃には意識もはっきりし、入院することもなく帰された。後になって思ったが、昔から飲み続けていたワーファリンをこのところ痔出血があり、その手術のために二週間ほど止めた。その影響が出たのだったろう。

そして、去年の夏。熱を出し、佐野病院に入院。ウイルスか細菌か、結局原因は分からなかったが、気管支炎から悪くすれば急変して肺炎になると命が危ないと言われた。ちょうど同じ位の年の男性が同じような症状で急変して亡くなったと。私は自分の『尊厳死の宣言書』を見せ、年齢的にも覚悟はしていると、のどを詰まらせながら医師に言った。

しかし、幸い熱は下がり、命は取り止めた。心臓がパンパンにはれ上がっていて、心臓内膜炎による熱か、癌による熱かもしれないとも言われた。しかし、もう高齢なのできつい検査はしないでほしいと私は言った。今更、癌と分かってどうなるものでもないではないか。父はそのときすでに満九十三歳。癌の治療や手術に耐えられる身体ではなかろう。丁度その頃、私の中学校時代の友達が五十歳半ばで癌にかかり、二年ほどの壮絶な闘病の末、亡くなっていた。手術、放射線治療、制癌剤投与等々を辛い顔も見せず耐え抜いた。彼女とは久しぶりの同窓会で再会して後、よく二人で植物園や公園に行き、一緒に花見をしたものだ。彼女は健脚で、何時間でも歩いた。必ず、私のほうが先に疲れ果てた。そんな元気だった彼女が癌に侵され一旦は治ったように見えたものの、結局再発し亡くなった。しばらくは気落ちして、立ち直れなかった。結果論かも知れないが、どうせ亡くなるものなら、あんな辛い闘病などせず、残りの人生をもっと楽しく大事に過ごしたほうが良かったのではないか。そう、思えてならない。

また、父は十年ほど前に心不全で一、二週間ほど入院した。それ以来、慢性心不全で毎日の服薬と月一回の通院は欠かせないものだった。去年の入院は三週間ほどすると、本人が早く帰りたいとリハビリを拒否するもので、仕方なく退院となった。

振り返ってみれば、脳梗塞はすでに三年前から始まっていたのかもしれない。

最大の発作に見舞われた今日、強い薬で父は危機を脱した様子。意識も戻ったというので面会したが、私と兄夫婦を認識したのやらどうなのやら、看護師のほうに顔を向けて、口をすぼめてキスをするような仕草をする。周りを取り囲む医師や看護師たちの手前、何やら恥ずかしく、わざと「何て顔をしてるの」と笑いで済ませたが、不安な思いがする。脳梗塞の後遺症がどこまでのものなのか……。果たして元の父に戻るものなのか。

救急の治療が終わり、ICUに移動するというので、その病棟の待合室で兄の京次とその嫁の厚子と三人で待たされる。そのときに八十五歳になる母の話になった。今のかかりつけのクリニックでは何かと不安なので、佐野病院に変わりたいと思っていること。佐野病院だと訪問看護に来てもらえ自宅で点滴が受けられるし、いざというときは入院も出来るのだけれど、なかなか母が承知しないこと。最近、物忘れが激しく世話が大変なことなどを話していると、兄嫁がこんなことを言う。

「いちいち言うことを聞かんでいいよ。さっさと思うようにすればいいたい。そうせんと、身体がもたんよ。」

(えっ)と思った。大変ではあるけれど、本人が納得することでないとは私は実行に移したくない

。どうしてもその時は何度も話して納得させる。それでも駄目なら、諦めるしかない。（でも、この人は違うんだ）と、私は兄嫁の内面を垣間見た気がした。

（六月二十四日）

下着やパジャマ、それと普段服用している薬などを持ってICUに。

父はベッドではなく、すでに車椅子に座っていた。私のことが分かっているのかどうか、一言も発しない。変に取り澄ました顔をして、看護師の手の上に自分の手を置いてさすっている。看護師は慣れているのか、黙ってされるがままになっている。

（まさか、性欲だけが甦ったのではあるまいか？）

不安な思いが心の底に忍び寄る。

（六月二十五日）

午前中に、昨日持って行っていなかった目薬など、不足していたものを届ける。OCUに移されていた。

午後には一般病棟に移るといので、再び、母を連れ日赤へ。

「お父さん、お母さんを連れてきたよ」と言っても分からないのか返事もしない。すると突然、顔をしかめ頭を抱えて「痛い、痛い」と言い出す。目を固く瞑って、開けようとしめない。せつかく、母を連れてきたのに。何とも、これはひどい有様だ。担当の先生は回診中で、しばらくしたら廻ってこられるという。

母だけ椅子に掛けさせて、所在無くそんな父を見ていると、看護師がリハビリに連れていきますと入ってきた。こんなに頭が痛いと言っているのに大丈夫なのだろうか。看護師が三人がかりで、痛い痛いと身体を突っ張って嫌がる父をベッドから車椅子に移す。父は母のほうを見向きもせず、部屋から廊下に出ると、途端にこやかな顔に変わって、車椅子から手を伸ばし看護師の胸をまさぐろうとしている。看護師が笑いながら「ハンカチか何かありませんか。手に持たせておきたいんですが」と私に言う。何なんだこれかと思う。幸い、母は見えていなかったからいいけど……。

空のベッドの横で母と二人ぼんやりしていると、小柄で年配のたぶん偉い先生を先頭に数人の医師や研修医が部屋に入ってきた。

「頭が痛いと言っていました、大丈夫でしょうか」と聞くと、その偉そうな先生が「たぶん、せん妄でしょうが、念のため、頭の検査をしてみましよう」と言って去っていった。四人部屋だが、三人はリハビリでベッドは空っぽ。そんな中、ぞろぞろ回診って何なのだろう？

看護師からおむつを売店から買ってきてほしいと頼まれた。日赤は大きく広い。いくつもの棟があり、玄関から父の病室までは相当の距離がある。時にふらつく母に手を貸しながら一階に降り、階段の手すりのそばに母を待たせておくことにした。売店で買い物を済ませ父の病室まで取って返すと、看護師からパッドも要るんだと聞く。うら若い看護師が何の恥じらいも見せず「パッドはですね、何々をこうやってくるむんです」と、丁寧に要らない説明をする。再び、一階に降り、売店へ。途中で母に大丈夫かと声を掛け、パッドを買って病室に届ける。

母はぐったりした様子。早くも車椅子に座れるまでに回復した父を見せてやろうと思ったのに

、あんな姿を見せてしまって、母には残酷なことをした。連れて来なければ良かったと後悔した。

(六月三十日)

佐野病院に父転院の面談に行く。

日赤に入院できるのは急性期の間のみ。それ以後は、回復期となり、リハビリを受けるために転院することになる。それで、去年も入院した佐野病院に転院することにしたのだ。

(七月二日)

父は私を認めるようになった。

「おう、綾子か。母さんは元気か。京次は来んが、どうしようとか。仕事をしようとか。ひ孫たちに小遣いをやろう。葉っぱをな」と、話が変になってくる。

「種類の違う葉っぱを集めてな。この葉っぱ一枚がいくらでな。こっちの葉っぱはいくらたいな。」

まるで、狐か狸の話みたいだと思いながら、「そうね、そうね」と相槌を打ちながら聞いている。

「今度、葉っぱを持ってきてな」

私が帰ろうとすると、慌てて車椅子から立ち上がろうとする。そして、必死の形相で言う。

「わしも帰る。連れて帰ってくれ」

そんな父を置き去りにして、私は逃げるように帰るのだ。

(ごめんね、お父さん)

(七月六日)

佐野病院入院手続きのため、入院誓約書の連帯保証人の署名が必要になり、兄に電話を入れた。

「仕事が忙しい。速達で送ってくれ」と言う。兄夫婦は二十数年前、親が住むT市から何十キロか離れたS市に家を建てた。三人の子どもたちはすでに結婚し、それぞれ別に暮らしている。

転院まで日にちもないし、兄はこちらのT市内で仕事をしているのだから、来られないはずないだろうにと不満に思う。結局、家までは行けないが、日赤でならというので、待ち合わせることにした。日赤から家まで車で二十分くらいしか掛からないのだが……。

日赤の待合室で署名、捺印を済ませて、「実は頼みがある」と改まって言い出したのが、何と、兄たちが夫婦で韓国に旅行するという話だった。

(えっ？ 韓国？ 旅行！)

驚いた。父が入院してまだ二週間にしかない。左半側空間無視、左手足の麻痺、感覚障害、せん妄などなど、後遺症が色濃く残る状態なのに……。このところ私のことは分かるようになったが、変なつじつまの合わない話ばかりするし、夜は三十分おきに尿意を催し、手が掛かるといって昼も夜もナースステーション内で世話している様子なのだ。

「キャンセルしようかと思うとったが、落ち着いたようやけん」と言う。

何が落ち着いているものかと言いたい思いを胸に閉まい、連絡はつくのかと聞くと、首を振り、更に思いがけないことを言う。

「もしものことを考えて、親父の預金は解約しとったほうがいいぞ。凍結すると困ることになるからな」

私は思いも付かなかった。そんなもしものことを考えていながら、それでも韓国旅行に行くというのか。連絡もつかないのに？ 全く、理解ができない。

リハビリのため転院した父、後遺症は色濃く残り

(七月九日)

午前十時、日赤に入院して十七日目、佐野病院に転院。それまで父は私の顔を見るたびに家に連れ帰ってくれと言っていたのに、今日は転院するのを看護師から聞いて理解していたらしく、私の顔を見るなり「あー、あのねえ、佐野病院に移るからね」と言った。

病院の車で迎えに来てくれたので、父と荷物を任せ、私一人で日赤の退院手続きを済ませて車で後を追ひ、そして佐野病院の入院手続きすべてを行った。

この日、朝から母の具合が悪かった。昨夜家の周りを人が歩いているような足音がした、何か変な臭いがする……などと言う。前に血圧が二〇〇まで上がり、寝込んだときと同じような状態だ。心配ながらも家に残し、日赤から佐野病院へ。帰ってきたら、更に具合が悪そうだ。血圧は一五〇台。睡眠導入剤を飲ませて休ませる。

母はこの年の二月から悪い状態が始まった。突然嘔吐を催し、床から起き上がれなくなり、数日食事を受け付けず寝込むのだ。近くのかかりつけのクリニックに何とかして連れて行き、点滴をしてもらおうと治まるといった具合で、そういうことが数回あった。そのときも朝目覚めると、雨も降っていないのに、夜中にザアザア激しく降る音がしたと言っていた。それを聞いて、父が妙な顔をして言ったものだ。「何も降ってなかったがなあ……」

前から心配性な面があり、夜は睡眠導入剤を処方されていた。ところが、人からこの薬を飲んでいると呆けると聞き、それを信じて飲んだり飲まなかったりしていたらしい。最近、物忘れが激しいように思われるが、すでにその頃から認知症が始まっていたのだろうか。何かと募る不安による幻覚や幻聴、そしてこのたびは父の入院で精神的にダメージを受けたのかもしれない。

この間、兄夫婦は韓国旅行に行っている。気がかりではないのだろうか、楽しめているのだろうか……？

(七月十一日)

大量のおむつ、パッド、バスタオルなどを抱えて佐野病院に行くと、担当の看護師が待っていましたとばかり飛んできた。

「昨日の夜中にですね。ベッドからはい出されて、丸裸になってですね。ドアのところに立つとられたんですよ！」

父が夜間三十分ごとに尿意を催し、自分で服を脱ぎ、おむつも剥ぎ、真っ裸になって歩き回り、あちこちに失禁したのだと言う。更に、やせぎすの神経質そうな看護師が目を剥いて、矢継ぎ早に言う。

「転倒、転落の危険があるので、離床センサーや床にセンサーマットを設置させていただきます。同意書にサインしてください。それから、裸になれないようにジッパー付きのつなぎの介護服を用意してほしいんですが」

私はあまりのことに困惑してしまった。

「つなぎの服ですか？ どこで買えばいいんでしょう」

「介護用品を扱っているところにあるでしょう。ネットで売っているかもしれません」

戸惑いながら、同意書にサインする。

「思いのほかよく動けるので、これなら早々に自宅に引き取ってもらうことになるでしょう。それが無理なら施設を探してください。介護保険の手続きは？」

「介護保険ですか？ いえ……。どこに行けばいいんですか？」

「区役所です。早急に区役所に行って申請してください」

日赤でも頻繁に尿意があり、その世話のため、昼も夜もナースステーションにおらされていたのだが、裸になるとは聞いていなかった。更に脳梗塞の後遺症で、左側の手足が不自由なうえ、左半側空間無視といい、左側の視野が欠けているらしい。なので、真っ直ぐには歩けず、右へ右へと行ってしまい方向が定まらない。元々、右目は緑内障でほとんど見えていないらしいし、左目も白内障が年々進んでいたのだ。それに半側無視が加わって、そんな状態で闇雲に歩こうとするから始末が悪いわけだ。

しかし、こんな状態で自宅に引き取れるはずはなかろうに。母は具合が悪いし、私一人で一体どうすればいいのか……。激しい衝撃に頭も混乱しそう。情けなくて情けなくて、涙が出た。とにかく、介護保険の申請をしなくてはいけない。

(七月十二日)

甥の優太が嫁と子どもをつれて佐野病院から家に立ち寄った。兄夫婦が旅行に行っている間、代わりに様子を見に行くよう頼まれたらしい。父がとても元気で、誰が来たかも分つたと母に話している。この嫁は元看護師だ。佐野病院の看護師から話は聞いているはずなのに、母を心配させないためか、何の問題もないかのように、すぐにでも引き取られそうに言う。しかし、昨日の今日で私は動揺も覚めやらず、自宅に引き取ることが果たして可能なのか、今は難しくてもこの先はどうなのかと逡巡していた。病弱な母の世話の上に、あの父の介護が私一人で、この自宅で出来るのか？

築四十年以上になる古く狭い家だ。ベッドに車椅子となれば、改修しなくてはなるまい。いやいや、とてもとても。少々の改修ぐらいで解決できるとは思えない。トイレも狭く、お風呂も洗面所も……。車椅子で行き来できる部屋や廊下ではなく、とても介護ができる状態になりそうにない。車椅子でなくなれば、もっと大変だろう。病院よりもずっと転倒の危険性は高い。不自由な身体で闇雲に動き回ろうとする父を二十四時間世話するなんて不可能だ。あれこれ、どう考えても、やっぱり無理。それに、もし父が真っ裸で近所を徘徊したら、なんてことを考えると暗澹たる思いになる。そんな私には、この嫁の言葉が他人事で上っ面の慰めにしか聞こえない。

で、脱衣と失禁のことを言ってやった。やはり聞いているらしく驚きもせず、黙ってうなずいた。つなぎの服のことも聞いていたらしい。こちらは大変な介護をすることになるかもしれない当事者なのだ。いくら、母がかわいそうだからといって、引き取り可能かどうかの検討は、私と母の切実な問題なのだ。今の状態のまま引き取れば、一番に倒れるのは母だ。母にも父の状態を分かってもらわなければ、私一人ではどうしようもない。上っ面の社交辞令なんか要らない。

(七月十三日)

月曜日午前中、区の社会福祉センターに介護保険の申請に出向く。ついでに母の分も申請する。

午後、パジャマやタオル、バスタオルなどを買い込んで佐野病院へ。韓国旅行の帰りに飛行場からそのまま立ち寄ったのだろう、兄夫婦が先に来ていて、父の枕元で話をしている。兄だけドアの近くに呼び、父の状態のあらましと介護保険の申請に行ったことを伝えた。

先に来ていた兄たちに看護師が父の洗濯物を渡していたのだが、兄は私に当然のようにその紙袋をよこした。日赤からずっと洗濯物は私がしてきたから、別に何も言わず受け取ったが、兄嫁はそばにいながら知らん顔をしている。ちょっと情けない。

病院からの帰り際、兄から父の様子を聞いた兄嫁は、不審そうな顔で「優太たちはそんな話をしてなかったけどねえ」と言った。彼らが旅行中の両親を心配させまいと話さなかったのか、後で話すつもりだったのかは知らない。しかし、私が嘘をつくはずもないし、その必要もないではないか。その言葉は一体何なのと言いたかったが、ぐっと胸にしまい込んだ。兄夫婦も一緒に母の待つ家に帰る。韓国土産の豆菓子をもらう。一粒つまんでみたが、硬いし美味しくも何ともない。総入れ歯の母は、手を出そうともしなかった。

(七月十五日)

脳梗塞の治療はほぼ済んだので、リハビリテーション病棟に移り、これから本格的なりハビリ開始だという。前につなぎの介護服を用意してほしいと言った看護師がいたが、リハビリ担当の医師の話では、排尿のリハビリもするからそれは不要ということだった。

昼夜の別をはっきり認識させるべく、夜間はパジャマに着替えさせ、一、二時間おきに起こしてトイレに導き、排尿を促すのだそうだ。なので、今まではパジャマだけでよかったものが、昼間はトレパンみたいな動きやすいパンツやポロシャツなどの部屋着が要るわけだ。タンスの引き出しや押入れの衣装ケースからかき集め、更に数枚買い足して、一枚一枚名前を刺繍する。下着はマジックで書けばよいが、部屋着は後で家に帰れたとき、刺繍ならば切って取れるからと思った。数人の看護師が刺繍を見て、感心してくれた。評判になっているらしく、父はそれを指差してちょっと自慢げな顔をした。

(七月十六日)

午前十時半、佐野病院にて父の介護保険認定調査。

役所の人に来て、父と面談、病院からの聞き取り、私にも聞き取り調査。脳梗塞の後遺症としてのいろんな症状の中で、気になるのは認知症。看護師の話では長谷川式で一〇だという。一〇はかなり重症らしい。調査員の人と話をしている横を、ホールに向かって父が看護師に車椅子を押されていく。父が看護師を見上げ、「ん、晩御飯？」と聞いている。まだ、午前中だ。思わず、調査員と顔を見合わせる。昼も夜も分からなくなっているのだろうか？

父はこの年まで頭はビックリするほどしっかりしていた。ところがつい最近、驚かされるのが何度かあった。夜中、皆が寝静まった頃、物音がするので起きていくと、お風呂の前で父が服を脱いで呆然と突っ立っているのだ。とっくに風呂に入って寝床についた父がまた入ろうと起きだしたものの、部屋が真っ暗なのにおかしいと気付いたらしい。

「お父さん、お風呂にはさっき入ったでしょ」

「ん？ お風呂よって起さんやった？」

「起こしてないよ。もう、皆寝てたんだから」と言うと、すごすごと寝床に戻るのだった。

また、食事ごとにゴロンと横になりそのまま眠る時間がますます長くなってきていて、私は母に冗談めかして言ったものだ。

「お父さんって、このごろ、朝寝、昼寝、夕寝、夜寝そして本寝してるよね」

そして夕方に目が覚めると、「ん？ 昼ご飯？」と言ったりする。それもたまにのことだったし、寝ぼけているのかと別に気にしなかった。何しろ高齢だったし、父は元々無口で耳も遠かったので、コミュニケーションが取れているとは言えなかったかもしれない。なので、同じことを繰り返して言ったり、聞いたりする母のもの忘れのほうを心配していた。それが、とうとうこのたび後遺症としての認知症が父に出てしまったかと思うと気持ちが暗くなる。

午後は自宅で母の介護保険認定調査。母には前もって、正直に本当のことを言うようにとっておいた。母はすでに二、三年前から買い物も炊事もすべて私に任せ、病院にも私が車で送り迎えしている状態。一人では外出できないようになっていのに、人には自分で何でもできるというからだ。認知症の自覚もないようだが、かなり進んでいると私には思える。父の一年前、二年前の入院の話を、母は何も覚えていないのだ。驚いてしまう。N病院から日赤に救急搬送されたとき、母は父に付き添って救急車に乗ったのではなかったか。その話をすると、「あんたはよう覚えとうねえ」と感心したように言う。私はまだ六十歳。これで忘れていたら若年性認知症だろう。

調査員を門まで送って、母の前では言えないことを近所にも聞かれないよう、小声で母の状況を伝える。高齢者は自尊心が強く、自分を認知症とは認めたくないのだと分かっているのだから、とても気を使うのだ。

しかし、母のほうは非該当になるのではないかとちょっと心配になる。

(七月十七日)

洗濯物を入れて病室のベランダに出すのだという蓋付きのポリバケツと、パジャマの着替えを買って持っていく。入浴日は火曜、金曜の二回。それに合わせて週二回行かなければならない。一回の入浴に二枚のバスタオルを使うのだという。夜間、おむつを自分で剥がしてしまい、あちこち失禁するらしく、洗濯物も山ほど出る。

父が熱を出していた。午後は三十八度を越しているという。熱を出し、心臓がパンパンにはれ上がった去年のことを思い出した。更に平成十二年のことも。私がまだアパートに一人暮らしをしていたころ。夜、母が不安そうな声で父が入院したと電話してきた。私は何泊かの用意をして駆けつけた。翌日、入院時に必要なもののかき集め、足りないものを買って病院に持っていた。医師から父のレントゲン写真を見せられたが、大きく膨れ上がった心臓に目を見張った。病名は心不全と言われた。思いのほか、早くに退院したが、そのときから今に至るまで、父の心臓は慢性心不全という重い荷物を抱えていたのだった。最近は特に少し動いただけで、ハアハアと荒い息づかいをしていた。周りが思うほど、本人はきついとは言わなかったが。

(七月十八日)

あれから兄たちが佐野病院に行った様子もなく、何の電話もない。今日は土曜日。彼らが仕事を休んでいくことはないので、行くとすれば今日か明日しかないと思い、こちらから電話を試みた。兄が出た。すると、明日から出張するので、その後しか行けないという。

「厚子さんは？」と聞くと、「仕事が忙しい！」という。兄嫁はスーパーのパートに行っている。

「親の一大事に、仕事休んででもすることでしょう。お父さん、昨日熱出してたよ」と言うと、兄が「仕事せんでどうするか」と大声で怒り出した。あまりにもひどく怒鳴りつけるので、「仕事、仕事、仕事って。それで韓国によく行けたね」と言って電話を切った。

その後しばらくして、兄嫁から電話が掛かった。

「お母さんに代わって」といきなり言われる。携帯のようなので、今どこかと聞くと、「車。病院に行ってきた」と投げやりと言う。それなら、先にこちらに来てくれたら着替えを持ってもらえたのにと心の中で思いながら、母に代わった。

何を聞かれているのやら、母はチンプンカンプンの様子。

「えっ、看護保険？ 通知が？ ハガキみたいなの？」などと言っている。ははあ、介護保険のことかと電話を取り上げ、「介護保険なら、もう私が手続き取って……」と説明しようとする途中で、「ガチャン！」と電話を切られてしまった。

(何で?)

兄の携帯に掛けてみる。車で兄嫁と一緒にだという。さっきは病院には行けないと言っていたのに、急遽二人で行ってきたらしい。訳の分からない母に聞かずに何で私に聞かないのかと言うと、どうやら仕事を休んででもすることだと言った私に腹を立てているらしく、また大きな声で怒鳴り出し、一方的に電話を切られてしまった。

電話の怒鳴り声を直接聞いていない母は、夕方兄嫁に電話をして父の様子を聞いている。

「さっきはごめんね」なんて、謝っている。謝る必要なんかないのに。これじゃあ、私だけが悪者だ。二人のご機嫌を取る母にも腹が立つ。私がいなかったら、あの二人が全てしなければいけないことだろう。もちろん、仕事を休み、韓国旅行はキャンセルしてだ。ならば、私は感謝してもらってもいいはず！ あんなに憎々しげに怒鳴られるようなことを私はしていない。

胃がきりきりと痛くなって、夕食は作らず、母に自分で冷蔵庫の中を見て食べといて、と言ってストライキ。食事なんてのどを通らないし、作る気にもならない。赤の他人からも電話を途中でガチャンと切られることなんて、今までの人生で一度もなかった。兄嫁のあの仕打ちには相当のショックを受けた。兄の怒鳴り声にも心はズタズタだ。

(七月十九日)

着替えを持って病院へ。洗濯物がベランダのバケツの中にぎゅうぎゅう詰め押し込められていた。この暑い最中に外に出されているのでひどく臭い。アンモニアの臭いなのだろうが……。これら洗濯物はいきなり洗濯機には入れられない。まずマスクとゴム手袋をして、次に一枚一枚抜げてみて、くまなく点検する。黄色くなったところは特に念入りに予洗い。白いものは漂白剤を入れ、一晩置く。そして、次の日に足踏みして汚れをきれいに落とすところで濯ぎ、洗濯機

に入れて本洗いをするのだ。去年、父が入院したときもそうだったが、疲れが腰に響くのか、腰痛が出る。風呂場にしゃがみ込んでの洗濯はかなり辛い。

夏の間だけでもクーラーの効いた病室の片隅に置いてもらって、臭いがしないようにしてもらえないかと思い、病院の玄関横の投書箱に投函してみたが、その後も相変わらず炎天下に置かれていたものだ。

それにしても、どういう行き違いで兄たちはあんな言動を起こしたのだろう。一体私が何をしたというのか、それとも何か誤解しているのか。そこで、手紙を出すことにした。

前略

七月十三日、月曜日に区の社会福祉事務所に父、母の介護保険の申請に行きました。これは佐野病院に転院のための面談に行ったときに相談員の方からアドバイスを受けていたし、転院当日も看護師さんからも早々に行ったほうがよいと聞いていたため。申請が下りるまでに、一ヶ月ほどかかるとのこと。

七月十六日午前、佐野病院にて父の認定の調査立会い。午後、自宅にて母の立会い。しかし、母は家に訪問されるのも、施設に行くのも嫌がって「どこも、何ともありません」。めまいはと聞かれて、「ありません」などと答えていたので、非該当の可能性大でしょう。その前日に佐野病院に脳の検査を受けるべく連れ出そうとしましたが、頑として拒否。どうしようもありません。

たまたま、数日前にM大学病院の心臓手術何とか研究会から、その後検査に来ていない人へのアンケートが来ていましたが、「いつ、手術したかね？ いつやったかねえ？」と言うばかりで、書こうともせず。最近は分からん分からん、難しいことは分からんと最初から投げる傾向にあり、仕方なく私がアンケートを読み上げながら書きましたが、「悪いように書かないで」と言うもので、そのようにして送りました。

こんなふうで、以前の母とは随分違ってきているので、母に何かを聞いたり、言ったりする場合は電話ではなく、対面で何回も分かりやすく話してほしいと思います。母が混乱するだけなので。

ところで、先日話しましたように、父の貯金は事あればすぐに消えてしまいそうな額で、これには母も愕然。「うちは貧乏なんやね」と言っていました。それでも、病院に持って行く服を探してみても、ろくなものもない、そんなつましい生活をして、毎月積み立てては定期にと、母に「あんたのためぞ」と言いながらコツコツ作ったなけなしの財産なんです。

これを父自身が使ってしまうことになっては、父も母もかわいそうなものと思わずにはられません。日赤は退院当日、たった十六日間分ですが、十万円払いました。今後のことを思って不安も増すばかりのようです。

K市から帰るときに二百万、三百万、合計五百万円、父から借金されていると聞いています。父、母のために返してほしいと思っています。

父は日赤で私の顔を見るたびに、「母さんは元気にしようか、ちゃんと食べようか？」
「京次は働きようとか？ 給料はもらいよっちゃろうか？」

「京次は酒、タバコを飲むけんね。わしはやめたけど……」などと、いつの時代に帰っているのか、チンプンカンプンながら皆の心配ばかり口にしていました。父、母のためによりしくお願いします。

草々

この借金の話は四年前、私が家に戻ってから、母にしょっちゅう聞かされていたものである。兄たちが今まで仕送りも何もしてくれなかったことがなく、ほったらかしだったこと。昔、父がお金を融通してやったこと、そしてそれは兄嫁には内緒の話だったことなど、何かにつけ聞かされたものだった。いまさら返してもらうつもりもないのだというものの、これから先、父にどれだけお金が掛かるものやら。公的な施設は一年待ち、二年待ちとも聞かし、父の貯金は驚くことに有料の施設なら、最初の入居費にも足りないような額しかなかったのだ。

そういえば、韓国旅行に行く前、預金は下ろしとけという兄に後日、電話でこれだけしかなかったと金額を言うと、「そんなはずはなかろう。毎月の年金額から考えても、そんなはずはない」と、疑り深そうに言っていた。母は勘違いしていて、隔月の年金額を毎月もらっていると常々言っていた。兄もそれを聞いていて、相当もらっていると思っていたのかもしれない。

「家のリフォームに相当使ってきたみたいだけど」とは言っておいたが……。実際、一年前雨漏りがするので、屋根を防災瓦に総葺き替えした。それに百数十万円かかったことは兄も知っている。兄は不動産会社に勤めているので、業者を紹介してもらったからだ。それ以前も、外壁や下水管、床下扇風機など、私が戻る前にやったリフォームには怪しげなものもある。その業者の一つがその後警察に摘発されてもいる。父母が使用しているふかふかの羽毛布団は訪問販売で一組何十万円もしたという。全く、高齢者は狙われやすいのだ。以来、私が盾となって、訪問販売すべてを断っている。

この際、父母のために、はっきりしておこうと思って借金のことまで書いてしまったが、果たしてどう受け取るか。兄嫁には内緒の話とのことで、親展で出した。

リハビリの期間は一律三ヶ月？

(七月二十二日)

夜更けて兄より電話。

「五百万やら借りてないぞ」という。

「何の証拠もなしに言うな！」と、大声でまるでやくぎのように怒鳴る。十一時を過ぎている。母のことを少しでも思うなら、こんな時間に掛けてこないでほしい。母も何事かと起きてきた。

「五百万、借りてないってよ」というと、母が代わって、入れ歯を外した口でもごもご「あのときに二百万でね、それから三百万ね」と言っている。もう一度私が代わると、母の言うことは認知症で信用できないようなことを言う。なので、私が言ってやった。「でも、昔のことははっきり覚えているよ」と。

それから、私が介護保険の手続きを済ませたことを病院で伝えたことを忘れていたらしく、その話は優太たちから聞いたのだろうという。手紙に書いたとおり、ケアマネや看護師からの勧めで、とうに申請は済ませ、そのことは病院で兄に言ったはずという、それに関しては「勘違いしていた。それは悪かった」と初めて謝った。

私が説明しようとするのに兄嫁がガチャンと電話を切った話になると、再び激昂し、何やら散々怒鳴り散らした挙句、「俺の女房の悪口を言うな！」と叫んで電話を切った。

何だか知らないけど……。《俺の女房》の悪口には怒り狂いながら、《俺の妹》の悪口は皆で言い募っているんだろうなと思った。兄は完全に向こうに取り込まれてしまって、すっかり人が変わってしまったと思うとため息が出る。

それに介護保険の件にしても、S市に住んでいる彼らが私を抜きにこちらの役所に休んでまで手続きに行けるはずもなく、何を焦って怒鳴りまくっているのか分からない。

借金に関しては、本心から返してほしいわけでもないのに、いいけど。しかし、母は「おかしいね、おかしいね。関東から帰るときにね、お父さんが都合つけたのだけどね」ともぐもぐぶつぶつ言っている。兄の怒鳴り声には電話ながらも胸に痛く、きっと今日も寝付けない。

(七月二十三日)

兄嫁が電話をしてきて、父の見舞いに一緒に行きましょうと母を連れ出した。例の件は知らん顔だ。親展で出しておいたのだが、昨日の兄の様子では自宅で怒鳴りまくったと思われる。だから、兄嫁も分かっているはず。なのに、一体どういうつもりなのか？ 私は会いたくもないので、玄関に出ず部屋に閉じこもる。母は夕べ、電話のそばで兄の怒鳴り声を聞いたはずなのだが、最近は忘れ方がとみに激しい。日赤に連れて行ったときに父がせん妄の状態でかわいそうなることをしたと思い、その後、母自身の具合も悪くなって、佐野病院転院後は父のところにはずっと私一人で行っていた。それなのに、兄嫁に誘われると嬉しそうに付いて行っている。なんだか、母に裏切られた気持ちで情けなくなる。

(七月二十四日)

兄嫁が昨日見舞いに行っているのに、洗濯物には相変わらず知らん顔で放ったままだ。全くの

見舞い客然ではないか。

同室の患者の奥さんが「昨日、お母さんが女の方と一緒に見えてましたよ。」というので、「ああ、あれは兄嫁です。見舞い客です」と言いながらポリバケツから洗濯物を取り出していたら、察したのだろう。

「どこも同じです。したものでないと分かりません」と言われた。母より少し若いぐらいのおばあさんだから、夫の世話はかなり大変だろうと思うが、息子夫婦は別に住んでいるらしく一人でこなしているのだ。夫の病状は父より悪く、一週間ほど早い入院だったが、いまだに寝たきりで声も出ない状態だ。

しかし、果たしてどちらがいいのだろう。勝手に動こうとする父のほうがよほど手が掛かり、問題を起こしている様子なのである。

リハビリ担当の医師から話を聞く。転院した当初、排尿のリハビリをするのでつなぎの介護服は必要ないと言った、あの少々男性っぽい女医だ。あの時は「うん。すぐ歩けるようになりますよ」という言葉に、希望を抱き心強く思ったものだ。

左側、気付きなし。視野狭窄と、そして感覚がないらしい。なので、夜間、尿意を催すと、自分で尿瓶を探すのだが分からず、混乱して裸になり、至るところに失禁し、歩いて女性の部屋の前に立っていたりするという。カルテを覗かせてもらったが、毎日のように下半身裸、下半身裸という文字があちこちに見られる。情けない。

おむつが嫌で外すのだから、布パンツにしてみてもどうかと、スタッフの話し合いが持たれるという。洗濯が大変にはなるけれど、下半身裸になって恥を晒すよりいいと思い、パンツに同意しておいた。

「病院としては治療としてすることはなくなるので、後は自宅でということになります」

これまで頼もしく思っていた女医の言葉に心の底で落胆した。家族の状況も聞かず、何でも突き放した言い方が出来るのかと思った。ちょうど、ケアマネジャーが居合わせたので、施設をお願いしたいと言った。しかし、空きがなければ入れないので、一、二ヶ月先の話になるだろうが、紹介はしますからとのことであつた。父が発症してから約一ヶ月。佐野病院はまだ二週間にしかならないのに、なぜ退院ばかりを迫るのか。途方にくれる。

(七月二十六日)

父は随分動けるようになって、話もする。すでに車椅子ではなくなっている。しかし、自分だけで歩こうとして膝折れしたという。以来、介護スタッフがジャージのパンツの後ろを掴み、必ず付き添って移動している。本人も昼間は分かっている、一人では歩こうとしない。が、夜は駄目らしい。相変わらず、センサーマットが敷かれ、ベッドの脇には柵が設けてあつた。

ベッドの横に小さなサイドテーブルがある。その上に小型テレビが置いてある。父がベッド脇の柵の間隙間をかくぐって降り、サイドテーブルの引き出しの中を何やらごそごそ探している。看護師がやってきて、尻餅をついている父を「あら、あら」といいながらベッドに戻そうとする。今度は柵が邪魔になって、重たい父を抱え上げるのに苦労している。隣のベッドとの間は狭く一人がやっとなので、私は手の差し伸べようもなく、見守るだけだ。

テレビを観たくてごそごそしていたらしく、テレビカードとイヤホーンを買ってきて、その使い方を看護師に教えてもらう。父はこれでテレビが観られると嬉しそうな顔をした。

はくおむつから布パンツに切り替わっているが、うまくいくかどうか……。自宅に引き取るよう言われても、排泄がこのままじゃ、とても無理だと思う。訪問看護があるとはいえ、夜間来てくれるわけではないし、夜中に頻繁に、ひどいときは三十分おきに尿意を催す父を、そのたびに介添えしてトイレに連れて行くなんて、体力的にも私にはとても無理だ。夜は寝せておかないと具合が悪くなる病弱の母と私で世話ができるはずがなかろう。三人共倒れになるのは目に見えている。

看護師がリハビリ担当の女医から自宅は無理だろうと聞いていると言った。それなのに、何で私には自宅でと言ったのか理解ができない。病院は治療の終わった患者をとにかく早く退院させて、次の患者を受け入れたいのだろう。

父は私の顔を見るたびに家に帰りたいと言う。

「どうやって帰れるね？ お父さんを抱えて、どうやって帰ればいいと？」と、私はいたまれない思いになる。持ってきた着替えをケースに収め、洗濯物をバケツから取り出したら、そそくさと帰る。父のその言葉を聞くのが辛いから。

母は母で、父の状態が全く認識できないらしく、「お父さんはいつ帰って来られると？」と聞く。

「お母さん。夜中にお母さんの横でさあ。一時間とか三十分おきにお父さんが起きてトイレに行こうとするのを抱えて行ける？ おむつをしても、それを自分で剥がして、あちこち失禁したらどうする？ それが毎晩よ。お母さん、面倒見れる？ 私は無理」

母は赤い目をして、首を横に振る。

また、しばらくすると、母が言う。

「お父さんはそのうち帰ってくるんやろう？」

「お母さん。お父さんが裸になって近所をうろついたりしたら、どうする？」

かわいそうだし、私もその都度辛い思いをするが、分かってもらわなくてはならない。母が父はもう引き取れそうにないと理解するまで、どれだけ繰り返さなくてはならないのだろう。介護疲れで自殺したり、無理心中したりというニュースが耳に飛び込む。私の脳裏にも横切ってしまう。父を自宅に引き取れば、どうなるか？ 分かりきっている。

ここから、私はしばらく日記に記すことを止めてしまった。そして、病院に行くのも止めていた。辛い日々だったから。兄と兄嫁は入れ代わり立ち代わり、父の見舞いに母を連れ出した。私は母に洗濯物がベランダのバケツの中にあるから、彼らに持って帰ってもらってよと何度も言ったので、それが伝わったらしく、やっと彼らはそうするようになった。週に二回、平日は兄嫁のパートの休日、そして、土曜か日曜は兄の休日が母を誘い出しての父の見舞い日だ。

私が病院に行くときは具合悪そうにして腰を上げない母が、彼らの誘いには嬉しそうにいそいそと付いていくのが、たまらなく情けなく孤独だった。兄たちは私が彼らの仕打ちにいたたまれなくなって、この家から出て行ってしまうように仕向けているように思えてならなかった。父

に「こんなことがあったよ。どう思う？」と泣きついていきたい思いだが、すでにそれを受け止めてくれる父でもなく、母に対する恨みさえ芽生えて一人鬱屈した気持ちに沈んでいた。

あの電話以来、私は二人を許せず、部屋に閉じこもって出て行かなかった。彼らもそれを承知していたのだろう。いつも玄関先で母を迎え、帰りには、門の外で母を降ろした。

また、ある日、兄が母を送ってきて、玄関に洗濯物を入れた袋を置いて帰った。私は無性に腹が立って、なんでこんなことをするのかと母に詰め寄った。母は厚子さんが町内会の役員か何かで忙しいらしいからという。私は母に、「見舞いに行った者が洗濯物を持って帰るべきじゃないの」と言った。人の気持ちを逆なでするのもいい加減にしてほしい。

そして、更に私の気持ちをズタズタにする出来事が起こったのだ。

八月に入ったばかりの暑さ厳しいある日のこと、兄嫁が母を連れ出したまま、何時になっても帰ってこない。普通ならば夕方には戻っていたのに。行く先は病院だし、まさか、町中で母を放り出すことはないだろうし。門前で車から降ろされて、玄関までのほんの短い距離ではあるが、途中で倒れているのではあるまいか、と何度も窓から外を覗いてみた。とうとう暗くなって、これはS市の彼らの家に連れて行ったなど確信した。八時か九時をまわっていたらどうか、電話してみると、澄ました声で兄嫁が出た。「お母さんは？」と聞くと、母も明るい声で出て、あっけらかんとここに泊まるという。私はプツツン切れた。

「お母さん、何で何も言わずに行くの？ どれだけ心配したと思う？ 泊まる用意はしていったの？ そのときに何で言わないの？」

母は「ごめんね、言わなかったかねえ」と言いながらしょぼんとした様子だったけれど、私は怒りが治まらなかった。怒りをぶつけるべきは兄嫁だったのだろうが……。

次の日の夕方、兄嫁が送ってきて、門のところで母を降ろしている。兄嫁の「じゃ、また来週」などという声が聞こえる。母は気まずそうな様子で玄関に入ってきた。

その後、聞いた話によると、二階の部屋も空いていることだし、S市の彼らの家に来ないかと言われたらしい。ところが、次の日は早朝から兄嫁はパートに出、兄も仕事に出て行き、母は一人で留守番させられたのだ。頻繁に具合の悪くなる母が二階に一人きりでどうなるというのだろう。階段を上り下りしてトイレに行く母の姿を私には想像も出来ない。母が泊まることなどめったにないことなのに、パートぐらい休めばよかろうにと思う。昨夜の電話で、何も言わずに向こうの家に行ったことを私が責めたにもかかわらず、母は一人きりで考えたのかもしれない。本当に心配し、世話してくれるのはどちらの方かと。結局、母は住み慣れた家のほうがいいと答えたそうだ。

そして、そんな母の連れ出しもたったの二週間ほどで雲行きが怪しくなった。兄嫁が何やら忙しいといって回数が減ってきたのだ。結局、父の洗濯物は私がするというスタイルに戻った。

そんなゴタゴタの間も私は多忙だ。早く、次の受け入れ先を探さなくてはならないのだ。脳梗塞で倒れた場合、リハビリの病院は三ヶ月で出される決まり。その後は介護老人保健施設へ三ヶ月。そして、自宅に帰ることになるが、自宅での介護が難しい場合は、介護老人福祉施設つまり特別養護老人ホームに入所するという仕組みらしい。生身の人間、一人ひとり状況は違うはずなのに、そんなに計算どおりうまく行くものかと思う。

父の場合、問題が多いのでなお難しい。ケアマネージャーは父の状態では、認知症対応の介護老人保健施設でないと受け入れてもらえないという。あちこち打診してくれているが、特に自分で勝手に動き回るので転倒の危険が大であることと、例の脱衣がネックで断られているらしい。どこも夜のスタッフが少ない事情があり、エレベーターなどに鍵が掛かるようになっていないと受け入れは難しいというわけだ。その中で二箇所受け入れてくれそうなどころがあるので見学に行ってほしいという。併せて、老人ホームの見学、申し込みもするようにはいうものの、ケアマネはホームをさらさら当てにしていけない様子だ。ホームはなかなか入れるものではないらしく、運よく空きが出ればという話で、何箇所か駄目目で申し込みをしておけばいいでしょうという具合だった。

(八月二十日)

ケアマネが受け入れてもらえそうだと書いていた二箇所の施設に午前、午後と分けて行く。午前中に行った佐倉ステーションというのは、昔からある隣の精神病院の併設で認知症対応になっている介護老人保健施設で、たぶんOKでしょうと言われて行ったところ。すべては病院から内容は渡っているはずなので、脱衣のことも正直に話したが、感触は良かった。そのうち、父の面接に出向くという。

午後には佐野病院の近くの介護老人保健施設に行く。特別認知症対応にはなっていないらしいが、電話では悪い感触ではなかったそうだ。施設の相談員がにこやかに館内を案内してくれた後、事務所で話をするうち、脱衣のことを言ったとたん、彼女の対応が激変した。さも汚らわしそうに、「うちをご覧の通り、女性が多いので受け入れられません」と言った。前もって聞いていたはずではなかったか。こちらも身を硬くして言った。

「自宅では無理、施設も受け入れてくれない。それではどうしたらいいんですか」

彼女は気の毒そうな顔になって、老人ホームもいろいろありますから、そちらを探されたらという。すぐにホームに入れるのなら苦労はないし、とうに探しているしと思いながら、早々に施設を後にした。その足で、佐野病院へ。ケアマネに報告する。断られた二件目については、「電話で伝えてはいたのですが……」と申し訳なさそうな顔をした。

佐倉ステーションのほうは感触が良かったのでまだしもだったが、それでも帰りの車の中で情けなくて涙が出た。たぶんだと思うが、父にわいせつ行為をしているつもりはないのだろう。日赤から佐野病院に移ってからは、看護師に妙なことをする様子はない。夜間尿意を催した父は、便器を探しても朦朧としてか視野狭窄のためか見つけられなくて、間に合わず漏らしてしまったり、見つけても不自由な手でうまく出来なくてこぼしたり、混乱してトイレに行こうとして、汚したおむつが気持ち悪くて剥がしてしまい、ついでに汚したパジャマの上着も脱いで真っ裸になって……。夜間少ないスタッフが駆けつける前に、真っ裸のまま、左半側空間無視の父はかすかに見える右側へ右側へと訳も分からずさまよって……。

女性の部屋の前に真っ裸になって立っていたというが、病院も施設も女性の部屋のほうが多いのだ。女性のほうが長生きなのだから。父は決して女性の部屋を探しているわけではないと思う。隣のその隣の部屋も女性の部屋じゃないか。かわいそうに、混乱してか朦朧としてか、不自由

な手足と目で……。

しかし、赤の他人が見ると、ギョツとするのも仕方はない。私も初めて聞いたときには、父も壊れてしまったとショックを受けたのだから。

(八月二十四日)

特別養護老人ホーム二箇所に見学、そして申し込み。

ホームの相談員に認知症のことを話すと、八十歳過ぎれば多かれ少なかれ認知症にはなりますよと慰め顔で言われた。なので、別に支障はないと。ただ、男性が全体の一、二割なので部屋数も少なく、なかなか空きも出ないとのこと。二年も待つ事があるとも聞く。

(二年も……)

気が遠くなる思いだ。それまで、どうすればいいのだろう。それに、介護度の重い順に受け入れられるらしい。父は要介護四と認定されてはいたが、最初は期間が半年で見直しとなる。身体の動きとしては日々良くなっているのに、介護度は軽くなる恐れがありそうだし、父の番が回ってくるのはいつのことやら……。しかし、数打ちや当たるかもしれない。その他二箇所に申込書を郵送した。

(九月二日)

先週は母の具合が悪く、兄嫁の誘いを断った。ゲエゲエ嘔吐し、何も受け付けなくなり、数日寝込んだ。酷暑の最中に、あなたたちが母を連れ出すからだろうと言いたい。その挙句、母の看病をするのは私なのだ。すると、兄夫婦はピタリと父の見舞いさえも止めてしまった。どういうつもりなのか、さっぱり分からない。

今日はかかりつけ医にもらっていた紹介状を持って、佐野病院で母の脳の検査を受けさせた。拒否し続けていた検査だったが、最近具合が悪いので自分でも不安になったのだろう。認知症がかなり進んでいるのではないかと心配だったが、かかりつけ医での診察では長谷川式の一七だった。まあ、中等度といったところ。しかし、一緒に住んでいるからこそ分かることがあるというものだ。母の介護認定の結果は要支援一であったが、デイサービスを嫌がって何も利用できないでいる。

(九月三日)

佐野病院での母の検査結果をかかりつけ医から聞く。年齢相応の脳の萎縮があり、過去の軽い脳梗塞の後も見られるとのこと。結局は、まあ、年齢相応でしょうという結論だった。それを聞いて、母はすっかり安心している。「脳は何とも無かった。立派なものと言われた」と。自分に都合よく解釈し、その言葉だけしっかり記憶している。私は立派なものとは聞いていないが……。母はその後、アルツハイマーの進行を唯一遅らせることができるかもしれないという薬が追加された。

父の施設探しに母まで入院して

(九月六日)

兄夫婦が家にやってきた。母の様子を見に来たのだろう。

あれから後、母は相変わらず良くない状態だ。母は自分の具合が悪いのは父の事を心配してのことだと言う。しかし、私と兄たちの仲が険悪なのも母に悪影響を与えているだろうと思わずにはいられない。兄妹げんかをしている場合でもないだろうと一時休戦のつもりで、私のほうから兄に電話をし、以来、母の様子や父の施設申し込みの経緯などを報告してきた。兄は電話で「おふくろをこちらに引き取り、おやじはこちらの近くの施設に入れようと考えている」と言っていたが、母は絶対嫌だと言っている。

兄に検査結果を見せる。兄がそれを兄嫁に渡そうとすると、彼女はすでに同じものを見たと言った。先週、佐野病院で母のことを医師から聞き出したらしい。母は兄たちにも「脳は何とも無かったよ。立派なもんと言われた」と言っている。兄嫁は無言のまま、検査報告書の内容の箇所を兄に指差している。兄はうなずきながら母に、「前に心臓の手術をしたときも、医者に言われたとったもんね。塊が脳に飛んで、脳梗塞になることもあるって。これにも脳梗塞の後があるて書いとうしね」しかし、母は聞く耳を持っていない。年相応という言葉のいい意味に解釈している。母の年相応は八十歳半ば相応の萎縮した脳ということなのだろうが……。

兄嫁は終始無言で不機嫌そうな顔だった。兄嫁とはガチャンと電話を切られたあの日から、一切話をしていない。謝る気もないらしい。

(九月十五日)

母の体調が依然悪い。今日は佐倉ステーションの人が、十時半に佐野病院まで父の面接に来る予定だ。それに私も立ち会わなければならない。その前にかかりつけのクリニックに立ち寄り、紹介状を書いてもらい、それを持って母を佐野病院の外来に連れて行く。そこに母を預けて、私は父の元へ行く。父は眠っていた。十三日に来たときも眠っていたし、最近は昼間寝ている事が多いようだ。起こされて大声を出さなければいいがと思いながら、父の寝顔をぼんやり見ていると、佐倉ステーションのスタッフ二人が病室に入って来た。声を掛けられて起きると、少し機嫌が悪く不審そうな顔をしていたが、何とか穏やかに二人の話しかけには答えていた。

その後、別室で佐野病院のケアマネと私が同席する中、看護師からの聞き取りが始まった。問題点はまず転倒の危険。センサーを設置してはいるものの、父はたまにそれをかいくぐりすり抜けて動き回るのだという。特に夜は時間おきに起こしてトイレに連れて行くようにしているのだが、自分で勝手に起き出すこともありスタッフを困らせている。前に膝折れしたこともあるので、介助は必要とのこと。

次に問題になったのは、服用されている睡眠薬。佐倉ステーションのスタッフがそれをしきりに気にしている。かなり強い薬らしく、うちではこれほどの薬を使っている人は他にいないし、睡眠薬の調整は施設では難しいのだと引っかかっている様子だ。佐野病院の看護師は、最近、昼夜が逆転しているので睡眠薬の服用はやむを得ない。それでも、夜中頻繁に起き出し脱衣、失禁がある。そのため、昼間に眠る事が多く、食事だ、リハビリだと起こされるたびに機嫌が悪く、

時には大声を出したり抵抗したりという事がある。利尿剤の影響で頻尿になっているとも考えられるというが、それも心臓が悪いため、むくみがちなので必要なことなのだろう。

(大丈夫だろうか？ 受け入れてくれるだろうか？)

私はひやひやする思いで彼らの会話を聞いた。看護師は「普段はとても紳士なんですよ」と、付け足しのように言ったが……。別れ際、佐倉ステーションのスタッフに「他に頼るところがないので、よろしく願います」と頭を深々と下げた。

その後、母の元へ行く。車椅子に座らされ点滴を受けながら、あちこち検査につれまわされていた。医師の話では、入院を勧めたが嫌だと断られた。はっきりと自分の意思をお持ちですと医師は笑いながら言った。

「心臓には一応異常はありません。何かあればすぐに言ってください。血圧が上がったり、下がったりは年齢的にも仕様がなんでしょう」

うつむいたら胸が苦しいので髪が洗えないということに対しては、

「もしかしたら、バイパス手術を受けた血管が狭くなっているのかもしれないですね。ですが、この年齢ではもう手術は無理でしょう」と。

脳の検査でも年齢相応。認知症が中等度というのも年齢相応。体調が悪くなるのも年齢ゆえ。年を取るということはこういうものかと思う。午前十時過ぎから午後二時近くまで、長い点滴が続いた。それが済んで、父の元に母を連れて行く。

父はホールにいた。私の顔を見るなり、「散髪に連れて行ってくれ。あのT駅近くの」と言う。

(えっ?)

父を毎月散髪に連れて行っていたのは今の家の近所で、T駅近くというのはもう数十年前に住んでいた所の話だ。父はいつの時代に戻っているのやら。この佐野病院に出入りの理容師に二度ほどやってもらっているのだが、気に入らないらしい。

「外には行けないから、来てくれるように予約しとくからね」と何とかなだめすかし、佐野病院の理容師の予約を入れて帰る。母は父の辻褄の合わない話を横で聞いても、別に驚きもせず気にも留めていない様子だった。

(九月十七日)

昨日、佐野病院よりおむつが無くなりそうとの電話があった。排泄のリハビリのため、長く布パンツだったが、このごろは諦められたのか、おむつに戻っている。暑い最中、黄色や茶色に変色した臭いパンツの洗濯は大変だった。兄嫁が洗濯してケースに納めていたパンツは色を残したままだったが、私はそんなことはしたくない。まず汚れに洗剤を振りかけ予洗いして水で流し、漂白剤と洗剤に一晩付けてから本洗いし、真っ白に戻して返したものだ。

午後、着替えと買ったおむつを持って病院へ。父はホールの定位置にいた。今日は機嫌がよい。十一月七日を楽しみにしているのだという。その日は父の誕生日。毎年十一月に、兄の家で上の姪の誕生日と併せ、親戚が寄ってお祝いをしていた。姪たちがその話をしたのか、それとも、ひよいと自分で思い出したのか。「連れて行ってくれね」と何度もいう。私はあいまいに返事を

しておいた。私に行くつもりは毛頭ない。向こうが連れて行ってやるのだったらそうすればいいし、私には関係ないことだ。

「苗を買っておいてくれ」とも言う。父は家の裏にわずかな場所だが畑を作り、夏野菜を栽培していた。それを思い出したのはいいが、驚くべきことを口にした。病院での食事に自分が作ったきゅうりやピーマンが出てくるのだという。

「わしが知らんと思っとるようやが、わかっとる。今日もきゅうりを刻んだのが出てきた。この調理師が勝手に使っとったい」

「……。おいしかった？」と聞くと、「うん、ここのは何でもおいしいよ」と言う。

「おいしいなら、いいじゃない」

「うん、使ってもらっていいとよ」

作話というのがこれだろうか。わざと作り話しているのではなく、全く思い込んでいるのだ。下手に訂正するのは混乱してよくないと何かで読んでいたので、調子を合わせたが、何だか悲しくなる。

(九月十八日)

五時前、佐倉ステーションより電話あり。

会議での問題点一つ目は転倒のリスクが高いこと。問題点二つ目は昼夜の逆転。この二つがネックになり、受け入れは無理とのこと。いかにも申し訳なさそうに弁解をする。いまさら弁解されても、決まってしまったことは仕方がない。

「そうですか。分かりました」

それだけ言って電話を切ったが、ショックで泣いてしまった。当てにしていた唯一のところだったので、もうどうしたらいいのか分からない。気持ちが治まらないまま、母に断られた旨告げる。母に動揺を与えてしまうことは分かっていたが、同じ屋根の下、隠せる状態ではなかった。しゃくりあげて泣く私を見て、母はどういう気持ちだったろう。

(九月二十日)

甥夫婦が子どもを連れて父を見舞った後、家に寄った。母は六月二十三日に倒れたときの父の印象しか残っていないらしく、呼びかけても返事もしなかったという話ばかりをした。

そのとき、母に優太の嫁がこう言った。

「でも、お祖母ちゃん。おかあさんが見舞いに誘ってくれて病院に連れて行ってくれたからよかったですよ。お祖父ちゃんの様子が見れて。ちゃんと分かるようになっていたでしょ」

私は台所でそれを聞いて、ムカツとした。私がすでに母を連れて行って、父とも話をさせてやっている。私は母の具合のいいときを見計らってそうやってきた。暑い最中、兄嫁たちが頻りに母を連れ出したおかげで、母の具合がここまでひどい状態になったのではないか。

(ここは、この人にはつきり言っておかなくちゃ)

優太の嫁が台所に立ってきたとき、私は言った。

「あのね、母の具合が悪くてね、きついきついと言うし。だから、連れ出さないでほしいのよね。後で具合が悪くなるからね」

彼女は私の顔を見て、「ああ、そうですか。綾子さんにはきついつて言うんですね」とただ頷いた。私はこの頃から、彼女に何でも話をするのは考えものかもしれないと思った。兄夫婦とのいざこざに何やらこの人が関係しているのではと怪しんだのだ。介護保険の件にしても……。兄嫁と未樹とこの優太の嫁がどんなおしゃべりをしているものやら、分かったものではない。

(九月二十六日)

母、佐野病院にて診察。

嘔吐して食事の入らない日が続いていたが、とても病院に連れて行ける状態ではなかった。頭を少し持ち上げるだけで吐き気を催すらしく、起き上がれない。仕舞いには吐くものもなくなって、苦しそうにえずくばかりだ。救急車を呼ぼうかと言っても嫌がり、様子が治まるまで待つしかなかったが、今日やっとのことで連れて行けたのだ。翌日から訪問看護に来てもらえることになった。これで、これからは自宅で点滴を受けることができる。父の施設の相談に乗ってくれている当病院のケアマネが手配してくれた。

佐倉ステーションの断りはケアマネにとっても思いがけなかったようだった。また別のところを探しますからと慰めてくれた。彼女は私が倒れたら大変だからと、誰よりも私のことを心配してくれる。

(九月三十日)

二十七日から四日間、家に看護師が来てくれて母の点滴が続けられた。父のことだけでも大変なのに、母もこんな風で、どうしたらいいのだろう。週二回は佐野病院に父の洗濯物を取りに行き、家では母の看病をしながら山のような洗濯物と格闘する。どんなに腰が痛くても、どんなに疲れていても、私しかする人が居ないのだから仕様がなない。

(十月二日)

母の具合が悪く、佐野病院に連れて行き診察を受ける。入院したほうがいいだろうとの診立て。

(十月三日)

午後、とうとう母まで佐野病院に入院した。何しろ、食事が入らないのが何日も続いているし、随分母も痩せたみたい。個室に入れたので、トイレに行くのは不安だろうからと、ポータブルトイレを置いてもらった。

(十月五日)

父受け入れの施設に松川園の紹介があり、面接に出向く。

ここも認知症対応の施設だ。隣接する大きな総合病院が母体で、もしものときは病院のほうに入院も出来る。佐倉ステーションのときのような病院での父の面接は無く、すべて文書でのやり取りで、詳細は佐野病院から伝わっているらしい。

初めて見たそこは暗く陰気なところだった。家から四、五十分も車で東に走った山のふもと。

何しろ分かりにくく、何人もの人に道を聞き、やっとのことで着いてからも入り口が分からない。掃除をしていた人に聞いて、ぐるっと回って階段を上がって、更に右に左にと迷路のようなどころに行く。途中、裏口かと思われる扉の上の両角にそれぞれ、左にからず、右にこうもりか何かの剥製みたいなものがぶら下げてある。何とも、気持ち悪い。一体何のおまじないだろう。

やっと玄関にたどり着き、松川園の支援相談員と面会。こうなったら、どんなに気持ちの悪い陰気なところでも仕方がない。わらにも縋る思いで、よろしくお願ひしますと頭を下げた。ここに断られたら一体どうすればいいというのだ。

午後、佐野病院に。ケアマネに報告。彼女には、本当にお世話になった。

(十月七日)

松川園からOKの電話あり。ほっと一安心。良かった！！

連日、佐野病院の父と母の病室をはしごで見舞いだ。母に松川園OKの報告をする。母も安堵したようだ。思えば、佐倉ステーションに断られ、あまりのショックで私が泣いてしまってから、母の具合も最悪になったようでもある。母なりに心を痛めたのだろう。

(十月九日)

今週は松川園と、佐野病院内でも父と母の両方に行くのに、何とも忙しい。

丁度父の病室に行ったとき、いきなり父が起き上がって、トイレに行くという。センサーが設置してあるので駆けつけてくれるはずだが、同室の別の患者に一人掛かりきっていて、父の元へは誰も来ない。私もどうしていいのか分からない。

「あー、間に合わんやった。あーあ。ほーら、間に合わんやったろうが」

やっと来てくれた若い男性ヘルパーがカーテンを引いて、父のおむつを取り替え粗相の後始末をしてくれた。父の孫ぐらいの年の青年である。いくら仕事とはいえ、人の親のお尻を拭いてくれるのだ。私は申し訳ない思いで、彼に「ありがとうございました」と言って頭を深々と下げた。父の様子を覗くと、顔をしかめ目をぎゅっと瞑り、口を一文字に結び、ベッドに仰向けのまま微動だにしない。私は着替えをケースに収め、洗濯物を取り出して、そっと帰った。

父の便通を整えるため下剤を服用しているらしいが、調節が難しく、緩むことが多いようだ。父は粗相したのが悔しかったのに違いない。九十四歳まで、自分のことは自分でやってきた父だ。誰の世話にもならんと胸を張っていた父。我が家と庭をこよなく愛し、この先自分ひとりになったとしても兄夫婦のところに行こうとしなかったであろう父。それが今では身体が自分の思い通りにならず、失敗をし人の手を煩わしてしまうことが、きっと情けないのだろう。認知症の数値は徐々に上がっていて、今は一五ぐらいまで回復している。

(十月十三日)

松川園に契約の説明を受けに行く。今のところ空きがないので、もう一ヶ月くらい待ってもらうことになるという。

午後になって、母から佐野病院を退院するとの電話が入り、迎えに行く。医師はもう少し入院させたかったようだが、母が帰りたいたいと言うので、急遽退院となったのだ。父も母もよっぽど家

が恋しいらしい。十日そこそこの入院だったのに、家までの帰途、「懐かしい、懐かしい」と連発する。

(十月十七日)

兄に家に来てもらい、松川園に提出する契約書の連帯保証人のサインをもらう。父が十一月の誕生日パーティのことを楽しみにしているので、どう答えたものか困っているという。ということは、彼らが先に言い出したのではなかったのだ。元より兄は、S市の家に連れて行くのは無理と見ているようで、父がおむつを替える様子を子供たちには見せられんと言った。

(十月二十日)

これ以上、母の認知症が進まないように、とにかくデイサービスを利用したいと思う。家の近くの睦み庵に見学に連れて行く。

環境の変化がいかに悪いかを、退院後の母を見て痛感した。自分の部屋の雨戸を閉めるのに、暗い中座り込んでいる。どうしたのかと聞くと、閉め方が分からないという。ストッパーをどうしたらいいのか分からないらしい。お風呂の焚き方も分からなくなっている。スイッチ一つなのに、驚いてしまう。また、それまでは、週二回ほどの炊飯は母がしてくれていたのに、どう炊くのか分からないと言ってやめてしまった。認知症が急激に進んでいた。

デイサービスは以前、別なところの一日体験に行ったのだが、「嫌だ。帰る」と言っているとの電話で、仕方なく迎えに行った。そこは曜日ごとにいろんな趣味を楽しむようになっていて、午後は講師が教えにやって来る。私なんかは、いろいろ学べていいなと思うのだが、母はもうそういうことに興味はないらしい。昔は編み物や刺繍など好きなことをやってきたが、いまさら何もしたくないそうだ。こちらは、母の認知症が進まないようにと懸命なのに。人の気も知らないでと少々腹立たしくなる。

今度の睦み庵はアットホームな、ゆったりとしたところのようで気に入ってくれそうな気配、かな？

(十月二十三日)

父がインフルエンザの予防注射を受けるというので、問診表を書きに佐野病院へ。

背が高く細身のベテランらしい看護師が受け付けてくれた。彼女はこの病棟の看護師長で、父が昼夜逆転しているので、昼間起こすと機嫌が悪く大声を上げ、暴力を振るうのだと訴えた。「私も引きました」という。どこまでの暴力なのか、ただ介護の手を振り払ったのがたまたま当たったのか、それとも積極的意思を持った暴力なのか？ しかし、聞く勇気もない。

また、それ以上に驚いたことには、カーテンに便を塗りつけるのだという。父のベッドは部屋の一番奥の窓際にある。これも朦朧とした中でやっているのか、それとも、分かっているのか？ 「しばらく、カーテンを外していました」という看護師長にただ、お世話をおかけしますと頭を下げるしかなかった。

(十月二十七日)

最近、父のお腹が緩みがちらしく、何とかいう防水の介護シーツを買い足してほしいと看護師が言う。今までも、その汚れたシーツが洗濯物と一緒に出されていたので、病院のものかと思っていたら、どうやら兄嫁が言われて買ってきたものらしい。どこで買えばいいか分からないので、兄に電話して頼んでおいた。

やっと施設に入所。父の拒否反応は激しく

(十月二十九日)

松川園の入所が十一月十四日に決まった。迎えは来ないので、こちらで何とかして連れて行かなければならない。佐野病院の退院は前日の夜。病院の夕食を済ませて、ぎりぎり七時ぐらまで大丈夫ですよとケアマネが言う。一日のうちで一挙に退院と入所というわけにはいかないらしく、一晩は自宅に泊まることになっているという。何でそういう決まりになっているのやら分からない。

松川園で必要となる諸々を揃える。持ち物にはすべてフルネームをつけるようにとあるので、父の上着や寝巻き一枚一枚に刺繍で下の名前を付け加え、下着やタオルなどにはマジックで書き加えた。規定数に足りないものは買い足し、荷物は小さめの衣装ケース二個と、大きな紙袋二つにもなった。

当日の段取りをいろいろと考えてみる。六月に父が倒れてから、押入れに押し込んだままの父の布団をまず取り出して干さなくては。おむつの処理のためのビニール手袋や濡れティッシュに消毒液、防水の介護シートにポリバケツに……。朝食は簡単にパンと野菜サラダにしよう。ケアマネは何を食べさせたらいいかと悩む私に朝一食くらい食べさせなくてもいいですよと明るく言ってくれた。松川園には午前十時までに入り、入所手続きがあるので、そのときに必要な書類を漏れがないかチェックする。

それにしても一泊する以上、そして、これら荷物と父を抱えて私一人では絶対無理に決まっている。ケアマネもそれは分かっている、一日のうちに直接移動できればいいのですが、と言っていたがやはり駄目なようであった。

(十一月四日)

父が「もうすぐ十一月七日やね。連れて行ってね」と笑顔で言う。

「私は行かないよ。向こうから迎えに来るやろう」と逃げた。

「あんたは行かんとか？」と少し寂しそうな顔をした。

兄たちと一度は険悪な状態になったものの、そうは言っても兄とは血の繋がった兄妹でもあり、母の具合も慮って父母のことを通じて話をするようにはなった。しかし、兄嫁との仲は回復していない。連絡もすべて兄に直接している。「ガチャン」と電話を切られ、その後母を連れ出し続けたあの仕打ちをどうしても許せない。一言の謝罪の言葉もないし。いや、彼女は悪いことをしたとは思っていないのかもしれない。人の心を解さない、そんな人だ。

(十一月五日)

母の診察で佐野病院へ。その合間に父のところに着替えを持って行く。

同室に新しく入った患者のそばに、いつもその奥さんらしき人がピタリと寄り添っている。周りに人が居ても全く気にせず、夫の顔をいとおしそうに撫でている。

「ひげが伸びたねえ。剃ろうかねえ」と電気かみそりを夫の頬に当てる。老夫婦二人だけの世界に浸っているようだ。行くたびに同じ光景を見る。何とも、あわれ。

(十一月十日)

佐野病院に洗濯物を取りに来るのも今日が最後だろう。同室の患者の奥さんが私に声を掛けてきた。

「お父さん、ホールで楽しそうにしてありましたよ」

「ああ、そうですか。でも、昼間寝ている事が多くて、起こすと機嫌が悪いそうです」

「あー、さっきちょっと大きな声を上げてありましたね」

この人の夫は父より一週間ほど早く入院したのに、最近になってやっとベッドから離れられるようになった。これからどうするのかと聞くと、まだ入所先が決まらないという。

「本当はもっと早く退院させられるんですが、よく長いことおらせてもらいました。これからは、ここの病院内にあるショートステイと自宅とを行ったり来たりします」

「父は夜が大変なものですから。自宅ではとても」

「うちもですよ」

「……」

返す言葉もない。私だからこそ、施設探しに奔走できたが、母だけではどうにもならなかったはずだ。ケアマネは紹介してくれるだけで、実際の見学や申し込み、手続きなどはすべて家族が動かなくてはならない。そういえば、ケアマネが私に言っていた。「チャッチャッと動いてくれるから、助かります」と。年老いた奥さん一人では、そうはいくまい。これからの老老介護はさぞや大変なことだろうと、心が痛んだ。

父も結局、施設が見つかるまで四ヶ月ちょっと入院していたことになる。最初から退院を迫られ続けて、心休まることがなかった。松川園はずっといてもらってもいいのだという。月々の施設代がかなり高くつくのだが、そんなことは言っておられない。受け入れてくれるだけで、何ともありがたいことだ。父が長生きして、預金を取り崩して無くなってしまえば、そのときはそのとき。家を担保に借金すればいいじゃないか。

(十一月十三日)

父、佐野病院退院。

夕食が済んだ頃を見計らって迎えに行く。今日は家に一泊し、明日朝松川園に入所となる。私一人では無理なので、兄がこちらに来てくれるか、それともS市の家で一晩世話してくれないかと、期待はしていなかったが一応頼んでみた。やはり、いい返事ではなく、結局、兄にこちらに泊り込んで手伝ってもらうことになった。今日は仕事で遅くなるので、病院の迎えには兄嫁に行かせるという。明日のことも最初は健康診断に行くことになっているからと渋っていたが、代わりに優太君に来てもらえないかと聞いてみると、「子どもまで巻き込みたくない」という。

(巻き込みたくないって。それ、どういう意味？ 孫が祖父母のお世話をすることが悪いこと？)

彼らの口から飛び出す言葉に驚く事が多々ある。結局、兄は都合をつけたらしいが、今日は仕事で遅くなるからと、病院へは兄嫁が来ることになったわけだ。

早目に行って、退院手続き、荷物の整理をしているうちに、七時を過ぎた。病院のスタッフが何だか迷惑そうな顔になってきたとき、やっと兄嫁が姿を現した。すでに外は暗く、かなりの雨が降っていた。彼女が運転してきた車は最近買ったばかりという大きな新車だった。乗り口が高いからと気にしながら、看護師に手を貸してもらって父を乗せている。私は自分の軽自動車に荷物を載せて後を追う。

夜遅く兄がやってきて、お寿司を買ってきたと拵げている。こちらは父を迎えに行く前に食事は済ませているし、明日の事も気になるし、母の具合も心配で、二人とも早く寝せたいのだが……。十二時を廻ってもなお、母まで興奮してか、いつまでも四人で話をしている。

「お母さん、大丈夫？ 早く休んだほうがいいよ」と声を掛け、ふと見ると、母の為に買い置きしていた、母が寝る前にほんの少量飲むワインを勝手に見つけて、栓を抜いて飲んではいないか！

「明日は早いし、車の運転もあるんだから、酔っ払ってもらったら困るんだけど」

「俺が酔っ払うと思うか！」

兄は法律が厳しくなる前まで、平気で飲酒運転していた。私は自分自身全く飲まないし、酔っ払いが大嫌いなので、そんな兄が理解できない。心の中でやれやれと思いながら、兄に父の夜の世話を頼み、念のため準備した尿瓶や、おむつを始末するためのポリ袋などの説明をして、私は部屋に引っ込んだ。

母の寝床は応接室にテーブルや椅子を片隅に寄せて用意していた。元の父母の部屋に父の寝床、その横に兄が寝る布団を敷いた。この日まで、必要なものをあれこれかき集めて衣装ケース二個に紙袋二つに詰め込んで準備万端整えてきた。その上、二人が泊まるというので、父のと併せ、三組の布団を干したり、乾燥機をかけたりして大変だった。そんな苦労へのねぎらいもない。まあ、私のことはいい。しかし、病気の父母を労わることもなく、夜遅くまで病人を付き合わせてワインを飲んでいる兄と兄嫁には、心底呆れてしまう。

(十一月十四日)

朝、簡単にパン食の準備をする。兄はすでに起き、居間でテレビを見ていた。兄嫁は部屋でまだ寝ている。兄は一睡もしていないという。布団の上で尿瓶を使えばいいように、防水シートを敷き用意をしていたが、父がトイレに行こうとするものだから、その都度抱えあげて連れて行ったのだそうだ。夜中に三度起きたという。病院に聞いていたより回数が少ないが、眠りに着いたのがそもそも遅かったのだから、結局一、二時間おきだったということだろう。ベッドと違い、腰の悪い父を布団から抱き起こすのは大の男でもかなりの重労働だ。介護の大変さが身に沁みたくに違いない。夜中、父が急に大声で、「家の様子が違う！」と叫んだらしい。今の家は四十年ほど前に建てたもので、それ以前はT駅近くに住んでいた。もしかしたら、昔の家のことしか覚えていないのかもしれない。

最近私が病院に行っても、昼間は眠ってばかりいた。起こすと機嫌が悪く、大声を出したり暴力を振るわれましたという看護師の話も聞いていたので、無理には起こさなかった。なので、松川園のことは何も話せないままだった。どうやって理解させたらいいのか分からなかったし、松川園に行くのを拒否されるのが怖かったのだ。昨夜佐野病院に迎えに行ったとき不思議そうな

顔をしているので、退院して明日は施設に移るからとは話しておいた。しかし、分かったのやらどうやら……。

兄と朝食を簡単に済ませた頃、兄嫁が起きてきた。私が父の食事の用意をして、部屋に持っていくと、兄嫁はさも自分で用意をしたかのように、父に寄り添い食べさせ始めた。父が「うん、おいしい」と言うと、「よかった！」といいながら笑っている。勝手にさせておいた。

家を出る時間になったので、兄嫁には家に残ってもらって、兄と私と父の三人で兄の車で行くと思っていると言うと、兄嫁も一緒に行くという。

「厚子を残さないかん、何か理由があるとか？」と聞く。つまりは、松川園で解散してそのまま帰りたらしい。一人残す母のことが頭をよぎったが、仕方なく、私も軽を出すことにした。

母はまだ寝ている。昨夜は相当興奮していたし、かなり遅くまで起きていたようだから、大丈夫だろうかと気になりつつも、行ってくるからねと声をかけて家を出る。

彼らの新車に父を乗せ、私も軽を置いているところまで乗せてもらった。乗り込むのに苦労するぐらい大きな車だ。駐車場で降りるとき、足が地面に届かなくて飛び降りた。足が短いから届かないと笑いながら言ったが、内心こんな大きな車を買う気が知れないと思った。少なくとも、年老いた親を病院などに送り迎えできる車ではなかった。兄は百九十センチ近い長身で最近ではメタボの大男、兄嫁は更にメタボで二人一緒だとかなりの威圧感がある。この大きな車は二人の体格相応と言ったところか。私のほうはというと、十五年以上前に買って乗り続けている愛車の軽で、分かりにくい松川園まで先導した。

松川園は三階建てで一階が一番状態が悪い入所者が入るフロアで、上に行く順に軽くなる。まず、父は二階に入ることになった。今までに二回来たが、そのときは分からなかった。今日はあちこちで絶え間なく「あー」「うー」と奇声が聞こえ、暗澹たる思いに襲われる。

看護師や栄養士、ケアマネなどと入れ代わり立ち代わり面談があり、契約書などを取り交わす。着いた時から不服そうな顔で周りを見回していた兄嫁が聞かれもしないのに「昔の人だから、気難しいところがありますよ。軍隊に行っていた人ですから」というのに、若い男性の看護師が「えっ、軍人だったんですか？」。

心の中で、ため息をついた。要らんことを言わないでほしいと思う。当時は民間人が嫌でも戦争に駆りだされたのだ。もちろん父は職業軍人ではなく、無理やり召集された被害者なのだ。これから世話になる、戦争なんて知らない若い人たちにわざわざ言うことはなかりうに。

看護師が書類をめくりながら、「暴力を振るわれていたと聞きましたが……」と言う。すると、兄嫁が「それは対応の仕方に問題があるのであって、私どもは暴力とは思っていません」と言った。私は何人もの看護師やヘルパーから聞いている。二十四時間交代で世話をしてきた人たちからの報告なのだ。たまに見舞いに行くぐらいの人が何を言うかと絶句する。全てを知りながら受け入れ、介護をしようとする人たちに印象を悪くして、何の得があるというのか。他は断られるところばかりで、やっと見つかった受け入れ先なのに、私の苦労など意にも介さず、要らず口ばかりをと腹が立つ。だから、今日はこの人に来てほしくなかったのだ。

手続きが済んで、ホールに座っている父のもとに行く。「えらい、待たせたねえ」と文句を言いつつ、一緒に帰ろうとする。診察か何かを受けにきて、終わればまた家に帰れるとでも思っていたのかもしれない。

「お父さんはここでお世話になるとよ。また来るからね」と、不服そうな父を置き去りに、兄たちとも別れ、松川園を後にする。ここは、高速の入り口のすぐ近くで、兄たちにとっては前より便利で距離も近くなるはずだ。

(十一月二十日)

松川園では水、土曜がお風呂の日だが、洗濯物を取りに来るのは一週間か二週間に一度でもいいですよと言われ、気になりながらも六日ぶりに行った。相談員から入所以来父の機嫌が悪いので来てもらえないかという電話も入っていたが、私自身疲れが溜まっていたし、正直松川園に行くのは憂鬱だった。

私の顔を見るなり、「やっと来たか」と、ベッドに寝たまま頭だけもたげて言う。相当ご機嫌斜めだ。よくも今までほったらかしにしておいたなみたいな、さあ、帰るぞと言わんばかりの勢いである。耳の遠い父に分からせるには、こちらも大きな声を出さねばならない。まるで、けんか腰みたいだがやむを得ない。

「どうやって、お父さんを抱えられると？ お母さんも具合悪いし、私とお母さんじゃ世話できんでしょ」

兄なら抱えてもらえると思ったものか、「京次は仕事を辞めんとか！」と大きな声で叫ぶように言う。

「まだ、家のローンがあるから、辞められないって」

「あー！ 何て？」

若い女性相談員は恐れをなしたのか、部屋を出て行ってしまった。

「何で、家に帰れんとか。こんなところに放りっぱなしにしてから！」

積もり積もった不満を爆発させるように大声で食って掛かる。どんなになだめすかしても聞き入れない。しまいには、情けなくなって、「ごめんね。ここでお世話してもらえないから」と、泣きたくなるのをこらえて言う。

相談員から電話で聞いていたのだ。入所後、かなり父が荒れていると。周りがうるさくて、食事をする気にならんとハンストらしきこともしているという。確かに、意味不明で叫んでいるお年寄りがいっぱい居る。これは入所の日、私自身長居ができないくらい気が狂いそうなほどのいたたまれない思いがしたから、よく分かる。他の入所者に比べれば、それに気が付くだけ父はまだましということか。人の会話が聞き取れないはずの耳の遠い父が、そういう声だけ過敏なほどに聞こえているのが不思議でもある。

帰るころには「もうしばらく、我慢しようかね」と、少し穏やかになった。

(十一月二十六日)

母を松川園に連れて行く。父がどういう所に入っているのか、妻として知っておくべきだろう。二階は「あー。うー」の大合唱が気持ち悪いだろうから、四階の大ホールに連れて行く。普段は使われておらず、誰も居ないのでゆっくり出来る。父母二人をソファに座らせて、私は着替えを置きに二階に降りる。

看護師に父の様子を聞いた。佐野病院ではおむつだったが、また布パンツになっているようだ

。夜は早めに声を掛け、トイレに誘導するという。とにかく、周りをうるさがり、食事を拒否しているらしい。病院でもそうだったが、食事は皆でホールに集まってする。父は元々、皆で一緒にというのが嫌いな人なのだ。

四階のホールに戻ると、父もにこやかな顔で母と談笑していた。帰りには「わしも帰る」とも言わず、スタッフに導かれて部屋に戻っていった。

それにしても、母はふらつきが激しく、横から支えないと危なっかしくて仕様がな。エレベーターが来るのを待つ少しの間さえ立ってられず、しゃがみこんでしまう。これには、松川園の相談員も「大丈夫ですか？」と心配そうに声を掛けた。

(十一月三十日)

父の洗濯物を取りに行く。周りがうるさいの、目が見えないのと愚痴を聞かされるばかりだ。家の近くのかかりつけの眼科に手術をしてもらえば見えるようになると、信じているらしい。

「ここは目薬をさすだけで、何もしてくれん。藪医者じゃ」

緑内障のほうの眼はすでに薬も不要となっている。脳梗塞の後遺症である半側空間無視は、眼を手術したって治るはずもない。何と言われても私にはどうしてやりようも無い。父の訴えを聞くのが辛くて、私は用事を手早く済ませると、そそくさと帰ってしまう。

(ごめんね。お父さん)

帰りにこれは一体何なのだろうと、裏口の黒い物体を見上げてみる。やっぱり、カラスとコウモリの逆さ吊りだ。気味が悪いったらない。

「折半しよう」 その言葉に心は凍り付いて

十二月に入って、私は日記も松川園に行くのもお休みした。兄たちとの話し合いで、ひと月ごとに交互に洗濯を受け持つことにした。この月はあちらの洗濯当番月なのだ。佐野病院に転院早々から施設はまだかまだかとせつつかれ、父と母の世話に加えて、兄たちからはひどい仕打ちを受け続け、心身ともにくたくたになっていた。松川園に父が入所できて、やっと一息つけた。これでひと月ゆっくり休める。

十二月のある日、兄夫婦が上の姪の未樹と孫をつれて松川園から家に立ち寄った。未樹は実家のすぐ近くに住み、ほとんど毎日のように実家に入り浸っている。彼女は夫の両親と反りが合わないらしい。兄が甘やかしていて、来ないと孫かわいさに自分から呼び寄せるといふ。夫も一緒に夕食を食べて帰るので、食事代が大変なのだと言っている。兄嫁が嘆いていると優太から聞いたことがある。妹ながら、未樹は何を考えているのか分からないとも言っていた。一番下の真知は夫の両親にかわいがられ、家まで買ってもらっているらしい。

その未樹が非難めいた目をして、自分の知り合いが勤めている老人ホームのほうがいいのじゃないかと言いつつ出した。自分たちが行ってもちゃんと分かるし、松川園はお祖父ちゃんが入るところじゃないようにいう。

「でも、S市の施設に移ったら、もう私は世話しに行けないよ」

私の体調は私自身にしか分からない。今でさえ、精一杯だ。それに、私の自動車は十数年前に買ったきりの貨物の軽で四ナンバー。高速はとても怖くて走れない。

父が倒れるまで年一回、十一月に皆が兄の家に集まり、父と姪の誕生日祝いをしていた。私はアパートに一人住まいのころから、実家まで行って父母を乗せて下の道を一時間半かけて走り、送り迎えしていた。私の軽の後部座席は足がつかえるほど狭く、後ろの荷台のほうが広がった。父が疲れると言い出し、それからは兄たちに送り迎えさせていた。確かに、兄たちが父や母の見舞いにやってくるのも大変かもしれない。しかし、大きな車で高速を走れば1時間も掛からない。向こうは全員が免許を持っていて、交代の人数にも困らない。それに、父が倒れるまでは年に一、二回しか来なかったし、父が倒れてからも、休めで用事がない日だけ月1回来るくらいのことだった。それがS市のホームとなれば逆転し、世話すべき主体は私から兄嫁に移るだろう。

「どうする？ 私が聞いてみようか？」と未樹が兄たちに相談している。

「でも、あそこも今すぐ入れるわけじゃないらしいよ」と兄嫁が言う。

「家に引き取られるんじゃない」と未樹が言うと、これには兄が「しかしなあ、お前。毎晩大変ぞ」と反論した。夜の世話の大変さを彼は体感している。私は言った。

「みんな、倒れるよ」

未樹の言葉は結局、部外者の無責任でしかない。兄も兄嫁も今のところ部外者でいるからこそ、横槍を入れられる。実際問題として、自分たちが世話するとなると二の足を踏むに決まっている。

その後、佐野病院のケアマネに聞いてみた。

「老人ホームって、コネで入れるんですか？ 姪が知り合いのところに聞いてみると言っているんですが、S市ではあるし、介護認定もどうなるのでしょうか」

「たまに、ケアマネの家族が早々に入っていることがあって、あれっと思うことはあります。が、原則ありえません。でも、お兄さんに分かってもらうためにも、申し込みだけはできますから、させておくのもいいんじゃないですか」

そこで、私は彼らのなすがまま、放っておくことにした。

また、甥一家が来たとき、甥の嫁がこう言った。

「看護師さんと話をしたんですけど、何でこんなところに来られたんでしょうかねと言われました」

彼女の言葉にはいつも違和感を覚える。やっとのことで入れた施設なのに。どの看護師が言ったか知らないが、他に引き取るところがなかったのだ。それを言うと、彼女はうなずき「他のところは断られたんですよ」という。

「うちに引き取るのは無理よ。毎晩、頻繁にトイレに抱えて連れて行くなんて」

「そうですよ。無理ですよ」

分かっているのなら、変なことを言わないでほしい。姪や甥の嫁たちは、兄嫁の話しか聞いていないわけだ。それで、こういうことになるのだろう。兄嫁を囲んで、どういう話をしているかが目に浮かぶ。きっと、皆で「あんなところに入れてから」などと、松川園に入れた私の非難をしているのだろう。それなら、自分たちの家に引き取ればいい。そんな気はサラサラなくせに、彼らは余計な口だけ出す。

思い返せば、色々なことに思い当たる。いつまでも兄たちと不仲のままでは母の具合にも影響すると思い、兄に父や母のことを連絡するようになってから、あるとき、兄が電話で言ったことがある。

「おふくろをこちらに引き取ろうと思う」

そのときはまだ、父を自宅で引き取ることができかどうかと思案していたころだったから、私は聞いた。

「そう……。お父さんも？」

すると、「おやじは施設に入れる」と兄は迷わず即答した。

それから後、父の施設が見つからず、母の具合もますます悪くなった頃、兄が言った。

「おやじをこちらの施設に入れようかと思う」

「そう……。お母さんは？」

「おふくろも施設に入れる。二人一緒に入れるところはないかな」

(ふーん……?)

父と母とでは介護度が全く違う。当時、父は要介護四、母は要支援一だった。入れる施設も違う。何も分かっていないなと思った。それに、母を施設に入れるのはまだ早かろう。本人はどれだけ嫌がっていることか。かわいそうに。以前は母を引き取ろうと思うと言っていたのに、口ではそう言いながら、本当は二人とも施設に入れるつもりなのだなと思った。そして、私一人きりにして、この家から追い出そうとしているのかもしれない。あの時も私は一人で悩んだ。独りになって、わずかな貯金でいつまで生活できるものか。果たしてこの年で、仕事に就けるものだろうか。ともかく、なるようにしかならない。兄たちがS市のホームに申し込み、父も母も向

こうに行ってしまうなら、それはそれでいいやと、覚悟を決めるしかない。

そういえば、あれは随分昔のこと。まだ母も若かったころ、姪の結婚式に着る留袖を借りるその予約に行ったときだと思う。式場に向かう車の中で、ある建物を指差して兄嫁が言った。

「お母さん、あれが脳病院ですよ。年取って呆けたら、あそこに入れてあげますから、安心してください」

私は耳を疑った。母はどう受け取ったのか、無言だった。あの頃からすでに、二人は親の世話をする気など、毛頭なかったに違いない。それなのに、父がやっと入所できた施設の、文句だけを言うのは止めてほしい。

入所したばかりの頃は父が周りの奇声に拒否反応を示して、食事をホールで皆と一緒に取らなかつたりして大変だった。父の誕生日はドサクサに紛れて過ぎてしまったが、父は何も言わなかった。それに対しての不満などもあったのかもしれない。心の中で謝るしかない。相談員に再三お願いして、一番軽い三階に十二月の半ばごろ、やっと空きが出て移らせてもらった。そこでは奇声を上げる人もなく、それからは、落ち着いて問題を起こさなくなった。

半年後の介護認定の見直しで、父の介護度は要介護四から三に軽くなった。認知症の数値も一八に上がり、母の一七を追い抜いてしまった。

大晦日、十二月の最後の日には松川園経由で兄と未樹が家にやって来た。そして、十二月の最後の分の洗濯物をドサッと置いて帰ったのだ。私は十一月三十日に洗濯物を取りにいった、十一月の当番をきちんと果たした。そして、兄たちがもし間を空けても父が困る事がないように、着替えを多めに置いてきた。今回も、正月明けに取りに行っても充分なはずだった。なのに、何で向こうの番の洗濯物をわざわざこちらに持ってくるのだろう。正月早々、乾きの悪い冬場に洗濯物を部屋中に広げろというのか。S市の家なら四つも五つも部屋があるし、そもそもそっちの番だろう。と、思いながらも怒りをぐっと胸にしまい、黙って受け取った。三が日が済んでからと、臭いがしないように包んで、押入れ深くしまいこんだ。

一月十五日は母の誕生日なので、お寿司を取ろうと思っていた。しかし、また始まったのだ。例の嘔吐が。もう吐くのも無くなっているようなのに、苦しそうにいつまでもウエーウエーとやっている。佐野病院に連絡を入れ、次の日から訪問看護に来てもらい、点滴を受けることになった。

その日、未樹から電話が入り、今から来るといふ。いつも彼女は突然、そして丁度昼時にやってくる。母は具合が悪くて寝ているからと断ると、何やら不服そうな声で電話を切った。彼女は年末から年始に掛けて何度も家に来た。今まで年に一度も来ない年もあったのに。母は彼ら孫たちが来るたびにお小遣いを渡す。

そのころまで、銀行の出し入れや支払いのための振込みなどは私の役目だったが、ひと月分のお金は母に渡し、買い物の都度必要額を母からもらっていた。一月のある日、買い物に行くためお金を要求すると、無いという。まだ、万札が数枚残っているはずだったが……。聞くと、孫たちが来るたび、万札を渡していたのだという。驚いた。

「そういえば、お母さん。ついこの前も同じ人に何度もやってたみたいだけど、あれ、万札だっ

たの？」

「ああ、そうやったかね」

お小遣いをやるのは別にいいが、生活費が無くなるようでは困る。これから先、父にどれほどお金が掛かるか分からないのだから。今も、父の施設の支払いのため、毎月預金を取り崩しているところなのだ。以後、私がお金の管理をすることを母は承諾した。

(二〇一〇年二月二十八日 日曜日)

この日のことは一生忘れることはないだろう。そして、兄とは二度と会いたくもない。

父が松川園に入所した当初、片道四、五十分かかるようになったので、父の洗濯物は施設のクリーニングに頼もうかと思った。しかし、汚す量によってはクリーニング代が月二、三万円にもなるとのこと。月十万以上かかる施設費に加えて、それはかなりきつい。もしかしたら、これから先もまだまだ父は長生きするかもしれない。どんなに節約しても、わずかな貯金は二年ほどで底を突いてしまうだろう。なので、兄にクリーニング代だけでも半分持ってもらえないかと聞いてみた。しかし、「そんなお金はない。家のローンがまだ十年も残っていて、こんな大きな家を買ったことを後悔している」と彼は言った。兄嫁が洗濯すると言っているからというので、それでは洗濯を月交替にしようと言った。そうしなければ、結局私がすることになってしまうのは今までの例で目に見えていた。

そして、二月は彼らの当番だった。今日は二月の最後の日。私には悪い予感があった。兄が先週の洗濯物を抱えて持ってくるのではないかと。今月も去年の大晦日と同じ展開になるのではないかと考えていたのだ。案の定、兄が松川園の帰りに家に寄るからと電話を掛けてきた。やっぱり、持ってくるつもりだ。一度は我慢して何も言わず受け取ったが、今回ははっきり言ってやろうと思った。玄関に入るなり、洗濯物の袋を当然のように私に渡そうとする兄に、「何で、こっちに持ってくるの？ そちらの番でしょ」というと、兄はものすごい形相で怒り狂った。

「おまえや一、来る早々、何でそんなことを言うか！」

そして、掴みかからんばかりにして私を追いかけた。何と言って怒鳴られたか分からない。あまりの激昂ぶりに、私は吃驚して一目散に台所に逃げた。母が、病弱な母が泣いて止めた。

「洗濯物はおまえのために持ってきてやったったい。親の面倒見るとは当たり前やろ。おまえは寄生虫や。親の年金を食いつぶしやがって。なあ一も働かんで。若いころからずっとそうや。」

何を言う。四年前に家に戻るまで、一人でアパート暮らしをしたが、働いて一人で生きてきた。実家に借金などしたこともない。借金したのは兄のほうではないか。

「何や！ おまえのその辛気臭い顔は。お母さん、こんな奴と一緒にじゃ楽しくなからう。こいつを家から出して、うちに来いや」

そして私に、「おふくろは引き取るから、この家を折半しよう」と言った。

(えっ？ 折半？)

父は施設に居るとはいえ、まだちゃんと生きている。この先、状態が良くなって、家に帰ることができるようにならないとも限らない。しかも今現在、病弱の母と妹の私が住んでいる家ではないか。その母の前で折半しようなどとよくも言えたものだ。あまりのことに驚き声が震えたが

、勇気を奮って言ってやった。

「折半するって？」

「ああ、折半しよう」

「それなら、五百万返してやってね」

「何の証拠もないのに、何を言うか！」と、またまた逆上し大声で怒鳴り上げた。

父の洗濯物が入ったずっしりと重そうな袋を振り回し、私に向かって投げつけた。すんでのところかわしたが、腕に当たった。母が割って入り、兄に取り纏るようにして泣きながら繰り返した。

「やめて。やめて。もうやめて」

去年の夏、この五百万円の話が出たときには、何も借りた覚えはないと言った。それきり、私も言うのはやめていたし、兄のほうもそのままやむやにするつもりだったのか、一切口にすることは無かった。ところが、今日は少し考えて、こんなことを言い出した。

「百五十万くらい借りたかもしれんが、返したはず。二百万の墓を買って、それで相殺したつもりだった」

その墓というのは、もう十何年も前に兄が買った霊園のお墓のことだ。大勢の兄弟の末っ子だった父は本家の菩提寺の納骨堂には入れてもらえない。それで兄が用意したものだが、長いこと空のままで、年一、二回父母を誘い出して掃除に行っていたものだ。私も二年前か、兄たちが誘いに来て病氣上がりの父が行くというので、心配で付いて行き一緒に草むしりしたことがある。病弱な父や母をわざわざ連れ出さなくてもいいのにと考えたものだ。しかし、その相殺の話は初耳で、父母からも今まで聞いたことがない。少しは辻褄を合わせるべく思い付いたものか。

そして、言った。

「お前は墓には入れんぞ」

何と、情けない話だろう。こんな人たちと一緒にの墓に誰が入るものかと思った。

その後も、鬼のような形相で私に罵詈雑言浴びせ、何度も掴みかかりそうになり、そのたびに病弱な母が、おいおい泣きながらとめてくれた。

「もう、帰って！」

「何言うか！　ここは俺の実家ぞ」

(実家の前に、ここはお父さんとお母さんの家でしょ)と言いたいが、言葉にならない。

「お前の顔やら、見たくもない。声も聞きたくない。もう、こいつとは関係修復不可能や」

その後もさも憎々しげに、散々ひどい言葉を投げつけられた。しかし、帰り際には何を思い直したのか、「話し合いには応じろよ」と捨て台詞を残して帰っていった。一体、どういう『話し合い』を持ってくるつもりなのか。

身体の震えがしばらく止まらなかった。見上げるような大男から隣近所に響くような怒声を浴びせかけられて、その拳句、「話し合いに応じろよ」という捨て台詞。恐怖に震えながらも、あまりの理不尽に対して屈したくなく、負けん気で反発をして見せたものの、言いたいことのこれっぽっちも言えなかった。こんな恐ろしい経験は生まれて初めてだった。

「怖かったねえ、お母さん」というと、母も「昔はあんな子じゃなかったが……」と目を真っ赤にし、まだ怯えた顔をしている。よくぞ、病弱な母が身を挺してとめてくれたものだ。母も相当

の恐怖を感じたはずなのに。もしも母が居なかったら、私は半殺しにされていたかもしれない。

兄が激昂するきっかけとなったのは父の洗濯物だが、「これは勘違いだった」といって、結局持って帰った。全くつまらないことから今日の修羅場が始まったのだが、そのおかげで兄も本音を、何とまあぼろぼろと出していったものだと思う。すべてが繋がった気がする。

(そうか、お金が欲しかったのか)

彼らの目当てはお金だったのだ。この家を売り払って、お金を得たかったのだ。

思い返してみるに、去年父が倒れたあの日から彼らの実家に対するもくろみがなされてきたに違いない。それとなく感じてはいたが、やはりそうだった。あの兄嫁の仕打ちは、私が何もかも嫌になって、家を出て行くように仕向けるものだったのだと確信した。父も母も施設に入れ、邪魔な私を追い出し、この家を売るつもりだったのだ。

彼らの生活は昔から贅沢なものだった。兄嫁はブランド物が大好きで食事も贅沢なものを食べているようだった。大きな家のローンがあと十年も残っているのも驚きだが、更にローンか現金かは知らないが、今までにも数回新車に買い替え、最近も大きな新車を購入したばかりだ。それに、兄の飲み代はかなりらしい。それでもう一軒家が建つくらいだ、と兄嫁が嘆いた話を優太から聞いたことがある。兄は定年前に早期退職で退職金を早く手にし、その後再就職したが、まだ六十四歳だ。この先もずっと、ローンの返済を続けるのが大変なことに今頃になって気付いたのかもしれない。でも、すべて自分たちが好きでやってきたことだろうにと思う。父が倒れて、母も認知症と病弱というのをこれ幸いと、現金を手にしたくて触手を伸ばしてきたに違いないが、全く勝手すぎる。「折半しよう」なんて、よくも言えたものだ。兄は私を寄生虫と罵ったが、自分たちはハイエナか狼じゃないか。

お墓にしたって、名義は兄になっているかもしれないが、父からの借金で買ったというなら、それは父のものだろう。兄に妹を入れないなどという権利が一体どこにあるのか。しかし、こちらだってお断りだ。狭い墓の中にあんな暴力男と一緒にいるなんて御免被る。

夜、思い悩んだ私はふと小学校時代の友達を思い出して、電話を入れた。彼女は不動産の仕事をしていて、きっと弁護士か司法書士か知り合いがいるはずだと思い付いたのだ。私一人で解決できる内容ではない。母はただおろおろするばかりで、何も頼りにはできない。彼女は話を聞くと、法律的にも折半なんて出来ないはずだし、暴力はいけないよねと言った。そして、早速知り合いに相談するからと言ってくれた。胃がぎりぎり痛み、食事ものどを通らず、一晩中一睡も出来なかった。

逃げ出したい...、でも父と母のために戦おう！

その後、友達が人を紹介してくれて、その人たちが対策を練ってくれた。すぐにでも兄が何かもくろんで話し合いを申し入れてくるのではないかと、私は気が気ではなかった。友達は家の権利証と実印、印鑑証明書を銀行の貸し金庫に預けるか、家のどこかに隠しておくようアドバイスした。私はいろいろ考えた末、部屋の奥深くしまい込んだ。どんなに家中ひっくり返しても絶対見つかりっこないところ。もし、兄が私の留守中に勝手に家捜しでもすれば、警察に通報するつもりでいた。

一週間もすると、母はあの日何があったかをきれいに忘れていた。泣いたことだけ覚えていると言った。あれほどの出来事をまさか忘れるなんて……。いつ忘れたのかは分からない。次の日だったかもしれないし、丁度忘れたところに私が聞いたのかもしれない。感情だけは残るらしい。なんとも、情けなかった。

「これこれ、こういう事があったでしょ」と一から繰り返さなくてはならない。思い出すたび、心臓は早鐘のように鳴り、涙が溢れるのだ。

ここから、私の戦いが始まった。

友達が紹介してくれた人は長年大手銀行に勤め退職、今は十人ほどの成年後見人をしているという高崎氏だった。初めは、私自身が成年後見人になってはどうかと言われたが、表には立てるはずがない。私はこれから先、金輪際兄たちに会うつもりはない。何より恐ろしい。高崎氏も「これは簡単な問題ではなさそうですね」と言い、親身になって考えてくれた。そこで、父も母も認知症とはいえ、まだ完全に物事が分からなくなっているわけではないので、父と母に遺言書を書かせるのがいいだろうということになった。高崎氏の知人である司法書士の齊藤氏に遺言執行人になってもらうことにした。公式の遺言書を作成するには証人二人が必要で、それには両氏がなってくれることになった。

司法書士の齊藤氏のところへも直接出向き、兄との経緯を説明した。母が病弱の身で兄の暴力から身を挺して守ってくれたことを話しているうちに涙ぐんでしまった。

「お兄さんは何か病気ですか？」という齊藤氏に私は目を瞠った。

「いや……。どうでしょうか？」

「脳の病気で激昂し暴力的になる場合がありますよ」

ああ、他人が聞けばそういう風に考えるのか。やっぱり普通ではないのかと思った。私はすべての結果には原因があるという言葉に信じている。こうまで兄に憎まれ怒鳴られ、苦しめられる原因は自分にあるのではないか。悪いのは私のほうではないか。こういうことをされるほど悪いことを私はしたのだろうか。そういう思いで、私は私自身を責めてしまう。しかし、齊藤氏のこの話を聞くと、自分を責めることはなかったのかもしれないと思う。

「本当は何もかも放り出して逃げてしまいたい思いなのですが、それでは父や母がかわいそうなので……」

「そこまで追い詰められた気持ちでいるのなら、急いで遺言書を作成しましょう」

私は焦る思いで戸籍謄本や印鑑証明などを区役所に取りに行き、登記簿謄本を法務局に取りに

行き、固定資産税の納税通知書などの書類を用意した。端から物事を忘れ去っていく母には、今までの彼らの言動をまとめて書いたものを何度も見せては説明し、このたびの対処法の必要性を説いた。

しかし、父にはどう言えばいいだろうか？ ただでさえ耳の遠い父には、大声で叫ぶように話さないと駄目なのだ。ましてや認知症の父に理解させるには繰り返し話さないといけないかもしれない。大勢人がいる施設の中でプライベートなことを話したくはない。そこで先ず、松川園のケアマネにすべてを話した。父母の生存と人格を無視して家を売ろうとする兄たちを許せないとやった。彼女は「病院のほうでもそんなことがありました。施設としては立ち入ることはできませんが、部屋は提供します」と同情して言ってくれた。

父母に遺言書を作成してもらう日が四月一日と決まった。最初は施設と自宅と二箇所にも公証人と司法書士と証人と三人出張してもらうことになっていたが、松川園の施設長らは園外でやってほしい様子で、隣の病院の食堂ではどうでしょうかなどと言う。耳の遠い父に理解させるには大声で話さなくてはならないのに、人の出入りがある食堂で出来るわけがない。松川園の家族相談室の一室でも貸してくれていいはずなのに。どうやら、兄を危険人物と見、面倒なことは避けたい様子なのだ。非協力的な人たちに頭を下げる気にもならず、私は父を自宅に連れてくることにした。二往復で三、四時間掛かる。しかし、私が頑張ればいいことだと覚悟した。

四月一日の前々日、兄嫁から電話が入った。二月のあの日、兄は怒りが治まらないまま帰っただろうし、手には私に渡すつもりだった父の洗濯物の袋を持ち帰ったのだ。兄嫁が経緯を聞かないはずがない。それなのに、その後も澄ました声で電話を掛けてくる。私はいつも無言で母に代わっていた。そして、この日も何も言わず母に取り次いだのだが、何やら花見の誘いのようだ。母は嬉しそうな声で、「うん、じゃそのときにね」と返事をしている。

母に誘いを断るように言うと、そんな私のかたくなな態度にどうしてかと私を責める口調で聞く。私はうんざりする思いで、あの日のことを繰り返し話さなければならない。あの日が再現される。思い出すたび、恐怖が甦り鼓動が早くなる。情けなくて悔しくて、また涙がにじむ。本当は忘れてしまいたいのだ。母のように忘れられたらどんなにいいだろう。すべてを放り出して、どこかに独り行ってしまいたい。しかし、それでは父と母がかわいそうだと思う。私が何とかしなくてはならないのだ。どんなに辛くても、母に分からせる必要があった。母が誘い出されて、四月一日がおじゃんになるようなことがあれば、今までの苦労が水の泡だ。

「お母さん。向こうに連れて行かれて、具合が悪くなったりしたら、もう私は迎えに行けないからね。そのまま施設か脳病院に入れられてしまうよ。それでもいい？」

「……」

「お母さんがねえ、向こうがいいと言うなら、それでもいいよ。私はひとりになってもお父さんのためにこの家を守るからね」

最後によく、母は理解する。

「そうそう、昔からね。この家を売ろうとしていることは分かっとうと。私も施設にも病院にも入りたくないけん、向こうには行かんよ。この家にじっとしとくたい」

そして、母は「身体の具合が悪いから。行けんよ」と断りの電話を入れていた。

四月一日当日、父は突然松川園から連れ出されて、きよとんとした様子だった。いつもは裏の駐車場から入らなければならないが、今日は病院側から入り、正面玄関に車を乗り付けた。父を乗せて表通りを走る。通りには桜が満開だ。父は嬉しそうに窓の外を見ている。そして、家の杏は花が咲いたか、実は生ったかなどと聞く。家や庭のことを思い出している様子だ。

「いっぱい咲いたよ。もう、とうに花は散ったけどね。まだ実が生ってないのよね。今年は生らないままかもしれない。今はね、海棠が咲いてるよ」

「海棠？ ああ、花海棠ね。そうか、そうか」と懐かしそうな声で言う。この調子じゃ、もしかしたら話が通じるかもしれないと思い、あの忌まわしい二月二十八日の、家を折半しようと言った兄の話をした。車の中だから、助手席に座る父の耳元に大きな声で話が出る。すると、父は理解したのだ。

「家はわしの宝じゃ。家は売らんぞ」と明快な口ぶりで言った。

公証人や司法書士の斉藤氏にも父はきっぱりと言い放つ。

「息子が何か言うて来ようらしいが、家は売りません！」

遺言書にも虫眼鏡で一字一字辿りながら、しっかり確認して自筆でサインした。いろんな事態を想定し、念のため母にも遺言書を書いてもらうことになっていた。父のサインが済むと、隣の部屋に敷きっぱなしの母の布団まで二人がかりで父を担いで移し休ませた。一度座り込んでしまうと立ち上がらせるのに苦労するのだ。高崎氏が手伝ってくれたが、父と彼と一緒に布団に倒れこんでしまうほど力の要る大変なことだった。

布団の中に落ち着くと父は言った。

「これで安心して、いつでも死ねるね」

「そんなこと言わずに、長生きしてよね」

疲れたのか、母の遺言書作成の間、父は一眠りした。そして、公証人たち三人が帰って行った後、父と母と久しぶりの団欒のひと時を過ごした。

遺言書が完成して一安心。もし、彼らから何か言ってきたら、突っぱねることができる。そして、何より嬉しかったのは、あの後松川園に来た兄に父がはっきり言ったらしいこと。

「家は売らんぞ」

兄はちょっといさかいがあつただけ言って、後は黙っていたという。私は思う。兄は土下座してでも謝るべきじゃなかったかと。全くこのたびの兄の振る舞いは、どうしても許せない！勝手に親の財産を奪うのは、親に対する虐待に当たると何かで読んだことがある。父から勘当されてもいいくらいだ。それでも、父にとってはあんな人でも息子は息子らしく、「仲良くしなさいね」と私に優しい声で言う。

(仲良くなんかできるもんか)

松川園はすべて諒解しているので、その後は私に協力的だった。四月は兄たちの当番月だったが、洗濯物を取りに来て渡さないように頼んだ。連絡先は第一に私。そして第二は高崎氏を代理人に立てた。もう兄たちには何も頼まない。私一人で父と母を守ってみせる。

思い返せば、私は四年前に実家に帰ったのだが、それまでの長い間、父と母は二人だけでこの

家で生活してきた。随分前、兄たちがS市に家を建てた頃から、一緒に住まないかとの誘いがあったらしい。しかし、父は自分が建て、手入れをしてきた家と庭をこよなく愛し、離れる気など昔からこれっぽっちも無かった。父が九十歳代になり、母が八十歳を過ぎても、二人とも介護の必要もなく、人の世話にはならないと強い自負心を持って生きてきたのだ。

優太が兄嫁の実家の関係の仕事に就き、結婚すると兄嫁の実家近くに住むようになったとき、父は「みんな、向こうに行ってしもうた」と嘆いた。

いつだったか、兄夫婦と実家で顔を合わせたとき、私はほんの軽い気持ちで兄嫁に言った。

「みんな、向こうに行ってしまったって言っているよ」

すると、突然、兄嫁が振り向きざま私に言った。

「悪かったね」

心が凍った。思いもかけない、ドスの利いた凄みのある声だった。それまでも、あけすけに言うところがあり「えっ」と思うこともたまにあったけれど、彼女は細かいことは気にしないおらかな人なのだろうと好意的に解釈してきた。私はただ、父や母が寂しい気持ちでいることを代わりに言ってやりたかっただけなのに……。

そもそも、兄たちが兄嫁の実家に近いS市に家を建てたから、その子供たちも皆その方面で結婚し就職し、父母が寂しい思いをさせられることになったのだ。せめて、こちらの近くに家を建ててくれればよかったのにと思う。私が実家に戻ったのも、年老いて病弱になった二人が心配で、それまでの気楽なアパート暮らしをやめたのだ。近々、入院や介護が必要となるかもしれないことも心の底で覚悟していた。

三月以降は毎週松川園に洗濯物を取りに行き、母の世話と家事一切、そして四月一日への準備にと忙しく過ぎた。その四月一日も無事済むと、一応の落ち着を見たせいか、私自身の身体に変調を来たしたのだ。まず、歯痛がどうしようもなくなり、歯医者通い。それが治ると、首や肩、更に背中から腰から痛くてちょっとした動作で悲鳴を上げるようになった。私は元々薬や病院が大嫌いだ。父と母は病院に連れて行くが、自分自身のためでは医者に掛かった事がない。だが、そうは言っていられなくなった。近くの整形外科に通いだした。レントゲンを十数枚も撮られ、牽引が始まった。そもそも近代医学不信の私は牽引に対して恐怖感がある。

「牽引で寝たきりになった人がいると聞いたことがあるんですが」と恐る恐る医師に言ってみたが、その医師は「そんな話は聞いた事がない」と言った。

首と腰の二箇所を牽引した。首は座った姿勢であごをベルトにのせ上に引っ張る。腰はベッドに仰向けに横たわり、腋の下と腰をベルトで押さえて上下に引っ張る。首の三度目かであごがおかしくなった。それで、首の牽引は止めてもらった。すると、五月三十一日、六度目の腰の牽引で大変なことになった。夜中に左腕が痛くて痛くてたまらなくなったのだ。

六月二日のこと。左腕の痛みを訴えると、「では、腕のレントゲンを撮りましょう」という。

(えっ、また?)

「もうレントゲンはいいです。原因は分かっているんですから」

私の言葉に医師は妙な顔をして牽引をやめ、代わりにホットパッドとやらをした。こんなに温めていいのかなと思ううち、ズキズキしてきた。

その夜のことで。一晩中、あまりの激痛に悲鳴を上げ続けた。眠れないまま夜がやっとのことで明けたのだが、左腕は身体から数センチ離すことも出来ないほどの状態になっていた。無理な牽引をし、更に冷やすべきところを温めたからに違いなかった。

(あの藪医者め)と思わずにいられない。近くの整体のチラシが入っていたのを思い出し、藁にも縋る思いで治療を受けた。あれほどの激痛が次の日には少し和らいだ。が、左腕は突っ張ったまま曲げることもできず、服の脱ぎ着さえままならなかった。本当にひどい目に遭ったものだ。

こんな有様で運転が出来るわけがない。私の軽はマニュアルで、ギアチェンジをしなくては行けない。左腕は言うことを聞かなかった。ちょっと力を入れても痛みが走る。これでは、父のところへも行けやしない。無理して運転すると事故に繋がりそうだった。やむを得ず、父の洗濯物は松川園のクリーニングをお願いした。少々高くつくが、この際仕方がない。

(六月二十五日)

五月の二十七日から行けなくなっていた父のところに久しぶりで顔を出す。父は不満げに、「えらい、長いこと来んやったね。ほったらかしじゃ」と目いっぱい非難をした。

「ごめん。あちこち痛くて、腕が上がらなくなって運転が出来なかったからね。まだ痛いんだけど、やっとのことで来たとよ」

天の助けか、数日前老人ホームからの引き合いが来たのだ。空きが出たので、松川園に父の面談に来るといふ、今日がその日なのだ。願ってもない話。少々の痛みは堪えて、面談の立会いに来た。約束の時間にホームから二人のスタッフが部屋に入ってきた。朴訥そうな男性相談員と大柄な元看護師のケアマネージャーだ。父も穏やかに話をしている不都合はなさそうだった。松川園のスタッフからも聞き取りをしていったが、それが一番心配ではある。

(七月九日)

楠木ホームから受け入れの連絡があり、今日の午前十時半に松川園に迎えに来る約束であった。早めに行って、荷物をまとめる。父は何で前もって言ってくれなかったかと文句を言った。前以て一度ホームに行ってみて、どんなところか確認したかったのにと。

「ごめんね。急に決まったから」と逃げたが、選択の余地はこちらにはないのだ。この松川園は家から遠く、費用も高く、私自身の体力も限界だった。ホームに入れるのは願ったり叶ったり。父が気に入らないから行かないなどと言い出したら大変なことになる。何とかスムーズに移ってもらわなくては。

「ホームは随分家に近くなるからね。私も楽になるし、お母さんももっと来られるようになるよ」

「そうね。そしたら、わしも家にちょっと帰ったりできるたいな」

「……。そうやね」

「皆に挨拶せんといかんったい。名刺も作りたかったとになあ」

何やら、名刺を作って配りたかったのだそうだ。しかたなく、この住所のホームに行くからねと男性相談員にもらっていた名刺を父に渡した。父はそれを持ってスタッフに付き添われ、ホー

ル内を回っている。

そうこうするうちに相談員が迎えに来た。父はその車に乗せられ、園の相談員や看護師などスタッフが総出で見送ってくれた。私も後を追って楠木ホームに向かう。そこは自宅に程近い山の麓にあった。会議室で、いろいろな手続きとスタッフの紹介が行われた。父も同席した。耳の遠い父はただ黙って座っていたが、最後に「お父様も何かありましたら、どうぞ」と大きな声で話しかけられ、おもむろに言い出したことには驚いた。それまで一度も口にしたことなかった、自分は軍隊にいた云々という言葉だ。何で、今頃になってそんなことを言い出したのだろう。

部屋は二人部屋で、隣の老人にケアマネが父を紹介している。父よりもだいぶ若い人らしい。「小松さんは九十四歳になるのに、歩けるんですよ」とケアマネが言うと、「ああ、そうですか。歩けるんですか……」と言って嗚咽しだした。彼女は慌てて、「泣かないでいいですよ」と言っている。私が挨拶すると上半身を起こして挨拶を返してくれた。優しい人なんだと安心した。松川園でも父は気難しくて、なかなか同室の人たちとは仲良く出来ず、その悪口ばかり聞かされたものだ。

父がここで落ち着いてくれたらと願いつつ、ホームを後にする。

ホームに入所できて安心したのもつかの間、問題発生！

(七月十六日)

母を連れて楠木ホームに。

車で十五分も掛からない。ちゃんと母を連れて行っておかないと、母は父がどこでどうしているのか把握していないようなのだ。父の認知症は長谷川式の一八まで回復して、母の一七を追い越してしまっていた。逆に母はその一七より今は大分下がっているのではないかと思われる。最近庭にさえ出ようとせず、週に一度のデイサービスに行く以外、一日中居間で横になってテレビを見ている。一月に嘔吐して寝込んで後は、不思議とそういう症状を起こすことは無くなった。その代わり、体力がめっきり弱ったようで、心臓の不安ばかりを口にし、ますます身体を動かそうともしない。

ホームに父が入所してからは、洗濯も無くなり月々の費用も安くなったため、随分心に余裕が出来て、私もすっかり安堵してしまった。そうになると、ホームに行くのが億劫になってしまう。左腕はやっと楽に動くようになったが、まだ完全には元に戻っていない。一体、いつになったら完治するのだろう。首肩腰も相変わらずで月二回の整体を続けている。本当は毎週行ったほうがよいらしいが、保険も利かないのにそうそう行けるものではない。

ホームに入所するときの身元引受人には高崎氏になってもらった。本当にありがたく思う。移った連絡は母の名で兄と優太に葉書を出しておいた。兄たちは松川園にはもう一ヶ月以上行っていないようだった。

(八月四日)

父は楠木ホームに落ち着いているようだ。近所の夏祭りに連れて行ってもらったとかで、そこでもらったうちわを大事そうに私に見せる。そのうちわが一度無くなって、人がそれを持っていたので取り返してやったと言っている。父から取り上げられた人が何とも気の毒だと思う。松川園でもあったことだが、被害妄想があるように思われる。松川園では自分の電気かみそりを人が勝手に使っていると訴えた。ちゃんと名前も付けていて、スタッフが管理しているんだからと言ったが、納得しなかった。

父は私をお嫁に出せばよかったという。

(一度は出たんだから、いいじゃない) と思いつつ、「いまさら、もらってくれる人なんかないよ」と答える。父は自分の死んだ後のことが心配らしい。生活していけるかと問う。独りになれば働くからと答えると、「看護婦にだけは、なりなさんなね」という。その仕事の大変さは分かっているのかと思うとおかしくなる。

(八月十四日)

兄嫁から電話がある。

いきなり、「お母さんに代わって」という。いつもは黙って母に代わるのだが、今日はそれが出来ない。

この日、朝から母は調子が悪く、大便が出そうで出ないといって苦しみながらトイレを出た

り入ったりしていた。前にもあったことだが、案の定トイレから出たところで倒れこんだ。そこは洗面所で立って顔を洗うスペースしかない。片面に洗面台、三方ドアではさまれた狭いところに倒れこまれては、どうしようもないのだ。年取って体重が軽くなっているとはいえ、大人がぐったりと倒れているのを、硬い板張りとながくなった敷居から力づくで引っ張り出すわけにもいかず、狭いので抱え上げようにも到底無理だ。苦しい苦しいと手足をときどきばたつかせているが、救急車を呼ばなきゃいけないかなと思いつつ頭の下に座布団を押し込み、ひとまず母の部屋に布団を敷いた。

すると、自力で這い出してきて、布団に横たわったが、まだ出ないという。何かがないかとしきりに言っているが、何のことだか分からない。たぶん、差し込み便器のことかと思うが、そんなものがあるのを聞いたこともない。仕方がないから、古くなって捨てようかと思っていた洗面器を用意する。浣腸も用意していたが、しばらくして自力で排便したらしい。何とかうまく洗面器にしてくれた。水のようなものと一緒に出ていた。昼食後だったので、その激しい臭いに吐きそうになった。トイレで始末した。差し込み便器を買うまでの間、この洗面器を使おうとトイレの奥に押し込んだ。

排便した後はけろっと気分が良くなつたらしいが、そのまま布団の中で横になっている。貧血を起こすのか、体力が尽きて倒れこむのか分からないが、父がいた頃もしばしばあったらしい。私は三回目の経験だ。

そんなことがあったその日の電話である。

「今具合が悪くて休んでいる」と言ったが、どういう具合なのか、熱があるのかとしつこく聞く。私と兄とがどういう状況になっているのか分かっているくせにと思いつつながら、母の排便のことを言うのも嫌で黙っていた。

「明日、そちらに行くから」というので、「来てほしくない」と言った。しらばっくれてなぜかと聞くから、この際、はつきりしておこうと思った。

「そちらとは絶交してますから」

すると、「絶交してるって。そこはあなたの家じゃないでしょ」

(あなたの家じゃないって？ 他所から来た人に言われたくないわ。娘が実家に戻って親の面倒見て、何が悪い)

「ここは私の実家です」と言うと、ちょっと言葉を呑み込んだ様子。

「親がまだ生きているのに、家を売ろうとする人たちに来てほしくないです」

「売るとは言ってないでしょ」

「折半しようと言いました」

「あのねえ、売り言葉に買い言葉ということがあるでしょう。あなたが先に……」

「言葉ではありません。暴力を振るわれそうになりました。本人に聞きなさい！」と言って、ガチャンと電話を切ってやった。

心臓は早鐘のように打ち、身体は小刻みに震え、声も震えて上ずるのを必死で抑えながら、それでも最低限のことは言えただろうか。昨年二月のあの日以来、彼らがやってくるかもしれない休日が毎週怖かった。あれ以来、兄が直接電話してくることはなくなったが、兄嫁や未樹が知ら

ぬ体で掛けてくる。そのたびに無言で母に代わることしか出来なかった。彼らが家にやって来ると分かったら自分の部屋の雨戸を閉め、ドアを開けられないようにして閉じこもった。まさか、母に乱暴することはないだろうから、私一人彼らが帰るまで息を潜めていた。あの捨てぜりふが耳に甦る。

「話し合いには応じろよ」

今度は何を企んで言うてくるのか。ドアを叩いて引きずり出そうとでもすれば、私は一一〇番通報するつもりでいた。それが今日、これまでずっと言いたかった「来てほしくない」という言葉をやっと言えた。これで、彼らが厚かましく家に来ることはなくなるだろうか。毎週休みの日におびえて過ごすことはなくなるだろうか。

しかし電話を切った後、ストレスが即効で身体に響くというのを思い知った。部屋に戻って座り込み、心臓の高鳴りが静まるのを待っていると、腰にびりびりと電気が走ったようになり、うずくまったまま動けない。このまま起き上がれなくなるのかと思った。最近、ようやく腰は回復したかなと思っていたのに。あの日のことが完全にトラウマになってしまっていて、思い出すたび、どれほど心が傷つき、身体が悲鳴を上げていたことか。もう、誰も来ないでくれ、放っておいてくれと叫びたい。

しばらくすると、腰痛は引いたが、動悸はまだ治まらない。寝ている母の様子を覗いてみると、身を動かして、気分は良くなったという。何か、電話があっていたようだけどというので、聞いても大丈夫かと気にしつつ、大丈夫そうなので簡単に顛末を話す。

母はあの日のことを全く覚えていない。今日は話せる状況にないが、いつかまた、一から話さなくてはならない。そのたびに私の心と体はダメージを受けるのだ。私だって、母のように全て忘れたい。忘れて、それで済むものならば。

(八月十五日)

昨晩はなかなか寝付けず、浅い眠りに入ったのは明け方の四時も過ぎたころだったろうか。あれから電話はなかったが、今日は日曜日だ。もしかしたら、彼らが来るかもしれないと思うと、憂鬱な気分になる。部屋に閉じこもる準備をあれこれ考える。

幸い来ないまま、夕方電話のベルがなった。あちらからの電話に違いなく、母に出てもらう。やっぱりだ。母は昨日自分の具合が悪くなったことを覚えていないらしい。

「あら、そうやったかねえ。寝とったっちゃろうか。いやあ、知らんやったよ」

何事もなかったかのような元気そうな声で受け答えしている。こんなふうだから、また私が故意に母を電話に出さなかったのではないかと向こうは邪推しているに違いない。

しかし、最近兄たちの所業を少し話せば思い出すようになった。やっと、脳の一細胞にしっかり記憶されたのだろうか。向こうの誘いに乗って連れて行かれたら、私はこれこのとおり体調も悪いから、迎えに行けないからね。向こうで入院ということになれば、きっと脳病院か、施設に入れられてしまうよと話す、分かっていると頷く。そして母が昔、兄を関西の大学に行かせるためにどれだけ働いて仕送りしてやったことかと思痴を繰り返すのだ。母は無口な父と違い、昔から思痴や繰り返言の多い人だった。あまりに繰り返されると、私も聞くのが嫌になる。

「親として当たり前だと向こうは思ってるでしょうよ」

それでも、「どんだけ、してやったね」と言い募る。口を閉じてほしくて、つい言わでものことを言う。

「私だって、大学に行きたかったけどね。私は行かせてもらえなかったもんね」

「うん、あんたはね。何もしてやってないけどね」

母は認めるのだ。たった一人の息子に自分たちの老後を見てもらうつもりだったのか。とにかく、大きな期待をし、頼りにしていたはずだ。

「あんたはしっかりしとったけん。ほっといてもよかったけん」と言い訳のように言う。

私は高校を卒業後、商社に二年半勤めてお金を貯め、自分で勉強して短大に入学した。おかげで、誰にも頼らない自立心が養われたのかもしれない。

心の中でつぶやく。

(投資する相手を間違えたね、お母さん)

彼らはやってこなかった。とにもかくにも、電話だけで済ましたみたいで一安心。ドアのバリケードを取り外す。こんなことがあるたびに私の心身は削られていく。

(八月十九日)

父のところに毎週行く必要がなくなって、楠木ホームに行くのが間遠になってしまった。しかし、洗濯物が無いということはこんなに楽なものか。それでも、放りっぱなしだと父が拗ねるので様子を見に行く。

相当腰が悪いらしく、「百叩きじゃ」などと言いながら、腰を叩いてばかりいる。

(九月十日)

楠木ホームから電話あり。

父に問題が発生しているらしい。電話口では話したがらなかったが、何かかと思い、強いて聞きだしたところでは、最近父の機嫌が非常に悪く、大声を出し、介護スタッフを困らせているとのこと。詳しくは、来てもらってからというので、母を連れて行ってみた。私の言うことは聞かなくても母の言うことなら聞くかもしれないと思ったのだ。しかし、父の機嫌の悪さはそんな生易しいものではなかった。

まずは、ケアマネージャーと面談。部屋の明かりをつけるのを嫌がり、先日台風が来たときも真っ暗な中、明かりをつけさせないという。元々、緑内障に白内障で、どうも光がまぶしいらしい。松川園でも父の部屋は四人部屋だったが、昼間も薄いカーテンを引き電気もつけず、常に他の部屋より暗くしてあった。ここ楠木ホームでは、昼間は明かりをつける決まりなのだという。それなのに父がスタッフと言い争いをしながら消してしまい、同室の老人が歯を磨くのに暗くて出来ない。それと、夜はスタッフが少ないのに、父が尿意を催し動き出すので駆けつけると、腰を百回叩くまで待たされるのでスタッフが困っている。更に、父が軍隊のことを持ち出して、同室の老人の階級が自分より下だといって押さえつけているのだという。おかげでその老人が最近寝たきりになってしまっているのだとケアマネは言った。

「個室ならばいいのですが、ここには個室はないので、今のままでは個室のあるホームに移ってもらうことになります」

背が高く体格もがっしりとしたそのケアマネは、豊富な経験と揺るぎない信念を持っていることを感じさせる野太い声で言った。

更に、父はスタッフについての小言をあれこれ言い募るのだという。ずらっと並んで食べさせてもらうのを待っている入所者よりも先に、スタッフが食事をしている。見えるところで歯を磨いている。何もせず、ポーと突っ立って働いていないスタッフがいる。恥ずかしくないのかと。食事をしたり、歯を磨いたりしているのは夜勤明けのスタッフらしいのだが、そんなことは父に分かるはずもない。

そういえば以前、松川園で父が私に話した事がある。

「あのな、みんなの食べ残しを集めてな。ぐちゃぐちゃにして他の人に食べさせようと。あれは餌じゃ。餌ばやりよったい。そしてな、なーも働かんでポーとしとうもんがおるとぞ。看護婦がな、人が見ようところで上半身脱いで裸になって着替えようとぞ。ふふふん」

そのときは妙なことを言うと思いながらも、仕方がないことかと聞き流していた。ここでも同じようなことを聞かされた。それを実際スタッフに向かって非難しているらしい。しかし、あの盲目に近いような目で、ちゃんと見えて言っていることだろうかと思う。

「認知症で被害妄想的なところもあるみたいだし、どこまで分かって言っているのかと思うんですが……」

「いいえ、頭ははっきりしていらっしゃいますよ。私たちにも説教されます。お仕事で管理職をなさっていたのでしょ」

「えー？ ああ、支店長代理でした。代理ですから、別に大したことでは」

「いいええ。軍隊でもねえ。あの部屋では序列があるようで、同室の方に命令なさっているようです」

「……」

父のせいで同室の老人が寝たきりになったと言われれば、返す言葉は無い。

そしてまた、もう一つ、驚くべきことを聞かされた。自己排便をやっているのだという。

「えっ、何ですか？ それ」と聞くと、トイレに行った際、自分で指をお尻に突っ込んで便を取り出すのだという。

聞いていて、気分が悪くなった。

(何ということだ！)

「スタッフがやめさせようとする」と激しく怒り出して、暴言を吐かれます。若いスタッフは怖がって手を引いてしまうんです。衛生上の問題もありますし、娘さんから注意してもらえませんか」

前の施設からはそんな話は聞いていなかったがと思いつつ、「暴言だけですか？ 暴力は振っていないんですね」と確認すると、「暴力は今のところはありません。あれば即退所です」とはっきりとした口調で言われた。

横で一緒に聞いている母はどれほどの理解をしているのだろう。

「まあ、迷惑をおかけしてすみませんねえ」とは言っているものの……。ケアマネは母には「仕方ないですよ。病気がさせているんですから」と言っている。

重い気持ちで母を連れ部屋に行った。ケアマネが、「奥さんと娘さんが来られましたよ」と声

を掛けたが、「ああー、何ね！」と完全に挑発的な返事で、ベッドに寝たまま振り向こうともしない。

私たちに気付くと、早速不平不満を言い募る。

「あのなあ、まぶしいとに、電気はつけるったい。昼間はつけんでよかろうもん。明るうして眠れんとよ」

確かに、薄いカーテンを閉めているが、部屋は明るい。背丈が百八十センチはあろうかと思うほどの堂々とした体格のケアマネがドアの入り口で腕組みをし、仁王立ちで「電気のことと、それから、カーテンも閉めないように言ってください」と、私が父に注意するのを待っている。

「お偉いさんが来てな。カーテン閉めろとかな、うるさく言うったい」

ケアマネが「お偉いさんって、私のことでしょうかね」と私に聞く。私は首をすくめた。しばらくは父の不満を聞いてからと思っていたが、ケアマネが怖い顔で突っ立っているので仕方がない。

「お父さん、お世話してもらっている人たちを怒鳴ったら、いかんでしょ」と、少しきつめに言った。

「昼間は明るいものなんだから、無理して眠ろうとしないでいいんじゃない。今度アイマスクを持ってきてあげるから」などと、怒ったり、なだめたり、すかしたりしているとケアマネは満足したのか、居なくなった。しかし、父は不満を言い続け、母は椅子に座ったまま、一言もなく小さくなっている。

「ふん。こんなとこ、おん出てやる」と、父は悪ガキみみたいな顔をして言った。

「お父さん、ここを追い出されたら、皆困るでしょ。お母さんもすぐに入院してしまうだろうし、私も死んでしまうわ」

つい、言ってしまった。体力に自信がなくなってしまう私には、もう受け止められない。三人ともに共倒れではないか。すると、「わしの方が先に死ぬわ！」と叫んで、父は布団に顔を埋めて、ふて腐れてしまった。

私は深呼吸をして、言った。

「皆、死ぬときには死ぬよ。生きている間は助け合っていかなとねえ。ごめんね。私に体力があったら、世話してやれるんだけどね」

「あんたは母さんの面倒を見てやんなさい。わしは姥捨て山じゃ」

父はちょっと考えさせてもらおうと言って、それきり黙りこんでしまった。

それでも、帰ろうとすると、腕時計が止まってしまったから直してとか、シェーバーが動かんから手で剃れるのを持ってきてなどと、首だけ持ち上げて頼みごとをする。いつものように、「また来るからね」と言って、部屋を出た。

「へそを曲げられてしまいました。自己摘便のことは言えませんでした」とケアマネにいうと、姿を消していた間に丁度回診日に来ていた嘱託医に相談したらしく、「前からの習慣だろうから、あまり厳しく言っても仕様がないうだろう」と言われたという。

(習慣って?)

私は、家でもそんなことをしていたのだろうかと思いをひねった。

「今度、アイマスクを持ってきますので」とだけ言って帰った。

問題を起こす原因は突き止められたものの...

(九月十五日)

楠木ホームにアイマスクを持っていく。相変わらず、もてあまされている状態のようだ。自己摘便に関しては、手袋をさせるようにしたが、スタッフを寄せ付けないようにして、途中で外してしまい、指を突っ込んで更にその指を便器の水で洗って、又突っ込む。それを注意しようとすると、手が付けられないほど大声で怒鳴るのだという。気が遠くなるのを感じてしまうほどのショックを受ける。

「後を追いかけて、触ったところを殺菌して回っていますが、限度がありますから。どうしましょうかねえ。感染症が流行ってもいけないし。ノロウイルスの問題もあるでしょう」というが、そう聞かされても一体私に何ができるというのか。

「でも、前のところで、入所者が利用するトイレに入ったことがありましたけど、カーテンが汚れていました。認知症の高齢者というものは仕方がないことじゃないですか」と言ってみた。

「もちろん、そういうことはあります。しかし、原因になるとははっきりしていることは絶っておかなくてはけません」

暴言に介護拒否に不潔行為。同室の入所者への威圧的な態度。問題は山ほどあり、すぐにでも出てほしいと言わんばかり……。前の施設では、いつ行っても父の部屋は電気も暗くして、カーテンも閉めてあった。自己摘便の話も聞かなかった。目が行き届かず、見過ごしていたのか。それとも、承知の上で黙って世話してくれていたのか分からないけれど。先日電話で話した、このホームの男性相談員は、「迷惑をお掛けしているようですね」という私に、意外にも「いやー、別にそんなことないですよ」と問題ないかのように言った。それに比べ、元看護師というこのケアマネは厳しすぎるんじゃないのかと、内心反発を感じた。しかし、父への介護がなおざりになっても困るとも思う。そんな弱みを覚えながら、わざと言ってみる。

「こちらで個室は作れないものですか。もう、物置みたいなのところでもいいですけど……」ケアマネは顔をしかめ「そんなわけにはいきません」と強くかぶりを振った。

部屋に行って、父にアイマスクを渡す。

「これ、前に私が作ってたの持ってきたよ」と言うと、嬉しそうな顔をした。部屋の電気は付いていない。介護スタッフといたちごっこで、付けたり消したりしているらしい。

「電気消したら、また怒られるよ」と言うと、「よか、よか」と言って、鼻で笑った。

しょうがないねと思っていると、父のほうから例のことを言い出した。

「あのな、尾籠な話やが、トイレでな、手で取りよつたい。それが、手袋をつけろと言うんやが、そうしたら棒みたいに硬いやろ。外したら、うるさく言うつたい」

「お父さん、そんなにまでしないでいいじゃない」

「いやあ、そうせんとスッキリせん」

「不潔でしょ！ そんなことしていたら、病気になるよ！ 私、もう帰る」

殊更に不機嫌な顔を見せて、そそくさと部屋を出た。娘が嫌がったと分かったら、反省してやめてくれないかなと少し期待しながら……。

家に帰ると、トイレに行って便座の蓋を開けてみた。便器の深い底にほんのわずかし水が溜

まらない様になっている。

(これじゃ、どう考えても無理だわ)

便座に座って手を突っ込んでその手を洗ってなど、とても出来そうにない。それに、うちの場合、ずっと昔から色付きの芳香消臭剤を使っているのだから、溜まった水は青緑色をしている。

(習慣だなんて、失礼しちゃわ!)と、ほっと一安心した。

母が世話になっている地域の包括センターの人にも事情を話し、父が楠木ホームにいられなくなるかも知れず、個室のあるホームを紹介してほしいと依頼した。やっと二ヶ月前に落ち着いたばかりなのに。近くなって、洗濯もしなくて済むようになって、施設費も少し安くなって、松川園と比べ本当に楽になって……。心身ともに限界に来ていた私にとって、天の助けかと思っていたのに。ただただ、ため息が出てしまう。

(九月二十日)

楠木ホームから電話あり。

定期健診で父の採血をしたところ、かなり貧血がひどいので、病院に入院したほうがよいらしいという。詳しくは嘱託医に聞いてくれというので電話すると、ヘモグロビン値が異常に低いので検査が必要、また癌の数値が高いようだともいう。

(九月二十一日)

午前十一時半、ホームから嘱託医の浅田病院に入院。

私もその時間に病院に行く。入院手続きをし、過去の病歴などを話し、尊厳死の宣言書も提示した。父は私の顔を見るなり、「迷惑かけたね。金は大丈夫か?」と、部屋の外にも聞こえるほどの大きな声で言う。

お昼の時間になって、父はホールに車椅子で移動。

「貧血らしいからね。うんと、食べんといかんて」と言いながら、まるで飢えた人のようにもりもり食べている。

手続きが終わり、医師からは「検査で一週間くらいの入院と考えています」との話だった。帰り際、父のところに行ってみると、全皿きれいに食べつくすところだった。肩をたたいて、「また、来るね」と言った。

(九月二十二日)

浅田病院より電話。

夜間、睡眠薬を投与していたにもかかわらず、三度ほど起き、トイレに誘導しての排尿の際、ひどい機嫌の悪さで大声を出し暴れたという。

「暴力を振るったのですか」と恐る恐る聞くと、言いにくそうにだが、はっきりと「そうです」と答えた。

そこで、脳のCTを撮ったところ、血腫が発見されたのだ。

「入院して手術をしなければいけません。以前入院したことがあると聞いていた日赤に問い合わせ

せてみましたが、その当時には血腫はなかったそうです。頭を打たれたということはありませんか」

「えっ？ いえー。膝折れしたとか、尻餅をついたとかは聞いたことがありましたけど、頭を打った話は聞いたことはないです。高齢な父なのに、どうしても、手術が必要なのでしょうか」と聞くと、女医は言った。

「手術しないと後悔することになりますよ」

日赤ではすぐにでもという緊急性はなさそうだということで、二日後に外来に来てもらえればという話なのだが、それまで当病院で面倒が見られるかどうかと、口ごもりながらも執拗にその女医は訴えた。夜間の父の有様が思いやられた。やむを得ず、「それならば他の病院で受け入れてくれるところはないでしょうか」と聞くと、女医はほっとしたように嬉しそうな声で、「当たってみます」と電話を切った。

南中央病院なら救急で受け入れるとの連絡。私も駆けつける。父は早速、様々な検査を受けていた。今までの状態、既往症を聞かれる。途中、普通は立ち入れない救急の病室の中に引き入れられ、そばに居てくださいと言われた。父を落ち着かせるためらしい。

「病院が嫌いなようですね」と、その看護師は困ったような顔をして言った。

目を瞑り、顔をしかめていた父に呼びかけると、「ああ、綾子か。迷惑かけるね」と言う。私の手作りのアイマスクをしっかりと着けて、それを額にずり上げたままだ。

「お父さん、いろいろ検査してくれてるんだから、怒鳴ったりせんとよ」というと、「なーも、怒鳴ったりしよらんよ」と優しげな声で答えた。しかし、それもつかの間、次の検査に連れ出されるときには「ああー、何ね！」と看護師に不機嫌な声を出していた。

検査が終わるまで、冷房の効きすぎる待合室でただ一人、スイッチがどこかにないものかと目で探しながら長いこと待たされた。壁の時計を見ると、五時過ぎている。家に電話して、母に状況を知らせ、遅くなるかもしれないと告げる。

去年の六月、父が脳梗塞の発作で倒れたとき、電話して兄夫婦に来てもらった。検査が終わってICUに移されるまで、待合室で三人一緒に待った。今日はただ一人。父の面倒は意地でも一人で見てやるんだと決意している。

七時も回った頃、やっと終わって、父はICUに運ばれた。ここのICUは全くの出入り禁止だ。小さな会議室みたいな部屋に通され、入院手続きの用紙を書かされた。詳しい既往症を聞かれ、また、パソコンの場面から今の状態の説明を受ける。頭の片側半面に大きな袋状のものが見られた。これが硬膜下血腫だ。去年の脳梗塞の後遺症としての脳の萎縮はあるものの、最近の暴言や奇行はこれが原因だろうという。随分昔から高血圧、動脈硬化があったので、ワーファリンを飲み続けていたが、それが効きすぎていて血腫が大きくなってしまったらしい。これ以上大きくなると危険なので、ワーファリンは止める。血液をサラサラにする注射に変える。いずれ手術が必要となるが、その前に貧血がひどい原因を突き止めなくてはならない。胃の断面では分からなかったのも、まだこれから、どこから出血しているのかの詳しい検査が必要だ。貧血が更にひどくなれば輸血が必要になると思われるので、その同意書を書いてほしいと言われた。

父の高齢、慢性心不全、脳梗塞の後遺症、その他いろいろのことを考え合わせて、手術や輸血をすべきなのかどうか。父はもう九十四歳。もう痛い思いをさせなくてもいいんじゃないのか。

尊厳死の宣言書はもちろんここでも提出した。

研修中みたいな若い女医が渋面を見せながら、粘り強く書類のサインを迫った。

「うーん。そうですねー。輸血はこれこれの理由で必要です。リスクはあるのはあります。リスクはこれこれです。しかし、手術をするときにも輸血の必要が生じますし、サインはしておいてほしいんですが」

彼女は宣言書のコピーを見ながら、これは宗教的なことですかと聞いた。今の私に宗教は関係ない。ある信仰にすべてを投げ打って命をかけていたのは、もう遠い昔のことだった。ただ、医療の技術や薬の効果しか追いかけていない今の医学に疑念を抱いているのは、信仰からではなく、人の命に対する信念とでもいうものか。私はしかし、説明するのも面倒くさく、そうですと答えた。書類を前に押し黙っている私に、彼女は言った。

「輸血しないと命にかかわりますよ」

更に、言う。

「何もしないということになると、ここに入院している意味もなくなるので、出てもらうことになります」

これではまるで、強迫だ。私は仕方なく、同意書にサインした。自分自身のことならば、はっきり言える。

(私は絶対手術はしません。輸血も受けません)

差し迫った状態になったとき、私はそれを自然のことと受け止めるだろう。近代医学なるものを私は信用していない。しかし、肉親とはいえ、父は別の人間。どんなに年取っていようと、どんなに病状が悪化していようと、どんなことをしてでも生きたいと父自身は思うかもしれない。父の寿命を娘が勝手に決めるわけにもいくまい。

夜の八時も随分過ぎて、やっと家に帰れた。心配して待っていたであろう母と、とりあえず買ってきたお弁当を食べながら、母の気持ちを聞いてみた。母は「もうあの年で手術やらせんでよかろうもん。輸血も何もせんでいいやろう」と、嘆くように言った。

(九月二十四日)

南中央病院に足りないものを持っていくが、ICUには入れず、受付に預ける。遺言書を作るときに世話になり、またホームに入るときに身元引受人になってくれた高崎氏にまた連帯保証人になってもらった。兄に頼みごとをするなんて、金輪際嫌なのだ。兄が居なくても、親の面倒は私が見る。高崎氏に心から感謝！

浅田病院で退院手続き。その後、当座必要なパジャマや下着などを取りに楠木ホームに行く。

山に近いホームの周りは、里よりも早く金木犀が咲きほころび、芳しい香りに包まれていた。ケアマネが驚きの顔で迎えた。あれよあれよという間に連れて行かれて、私たちがビックリするばかりでしたと言った。いつも押し出しの強い彼女が「悪いことをやってしまった気がして……」と少し反省した風でもあった。この人にせつつかれてではあったけれど、父に私自身も言いたくないことを言ってきたことに胸が押しつぶされそうな後悔を覚える。親を預けている家族としての引け目から、彼らにクレームは出せなかった。本当は父の味方になって、父と一緒に不平不満をぶつけてやりたいくらいだったのに。

(九月二十五日)

南中央病院の女医から電話があり、父の胃カメラの検査をしたいのだがと言ってきた。「本人に聞いてください。本人がいいと言え、してください。私のほうはすでに同意書を書いてるんですから」

そう言って電話を切った。肩の荷が下りた気がした。数日散々悩んだ挙句、決めた。もう、父に任せよう。手術をするにしても、輸血をするにしても、本人に任せよう。どちらにせよ、今まで自分が決めたことは人が何と言おうと頑としてやってきた父なのだ。どんなに本人のために良かれと思って言っても、自分が納得しないことに対しては一切聞く耳を持たない人だった。

今までの暮らしの中で、父の頑固さに手を焼いたことも多かった。例えば、朝食はパンだったが、マーガリンをこれでもかとはばかり二度も三度も塗りつけては焼き、塗りつけては焼いて食べていた父。塩辛いのは身体に良くないよと言っても聞かず、醤油をザブザブかけていた父。薄味にすると機嫌が悪い父。もう知らない。病気になったら自業自得だ、と腹を立てたことが何度あったろう。人の忠告を聞かないから、案の定、脳梗塞で倒れてしまったのではないか。

今回も、父に一番いいのはどうすることだろうと悩んできたが、本人に決めさせればいいんだという結論に達したとき、一人で抱えていた荷物を降ろすことができた。

(九月二十七日)

病院に呼ばれ、父の担当になったという内科医の、やや年配の男性医師から父が胃がんであることを聞く。すでに手遅れとのこと。パソコンの画像を見せられる。胃壁は真っ黒だった。そこに何本かの赤い傷が走っている。ここから、血液がザーザーと流れ出していたのがひどい貧血の原因だったのだと。他にも転移があるかもしれないが、胃がん自体末期でもあり、高齢でもあるので、これ以上の検査はできない。そのうち痛みが出てきて、食事が通らなくなるだろうという。

本人に告知するかどうかと聞かれても、どうすればいいか判断できない。母に相談しても、たぶん無理だろう。他に兄弟はと聞かれたが、事情があつて絶縁していると答えた。余命ははっきりと断言できないと医師は言った。緩和ケアの病棟はここにはなく、相談員と話し合っ探してもらおうことになる。数日後にもう一度脳のCTを撮るので、その結果しだいで手術をしてからの転院となるかもしれないとのことだった。

その後相談員との話で何箇所かの候補を挙げ、来月からその見学と面談に行くことになった。去年、佐野病院から施設探しであちこち駆け回った、そんな日々がまた繰り返されるわけだ。ホームに落ち着いて、まだ二ヶ月を過ぎたばかりだというのに。何とか、父が痛みを覚え、穏やかに余生を過ごしてくれればと願う。しかし、もし手術をしないままで更に暴言や奇行が激しくなったら、緩和ケアの病院に転院できても、また追い出されるのではないかと不安が募る。

それにしても、浅田病院やここの救急で、「手術しなければ後で後悔することになりますよ」、「輸血しなければ命にかかわりますよ」などと脅かされてきたことは一体何だったのだろう。結局、今の医学は何も出来ないんじゃないか。手遅れと分かったら、さっさと見捨てて退院させようとするくせに、あの脅しは一体何だったんだと、心の中に黒いものが渦巻く。

帰って、母にすべてを話す。母は「お父さんも、もう年なんやけん、なあーもせんでいいよー」とただただ繰り返す。

楠木ホームのケアマネに父が癌だったことを電話で伝える。これから緩和ケアの病院を探すことになるというと「では、退所ということになりますね。癌の告知については、どうされますか」と聞かれたので、まだ思案中だと答えた。すると、彼女はこんな話をした。癌の告知推進派のある偉い医師の話で、医師自身が癌になったとき、周りは躊躇なく告知した。その途端、たちまち寝たきりになってしまった。告知も考え物だと。

(九月二十八日)

ネットで緩和ケアの病院を調べる。相談員が一番に名前を挙げていたA病院はキリスト教系の病院らしい。少し遠いが、ここなら安心して父を任せそうな気がする。四、五件も行くところを挙げていて、面談の日が次々に決まっていくが、気持ちは大きくこのA病院に傾いている。

しかし、その前に、受け入れ先が決まるまで一ヶ月以上掛かり、その間南中央病院には居られないかもしれないらしく、相談員はホームには戻れませんかと聞く。それがだめなら、他の病院にワンクッション置くしかないともいう。

期待もしなかったが、一応楠木ホームに電話してみた。緩和ケアの病院が決まるまで、一時的に戻れないかと聞いてみたが、もうすでに、次に入る人が決まったのだという。私には特別の執着もない。来週、退所手続きに行くと言って電話を切った。

後のことばかり心配していた父、脳梗塞を再発して

(十月一日)

脳の検査の結果を聞きに行く。脳外科の、これまた坊やみたいな若い医師がパソコンの画面を見せながら説明する。すぐにでも手術の必要があるわけではない。しかし、簡単な手術だし、しておいたほうがいいのではという。頭蓋骨に小さな穴を開け、血を抜けばいいのだそうだ。私は押し黙る。

(頭蓋骨に穴?)

若い医師は「手術をしないと、そのうち、左手が動かなくなりますよ」と言いながら、自分の左手を上下に動かした。

「しかし、手術をしても、これはまた再発します。尊厳死の宣言書を見ましたが、あれはどうかるところまでのことなんでしょうかね」と言いながら、パソコンのページを繰って宣言書のコピーを出そうとする。

(えっ、再発する?)

私は後ろに立って控えていた担当の医師を振り返った。

「でも、胃がんで手遅れなんですよ。手の施しようがないんですよ」

担当の医師は痛ましげな顔をして、頷いて言った。

「もう少し、検討されますか」

「いえ、再発するのなら、もう手術はしません。」

私はきっぱりと言った。手の施しようがない末期の癌に侵されているというのに、再発すると決まった手術を、何で痛い思いをして頭に穴を開けるなんてことを何度もしなくてはならないのだ。左手一本が動かなくなるかもしれないことなんて、癌の苦しみと比べてどれほどのことがあるのか。こんな学校出たてみたいな若い医師に何が分かる！ 人間は部品の集まりじゃないぞと叫びたい。手遅れの癌と見放した一人の人間の、脳の一部だけは一時的だが治せるというのか。高齢だろうと、リスクがあろうと、全身に転移しているかもしれない末期の癌があろうと、再発するとはっきりしている脳の一部の手術を繰り返しようとする、その考え方が私の理解の範疇を超えていた。

まだ何か言い足りないような残念そうな様子で、パソコンに顔を向けたままの若い医師を残して、私は席を立った。担当医が隅にある椅子にいざなった。

「それで、ワーファリンのことなんですが、飲み続ければ血腫も大きくなり手術をしなければ危険になりますし、胃からの出血も止まりませんので、これ以上の貧血になればそれも危険ですし……。どうされますか？」

「血液は注射でサラサラにしていると聞いてましたが」というと、「あれは一時的なものだったので……。ワーファリンを止めれば、血管が詰まる恐れがあるのはあるのですが……」。

もう、どっちに転んでも仕方がないわけだ。自然に任せるしかないだろうと私は思った。人間の命を無限かと思うほどに延ばしてきた近代医学でも手の施しようがない状態ならば、せめて、痛みのないよう、残りの命を安らかに過ごさせてやりたい。

「ワーファリンは止めてください。それから、告知も緩和ケアに落ち着いてからにします」

来週一週間、学会か何かで留守するので、代わりに担当するという医師を紹介し、去ろうとした担当医に私は継るようにして聞いた。

「父の余命はどのくらいなのでしょう？ 転移しているんでしょうが、もし胃だけと仮定して、どのくらいでしょうか？」

余命いくばくもないとしても、私には心構えが必要なのだ。すでにそれはあるけれども、覚悟の上の覚悟が。

「いや、何とも……」

言いにくそうに言葉を濁したまま、医師は答えてくれなかった。

私はその日、医師に会う前に父の病室に顔を出していた。

「わしは頭を打ったのやろうか？」と、癌のこと以外は聞いているらしく、父は首を傾げながら言った。少し考えて、聞いてみた。

「もし、手術をしたほうが良いと言われたら、お父さん、どうする？」

「そうやねえ。手術しようかねえ」と意外にも、驚くほど明るい声で父は答えた。

もう、手術はしないことになったよと言いにいこうかとも思ったが、足が病室には向かわなかった。廊下の隅でぼんやりと立っていた。父の顔を見る勇氣は出ない。何を言ったらいいのかも分からない。そっと踵を返し、エレベーターのほうに向かった。

(十月三日)

代理の医師から電話あり。

父が脳梗塞を起こした。去年倒れたときには三時間以内なら可能という薬を使用し、そのお陰というべきか、その後の回復があった。今回はそれを使えないのだという。

「では、どうしたらいいのですか」

「そのことを話したいからすぐ来てほしいんです」

のっぴきならないものを感じて、母を連れて駆けつけた。

病室に入るなり、父の異常な状態に足がすくんだ。

「お父さん！」と呼びかけると、口だけを動かして必死に何か言おうとしているようだが言葉にならず、もがくように「あふっあふっ」と大きく息を吐き出す。すでに、目は泳いで焦点も合わない。右手を動かそうとしているらしく、掛布が少し持ち上がっているが、仰向けに横たわったまま身体はびくとも動かない。去年倒れて救急搬送したときの父の様子を見ているから、あまたか胸がつぶれる。覚悟はしていたが、こんなに早くとは。しかも、もう回復の望みはないのだ。

母が父の顔を撫でながら泣いている。

「お父さん、お父さん。きつかったねえ、お父さん」

父はただ「あふっあふっ」というばかり。しばらく母のなすがままにさせていた。優しそうな年若い看護師が悲しそうに言った。

「昼食をきれいに完食されまして。その後、味が薄い！ と大声で怒鳴られたんです。それから三十分して薬の服用のために来てみると……。あの怒鳴られたのがいけなかったのでしょうか」

完食して、怒鳴って……。父らしいと思った。

実は、前に聞いていたのだ。ここの食事は味が薄いとの不満を。そのとき、胡麻塩を作ってきてくれと頼まれた。塩辛いのは駄目という、市販の胡麻塩を買ってきてくれという。駄目と更に言うと、それなら自分で作ろうかねという。やれやれと思ったものだが、こんなことなら少しでも作ってやればよかったと思った。

(ごめんね、お父さん)

そのうち、母も気が済んだのか、もう帰ろうと立ち上がった。私は父の耳元で言った。

「お父さん、後のことは心配ないからね。大丈夫だからね」

いろんな意味を込めて、言った。「あふっあふっ」と悶え苦しんでいた父は瞬間、口をつぐみ、目を閉じて静かになった。分かってくれた気がした。

医師は今晚ということもあるし、このまま、長く生きる人もいますと言った。あらためて、心臓マッサージや人工呼吸器などの必要はないこと。安らかに逝かせてやりたいと告げた。

家に帰って、母に兄のところに電話をするように言った。なかなか腰を上げない母に、今電話をすればその気があれば駆けつけられるからと、ホワイトボードに言うべきことを書いて父のことを連絡させた。母はまるで棒読みのように書いた文章を読み上げていた。

(十月四日)

一人で父のところへ。昨日とは全然違って、魂が抜けたむくろのようになっていた。あの訴えかけるような「あふっあふっ」もない。点滴だけで命をつないでいる様子。昨日のうちに、母を連れてきておいて良かったと思う。緩和ケアの病院探しを支援してくれていた相談員に来てもらう。言うまでもなく、面談の予約はすべて取り消されることになる。私は不安そうに聞いた。

「このまま、ここにおらせてもらえるのでしょうか？」

彼女は痛ましそうな顔をして、「もちろんです」と答えた。

夜、兄嫁から電話があった。すぐ母に代わる。兄と仕事が済んでから病院に行ったらしい。呼びかけても何の反応もない、父のあまりの変わりように驚いた様子だった。昨日、駆けつけておけば、まだしもだったのと思う。ホームにも一ヶ月以上行っていなかったのだから、最近のことは何も知らずにいたのだ。それでも昨日は休みだったし、母の電話にすぐにでも行けるはずだっただろうに。父と最後の会話を交わし、脳梗塞再発後まかろうじて心通わすことができたのは私だけだったと思った。

南中央病院に入院してのことだった。父は私に何か欲しいものを買わんかと言った。

「時計かネックレスか何か。しかし、あんたは貴金属とか好かんもんなあ」

「ああ、時計ならいいねえ。丁度壊れてるし。でも、来年の一月でいいよ。私の誕生日に」

「そうか、それなら、来年ね。お金持ってきてね」

来年まで父は持つだろうか、と心秘かに思いながら、話を合わせて帰った。

脳梗塞が再発した前々日、十月一日のことだ。父はにこやかに「時計買おうよ」と言った。忘れずに、楽しみにしてくれているらしい。

「うん、来年ね」

そう言うと、父はこんなことを言い出した。

「ひ孫たちにお金を包んでやろう。お金持ってきて。何人おるかね」

「うん、正月でいいでしょ。お年玉で」

兄の子ども三人のそれぞれの子ども。双子も含め、八人になるだろうか。でも、向こうサイドの話はあまりしたくなく、話を逸らそうとすると、父はなおも言い続けるので、つい「向こうのことは私、知らんよ」と言うと父は急に不安そうに声を強めて言った。

「そうしとかんと、また京次が何か言ってくるやろうが！」

私は内心驚いた。四月一日に遺言書を書くために一時帰宅して以来、その話を二度とはしなかった。父は今もちゃんと覚えているのだ。兄が家を売ろうとしてきたことを。子供たちに小遣いを配るくらいで済む話ではないだろうが。父は父なりにこの半年間、忘れずに一人心配していたのだろうか。

(病気の父にこんな思いをさせて。兄たちを許せない!) そう、強く思った。

(十月五日)

楠木ホームに支払いに行く。

会議室に通され、退所の手続きを取る。二ヶ月ちよつとのことだったが、大変な迷惑とお世話になったことに感謝の意を伝えた。ケアマネが「ホーム受け入れがそもそも間違っていたんじゃないのと言っているんですよ」と男性の相談員を横目で見ながら言った。私には電話で別に迷惑なことはないですよと言ってくれていた相談員だ。

私は「それでも、感謝しているんです。遠くて洗濯物が大変だった施設からこのホームに入れて、ほんとに助かりましたから。たった二ヶ月でこんなことになるとは思いませんでしたけど」と言った。

父の荷物の残りをすべて持って帰る。大きな段ボール箱を相談員が車まで運んでくれた。車の後ろの窓にいつまでも立って見送っている彼の姿があった。

(十月六日)

看護師に頼まれた前開きの下着のシャツと、はくタイプではないおむつを買って持って行った。おむつとはいえ、すでに排尿も管を通してある。

屍みたいな父の姿に心が凍りそうになる。

「お父さん」

そっと呼びかけてみるが、微動だにせず、薄目すら開けない。入れ歯をしていない口は半開きで、あごが落ち込んでいる。身体も棒のように横たわったまま。

やってきた若い看護師に「もう、何の反応もないですね。これじゃあ、生きていたとは言えないですね」と、言っても仕様がないうのに、つい言ってしまった。彼女は悲しげな顔をして、「体の向きを変えるときに少し目を開けられるんですけど」と言い訳のように言った。

そのとき、「部屋を移ります」と、どたどたと看護師数人が入ってきた。私は部屋から追い出され、廊下で様子を見守るしかなかった。個室から四人部屋へとベッドごと荷物のように運ばれた父は、もちろん何も分からず、ものも言わず、ただ静かに横たわっている。逆に四人部屋から個室に移るといふ患者の移動に看護師たちが大わらわで、父はその後に移されるまで部屋の片隅

にほったらかしなのだ。父のそばに座る椅子もなく私は一人突っ立ったまま、無性に悲しく、情けなく、ぴくりとも動かない父を見ているのに忍びず、声をかける気にもなれず、忙しそうに右往左往する看護師たちに背を向けて部屋を出て行った。

父が亡くなって、母の混乱ぶりは見るも耐え難く

(十月七日)

早朝、父は息を引き取った。

最後は安らかだったらしく、医師の死亡診断書には、病死および自然死とあった。兄には看護師が私への電話の前に連絡したという。もちろん距離的に私より先に着くわけではない。会員になっている葬儀社に電話を入れた。看護師から父の遺体を清めた上で霊安室に移すのでそちらへと言われたが、兄と一緒にするのは恐ろしいので、誰も居ない食堂で一人待った。看護師から「歯は入れますか？」と聞かれ、「ああ、入れてください」と答えた。あごが落ち込んだ顔をきれいに整えてほしかった。これから、いろんな人に死に顔を見られるのだろう。せめて、見た目は穏やかであってほしい。

兄嫁と姪の未樹がその食堂にやってきた。兄嫁がしくしくと泣きながら、「何もかもさせてごめんね」と言った。しかし、その後ろに突っ立ったままの未樹の非難めいたまなざしを私は感じていた。彼女は父が松川園に入所したときから、兄嫁を代弁しているかのようなことを言っていたので、私に対して反発心を抱いているのは明らかだった。

私が動こうとしないもので、兄嫁と未樹は私を残して霊安室へと向かい、その間に私は父の荷物を車に運び入れた。

葬儀社が来たと、看護師から霊安室に案内された。霊安室には線香が焚かれ、兄たちがその前に座っていた。父は棺に納められ寝台車で葬儀場へ運ばれていった。兄たちはその後をついていった。兄とは目も合わせないまま、私は一人、母の待つ家に戻った。

母は意外と冷静に受け止めたように見えた。思えば、去年の六月に倒れてからの一年と数ヶ月は、常に覚悟の日々だった。母も体調を悪くして、父と顔を合わせたのは数えるくらいではなかったか。父の世話は一切私がやってきたし、最近父のいない生活に慣れてしまっていたのかもしれない。

通夜は午後六時で、葬儀は明日の午前十一時と兄嫁が連絡してきた。今、葬儀社と打ち合わせをしているのだが、かなりの金額を追加要求されているのだと訴え、「こっちにきてくれないかなあ」と言う。私は少なからずうんざりした。

「葬儀社には前もって最低限でお願いしているから。差し引き足りなかったら、私が出せばいいんでしょ。」

兄嫁は一瞬黙り、そして言った。

「葬儀社の支払いは一週間後そちらに集金に行くということだけど、お坊さんには明日払わないといけないそうだから、〇十万用意しておいて」

写真が要るというので、午後になって優太と未樹が家にやってきた。アルバムから良さそうな写真を数枚用意した。ここ数日の父の目まぐるしかった状況を話していると、押し黙っていた未樹が私を睨むようにして突然口を開いた。

「すぐに知らせてくれればよかったのに。おばあちゃんが電話をくれて、やっと分かったのよねえ」

母には「ねえ」と猫なで声で肩をさすりながら言う。母もにこやかに未樹に笑顔を向ける。私

はムカツとした。

「親がまだ生きてるうちに、家売るなんて言う人に私から連絡はしないよ」

「売るとは言っていないでしょ」

「折半しようって言ったの！」

全く、兄嫁と同じことを言う。売らずにどうやって折半するというのだ。のこぎりでも持ってきて、家を二つに割ろうというのか。これは詭弁というしかない。

優太が横から取り成すように言った。「前から、そういう話はあったんよ」

それこそ、昔から親の存在を無視して、自分たちだけで勝手なことを相談していたということが証明される話じゃないか。そういう話をする事自体、おかしいだろうと思った。私は未樹に向かって言った。

「私に、おまえはお墓に入れんぞとも言ったわ。もし、あなたが離婚して家に戻ったとして、お前はお墓に入れんぞと言われたら、どういう気持ちがる？」

「そんなこと……」と、未樹は小ばかにしたような顔で首を振る。

「私はいいんだけどね。お寺で永代供養してもらおうから」

「大体、お父さんは親切で、叔母さんのためにも思って洗濯物を持ってきたんだから。それなのに、何で持ってくるのかと顔を見るなり、そちらが先に怒鳴ったんでしょ」と言う。

（ああ、分かった）と私は思った。兄嫁が電話で言おうとした「あなたが先に……」の続きの言葉がこれだったのだ。

「あーあ、それでね。それで売り言葉に買い言葉ってことになってるわけね。私は怒鳴ってなんかいないよ。こちらは暴力振るわれそうになったんだから」

「暴力なんか振るってないでしょ」と眉を顰め、憎々しげに彼女は言う。

「お母さんが泣きながら止めてくれたのよ。ねえ、お母さん」

「うん。泣いたことだけ覚えよう」

黙って聞いていた優太が横から辛そうな顔で言った。

「おやじの性格は知っているでしょ」

「えっ、性格って？」

「カーとなるとよ」

「えっ、殴られるの？」

優太は首を振ったが、子どもの頃はよく殴られたという。私は驚いた。私は父親から暴言や暴力を受けたことがない。父はおとなしい穏やかな人だった。昨年からのことは脳梗塞で倒れた後遺症ゆえだ。だから尚更、信じられない思いで苦しんできた。ところが、兄は昔からカーと逆上して子どもを殴っていたなんて、初めて聞いた。

そういえば、優太は人から勧められても全くお酒を飲まなかった。兄は若いころから酒飲みで、休みには昼間、いや朝っぱらから飲んでいたものだ。もしかしたら、反面教師だったのかも知れない。兄はお酒の飲みすぎで性格が変わったのか。もしかしたら、脳の組織がやられているのかも知れない。少なくとも、結婚前までは兄があんなに激昂するところを見たことはなかった。

父が松川園から楠木ホームに移った後に、兄が知らずに松川園に行っただけが分かったとき、

激怒したのだという。その後で、私が出した葉書が届いたらしい。その葉書は、自らは電話をしようとしないうちに母に代わって母の名前で出したものだ。急に決まった話でもあったが、私はわざとギリギリに葉書を投函した。昨年、S市の施設に入れようかと思うとも言っていた兄だから、そんな兄たちに横槍を入れられたくなかったのだ。

未樹が険のある顔で更に責め立てた。

「すぐ知らせてくれてたら、よかったのに。ねえ。おばあちゃん」

「昔は仲の良い兄妹だったのにねえ」

「やめてよ。仲なんか良くなかったし。子どもの頃に一度おなかを殴られて、息が出来なくて死ぬかと思った事があったわ」

「そんな、子どもの頃のことなんて」と未樹が吐き捨てるように言う。

「ねえ、おばあちゃん」

「うーん」

母が未樹の猫なで声に答えてにこにこ顔で頷いている、そんな姿を見るのも嫌だ。

今までも思う事があったが、親なら理不尽な兄を諫め、兄妹の間の仲裁をしてくれても良さそうなものではなかったか。まるで八方美人みたいに、彼らの甘言に遭うと、ころりと私を見捨てて向こうに擦り寄るのだ。とは、思ってみても詮無いことと分かっている。今の母には、判断力も思考力も理解力も何もない。すでに親と子の立場は精神的に逆転してしまっていた。人は老いると、かくも壊れてしまうものかと呆然となる。そうなるまで、自分は生きていたくない。つくづくそう思う。

(もう、耐えられない)

私はいたたまれなくなって、立ち上がった。

「私の悪口を言いに来たんなら、帰って」

そして、部屋に閉じこもった。優太が一緒だったので、つい気を許していた。それに、父が亡くなったその日に姪があんな口を叩くとは思ってもしなかった。兄や兄嫁とそっくりそのまま同じことを言う。私に対して彼らと同じ悪感情を持ち、彼らの代弁をしているつもりだろう。それにしても、私はこれまで自分の叔父や叔母や目上の人に対して、あのような口を利いたことはなかったと思った。

しばらくして、優太が部屋をノックした。彼は分かってくれているようだ。すぐに関係修復は出来ないだろうが、自分たちは仲良くしてほしいと思っているという。優太だけが唯一理解を示し、「何かあったら、自分に電話して」と言ってくれたのだ。嬉しくて涙ぐんでしまった。しかし、驚くべきことも言った。

「おやじもそのうち、死ぬと思うよ」

どういう気持ちで言ったのだろう。この言葉だけは心のどこかに引っかかった。いくら、ひどい親だとしても子供として、私だったら口には出せないと思ったのだ。

「結婚前まではあんな人じゃなかったけどねえ」

つい、言ってしまった私の言葉を彼はどう受け取っただろう。言外に兄嫁にも責任があるように含まれたものと感じただろうか。

私は今まで、甥や姪に彼らの親の悪口を言ったことは一度もなかった。もちろん、甥や姪の悪

口を兄たちに言ったこともない。そもそも人の悪口を言うのは嫌いだ。しかし、兄たちとのゴタゴタがあってから後というもの、私は意識を変えなければならなかった。世の中にははっきり言わなければ逃れようのない状況というものがあるのではないか。黙って引き下がってばかりでは潰されてしまう状況というものがある。

二人は写真を持って葬儀場に戻っていった。

通夜では母の泣く姿は痛ましく、お焼香も人に抱えられてやっとのことで済ませるような状態だった。その後、隣の控え室に通夜ぶるまいが用意されていて、親族が集まった。とはいえ、兄の一族だ。甥一人姪二人の配偶者の分も含め十人分注文していたが、母はもちろん私も食欲なんて全くない。小さな子どもたちは数に入れていなかったが、母と私の分をまわしてくれと言いつつ、ほんの一口手を付けただけで、遅れてきた親戚や近所の人などの通夜客をホールのソファで接客した。母は誰彼となく、「いや一懐かしいねえ。外で会っても分からないよ」と言っている。

結局、甥姪の配偶者たちは一人も来なかった。控え室に戻ってみると、大人五人と二、三歳のひ孫たち二、三人で、所せましと並べられた大皿に山盛りに盛られた十人分の料理がきれいに平らげられていた。そうして、明日の用意もあるというので皆ぞろぞろと帰っていった。私も母もとても夜通しというわけにはいかない。葬儀社の担当者に後を任せ、母を連れて帰った。父は寂しいかも知れないがどうしようもない。

(十月八日)

父の葬儀には喪服を着るのだと言い張った母だが、なかなか起きてこない。葬儀場では午前九時からお斎があるのだが、もう間に合わない。兄嫁にはその時間に行けるかどうか分からないとは言っておいた。しかし、喪服を着るなら、もうそろそろ起こさないと葬儀にも間に合わなくなると思い、声を掛けてみた。布団の中から母はだるそうな声で「今日はどこかに行くとかね」と聞いた。

(えー。まさか)と驚きながらも、まだはっきり目が覚めていないのかもしれないと思い、しばらく待った。

「今日は何があるとかね」

「お母さん、昨日通夜だったでしょ。喪服を着るって言ってたでしょ」

「え、誰の通夜って？ うーん、誰かねえ？」そういつて、頭を抱えている。

「夢を見たとよ。誰かが焼かれようと。その人が全然熱くないよと言うと。えーと、あの顔は誰やろうか」

私はショックを受けて、たまらず泣き出した。何より一番の衝撃だった。

「誰か言おうか？」

「ちょっと待って。誰やったかねえ」

私はひいひいと声を上げて泣いた。横でこれほど私が泣いているのに、それでも気がつかず考え込んでいる母の姿を見ながら、悲惨すぎると思った。

「お父さんでしょ、お母さん」

「ああ、そうか。そうやった」

喪服はタベのうちに小物などもすべて用意して、母は試着までして、壁に掛けてあった。しかし、それももう間に合わない。通夜に着ていった黒の礼服を着てもらって、ようやく時間に間に合った。

葬儀が済むと、棺の中にお供えの菊花をちぎって皆で納めた。棺に納まった父の顔は昨日は穏やかだと思ったのに、今日は何だか歯をむき出しているように見えた。時間が経つと硬くなり萎縮していくせいらしい。

車に分乗し、火葬場に移動する。火葬が済んで出てきた骨と灰だけの父の姿。むなしさを感じた。これが人間の最期の姿か。葬儀社の担当者が順に親族を呼び、ここはどこの骨ですという説明をしながら箸を差し出す。親族一同が順繰りに骨を取り上げては骨壺に納めていく。私は涙が止まらなくなった。嗚咽しそうなほどだった。三順目に呼ばれたとき、担当者が椅子に腰掛けて泣きしきる私に気がついて、大丈夫ですかと声を掛けた。皆がいつせいに振り向いた。私はハンカチで顔を抑えながら立ち上がったが、そのとき未樹の三歳になる女の子の視線を感じた。この子は赤ちゃんのときから笑わない、人をじいーと見つめる子だった。未樹に似たその冷たい視線にすーと涙が引いた。

ここは腰の骨ですと担当者が言った。ああ、父が痛い痛いと言っていた腰かと思った。私は心の中で呼びかけた。

(お父さん、身体の悪いところ全部焼けて無くなったね。内臓を蝕んだにつくき癌細胞も、脳神経を圧迫した血腫も、長年辛い思いをした腰痛も何もかも。そして、パンパンに膨れ上がった心臓は役目を終えたんだよね。良かったね。もう、痛くも辛くもないよね)

骨壺に納まった父と遺影と法名軸を抱え、火葬場から葬儀場に戻る。それから続けて、初七日法要だ。最近葬儀の当日行うことが多いという。兄嫁が子供たちの分や、飲み物などを追加していた。通夜ぶるまいのような大皿ではなく、テーブルで洋食のコース料理だ。昨日も鳥のから揚げなどが出ていたようだが、今日も肉や魚が使われている。いまどきは精進料理じゃないんだと驚いてしまう。食事が済んで、そろそろお開きの時間が近づいた。

兄嫁が寄ってきて、遺骨はそちらで引き取られるだろうから、お位牌をもらいたいと言う。思いがけない言葉に、私は言った。

「でも、そちらに仏間や仏壇があるし、お墓もそちらのだし。こちらのほうはお位牌だけもらいたいんだけど」

すると、兄嫁は非難の目をして「ええっ？ 喪主はお母さんでしょ」ときつい声で言った。兄嫁は、今度は母に聞いた。

「遺骨はそちらで引き取られて、法要もそちらでされますよねえ」

すると、母はにこやかに「いやー、もうお別れはしたし……」と、全く家に連れて帰る気はなさそうだ。

兄嫁は「えっ？」と言って、向こうに行ってしまった。兄と相談しているようだ。母が拒否したのが意外だったらしい。戻ってきて、「S市で四十九日をするとなるとお母さん来られる？」と私に聞く。

「それは無理」と首を横に振って答える。母の様子を見れば、分かるだろうに。彼らも無理だと

思うから、「お母さん、来られる？」などと聞くのだ。

兄が向こうのテーブルから怒ったように大きな声を出す。

「霊園の近くの寺ですればいいんじゃないか！」

葬儀までは甥姪の配偶者たちとその子供たち全員が揃っていた。しかし、二人の姪の夫たちは、仕事があると途中で帰ってしまっている。身内しか残っていない中で、しかもお酒も一人で飲んでいたし、このままじゃ切れるかもしれないと恐ろしくなってきた。

つまり、兄たちは四十九日の法要も寺の手配も霊園の手配も、そしてもちろん費用もすべて、こちらに押し付けようとしているのだ。その霊園は距離的には彼らの家よりうちのほうがやや近い。だから、家でするにしても、寺でするにしても、とにかくこちらに何もかもさせようとしているのがひしひしと感じられる。しかし、この二日間の母を見れば分かるはずだ。母はもう何も出来やしない。「喪主でしょ」というがそれは名前だけでいいじゃないか。母を哀れに思うなら、長男として代わりにしてやってもいいはずだ。なのに、実際は私がすることになるのを百も承知で、すべてを私に押し付ける腹なのだろう。それにしても、私を入れないとやったその霊園の手配まで私にさせようとする彼らは、何て厚かましいのだろう。

しかし、父をたらいまわしするようなのもかわいそうだし、兄がまた逆上しそうなのも怖かったので、抵抗はすまいと思った。

「お母さん、お父さんも家に帰りたいたろうから、連れて帰ろう」と母に言うと、母はそれでもなお「もう、お別れしたからいい」と澄まし顔だ。それはいいのだが、遺骨と遺影とお軸と、そして母を連れて、私一人でどうやって帰ればいいのかのさうらう。

兄嫁がまた兄のところに行って相談している。しばらくして、またそばにやってくると、「一人で大変なら、私と京次さんがついていくけど」と言う。冗談じゃない。兄が家に来るなんて、それこそ恐ろしい。私は首を振る。

「いい」

優太が手伝ってくれないものかと思い、そっと目で彼を探す。彼は食事のときは隣の席だったのに、いつの間にか向こうのテーブルに行ってしまうと、遠巻きに見ている。

(それも、無理か……)

この日、優太の嫁が子連れで来ている。彼女は妊娠中で体調が悪く、本当は今日来るはずではなかったが、無理して来てくれた。優太は大事な家族を早くつれて帰らなくてはなるまい。私はつつと席を立て、部屋を出、葬儀社の担当者に相談した。遺骨だけを母に持たせて、遺影とお軸は下に置いても構わないということだった。

部屋に戻ると皆が母を取り囲んでいた。母は承服していない顔だった。そんな母や皆を無視して私は言った。

「遺骨だけお母さんに持ってもらえばいいそうだから、車に積むのを手伝ってくれる？」

「いいよ。もちろん」と真知が明るい声で言った。ほっとした顔をして優太が骨壺をいそいそと風呂敷に包んでいる。

お供えされていたお花や果物の大半は姪たちに分け、残りを持って帰ることにした。軽の後ろの荷台に葬儀社から会員に渡されるというテーブルや大きな箱詰めなどや、お花や果物を皆で詰

め込み、そして箱の上に遺影を置いた。兄も手を貸してせっせと運び込んでいる。フロントにお軸を横たえた。母の膝の上には遺骨が乗せられた。

皆が見送る中、暗くなりかけた道路へ出る。しばらく走ってから不意に気が付いたのか、母が驚いたように後ろを振り返って言った。

「えっ？ 誰もついて来んと？ 誰か後ろに乗っとうかと思うとった……」

「そうよ。誰も来んよ。いいよ、私が全部するから」

「まーあ。誰も来んと！」

母は目を丸くして驚きの声を上げる。二日間、憔悴してふらつく母を皆で代わる代わる両脇から抱えて寄り添ってくれた。その彼らがいつの間にか居なくなっていたのだ。兄たちは人前だけと分かるが、優太にしても、親がいる間は何もできないんだなと思った。そう、誰も当てにはできない。当てにした私が間違っていた。

家に着くと、私は大忙しで車から家の中に何往復もして荷物を運び入れた。父と母の部屋にテーブルをセッティングし、遺骨を置き、遺影を飾り、葬儀社にもらった箱から色々なものを取り出して、ろうそくを灯し、線香を上げ……。

なぜか、母はそれを嫌がり、応接室に飾ったらと言う。

「応接室は洋間だし、ソファーとテーブルでいっぱいでしょ。置くところがないもの。お父さんはずっとここに寝ていたんだから、ここでいいじゃない」と言っても、しつこく応接室にと繰り返す。

「応接室は無理よ。見てみたら？」

母は応接室を覗きに行つて、無理と分かったらしいが、なおもぐずぐず言い続けた。なぜこんなに嫌がるのか、分からない。遺骨が気味悪くて、同じ部屋に寝るのが怖かったのだろうか？ 七十年近くも連れ添った夫なのに……？

遺族は悲しんでばかりはいられない...

(十月十五日)

週明けから私は忙しかった。遺族とは悲しんでばかりはいられないのだと初めて知った。区役所に数々の手続きに行かなくてはならない。区役所の中でも、市民課、保険年金課、納税課。書類が不備だとまたあっちの課、こっちの課と行ったり来たりだ。そして、保健福祉センターに社会保険事務所。病院の支払いと葬儀社の支払い。その合間を縫って、整体へ。

何より驚いたのは、葬儀の次の日から贈答品の会社や仏壇屋が入れ代わり立ち代わりやって来たことだ。何で分かったのですかと聞くと、葬儀場の前を偶然通りかかりましてと皆判で押したように言う。電話も次から次と掛かってくる。更に、宅配便でカタログが勝手に送られてくる。一週間で計十件を越えた。私は嫌になって、すべて断った。いい加減にしてほしい。

今日は午前中に病院の支払いに行き、午後は葬儀社から集金にやってきたが、香典返しもここに依頼することにした。なので、いろいろな売り込みはここから情報が漏れたわけではないようだ。それでは、火葬場から漏れたのか。何々家という立て札はあったが、住所・電話番号までなぜ分かるのか？ まだ区役所への手続きはしていないうちからだ。いや、火葬許可を取りに葬儀社が代行で行っていた。では、区役所で情報が漏れたのか？ 真相は分からないが、何とも資本主義の弊害だと思う。人の気持ちを無視して商魂たくましく売り込みだけを急ぐのは、全く逆効果としか思えない。

(十月二十七日)

母をもの忘れメンタルクリニックに連れて行く。前から佐野病院の紹介状をもらっていたが、やっと落ち着いたので母の状態をはっきり検査してもらおうと思ったのだ。父が亡くなったことで認知症が急速に進んだようにも見えた。

母はMRの検査を恐る恐る受けていた。結果は来週に出るということで予約して帰った。

(十一月五日)

この日の午後、もの忘れクリニックに結果を聞きに行く予定だったが、昼近く母がトイレで倒れてしまった。

突然、ドンと大きな物音がした。えっと思ったが、その後シーンとしている。何だか、胸騒ぎがした。行ってみると、トイレの戸が半開きになっている。そこから、母の足裏が見えた。

「お母さん！ どうした？」

完全に意識がなく、真っ青な顔で仰向きに倒れこみ、便器と壁との狭い間に挟まっている。脈を測ってみようとしたが、よく分からない。父が倒れた日のことが脳裡を掠める。

(まさか……)

震える手で受話器を手にしたが、何番に掛ければいいんだっけと頭が真っ白になっている。

(えーと、警察は一一〇番だから、えーと、救急車は。ああ、そうだ。一一九だ)

「母がトイレで倒れています。呼んでも返事しません」

涙声になって訴えた。電話口で息はありますかと聞かれたが、分からない。待ってもらって、

見に行った。

「お母さん！ お母さん」と呼ぶと、目をうっすらと開けた。よかった。生きていた。

電話口に戻って気が付きましたと言うと、あれこれ母の病状を聞くので答えている間に、母は這い出てきて廊下に突っ伏している。敷布団を敷き、母を寝かせた。救急車が来て、応急処置をし、佐野病院に搬送することになった。普段着のままだがいいやと、急いで靴下だけ履き替え戸締りをして外に出た。あまりに慌てふためいている私を見かねたのか、救急隊員が声を掛けた。

「命に別状はありませんから、大丈夫ですよ。保険証は持たれましたか？ 戸締りと火の始末はいいですね」

私は頷いて、急いで救急車に乗り込んだ。

佐野病院では担当医が待ち受けていた。点滴と検査を受けた。幸い、脳梗塞ではなかった。トイレで倒れるのは高齢者に多いのだという。自律神経の失調で一時的に血圧が下がるらしい。頭も打ってはいないようだし、入院もしないでいいだろうということで数時間後、帰宅した。

(十一月十二日)

倒れたため一週間延ばしになっていた母のメンタルクリニック行きの日。結果を聞きに私だけが行くことになっている。

やはり、MR検査で母がアルツハイマーであることがはっきりした。これからも進行していくだろうと医師に言われた。長谷川式では一五という。母が書いた時計の図を見せてもらったが、長い時間かかって書いたのだという数字があちこち妙な具合に固まっていた。これまで、壊れていく母の様子を不安な思いで見続けてきた私には、最後通告を受けたようなものだった。

「もう、諦めました」

すると、女医は穏やかな口調で、訂正するように言った。

「受け入れるのですよ」

(受け入れる……?)

何かにも書いてあった。『諦める』のではなく、『受け入れる』。しかし、それは家族の、特に子どもの気持ちからは離れたものだと思う。

私は昔から、あまり親に相談しない、割と自立心の強い子どもだった。自分のプライバシーを大事にする、親にとっては内緒事の多い、甘えない、そんなかわいげのない子どもだったろう。しかし、親が壊れて初めて、気が付いた。私にも親を当然のように頼る心があったということに。権威というか、支えというか、親というものは本来そういう絶対的なものがあるのだ。当たり前前に頼りにすることも、日常の些細な話し合いさえも一切出来なくなって、その『絶対的』なものを意識して捨て去らなければならなくなった。それには、まず『諦める』ことが必要だった。もう、以前の母ではないのだと殊更に自分に言い聞かせなくてはならない。母は今、私に頼り切った生活をしている。私がいないと、一日として過ごせないだろう。立場は全く逆転してしまった。

治療としてはすでに去年から服用している薬しかないが、これは進行を遅くするだけで治すわ

けではないこと。いずれ、効果があるかもしれない薬が使用できるようになるだろうとのことだった。後は、デイサービスを週三回利用できればいいのですがと、優しい女医は言った。今現在、母の要介護度は要支援の一である。デイサービスは週一回しか行けない。区分変更の申し込みをすれば、介護度が上がるというので、包括に相談してみることにした。

(十一月二十二日)

明日は父の四十九日。

これまで、準備万端整えてきた。香典返しは明日配送されることになっている。近所の分はずでにまとめて届いていた。

葬儀の直前やつのことで間に合って、よろよろとする母を連れて席に着き、悲しみにくれている私の横に兄嫁が来て、香典のお返しをすぐにしないといけないとか、お花がお粗末だったので追加したとか、あれは自分の実家の母たちがくれた花輪だとか、子供たちが果物を追加してくれたとか、何度も何度も繰り返し聞かされた。葬儀自体の費用は一切出す気はないのに、体裁ばかり気にする人だ。こちらは飾り物の追加とか頼みもしないし、嬉しくもない。そんなことは今言わなくてもいいだろうにと、気分が悪かった。葬儀の後、香典返しのことを葬儀社の人に聞くと、四十九日の翌日着くようにすればよいと分かって、それを後日兄嫁から電話が掛かったときに伝えると、向こうもあとで聞いたらしく、「うん、そうだってね」と平然と言う。全く、あんなときにしつこく言わないでほしかった。

四十九日は二十三日にすることになったということは、手紙で知らせた。その中に、兄嫁の関係の香典返しをそちらでしたいのなら、こちらに預かっている香典は誰が幾らでと明細を付記した。しかし、「そちらのほうで一緒にしてほしい」と後で電話が掛かってきた。霊園への申し込み。僧侶への依頼。お布施、お膳料、お車料の用意。そして、法名軸はこの後過去帳になることを住職から教えてもらい、仏壇屋に買いに行った。それに住職から書き入れてもらえることになっている。初めてのことで、戸惑うことばかりだったが、あちこちに聞きながら、結局これら全てを私一人でやってきた。

夕方、兄嫁から電話があった。前に出した手紙には『当日の法要は午後二時に霊園にて部屋を借りて行い、それが終わってすぐ納骨となります。内々で済ませたいと思うが、そちらの関係への連絡はお任せします』と書いておいた。

電話の向こうから兄嫁が探るように言う。

「納骨が終わると……？」

はっきりと口にしないが、どうやら、その後食事をするのでしょと言いたいふうだ。そのことは母も言った。しかし、もう兄たちと食事を共にする気はない。別に絶対しなくてはならないものでもなさそうなので、中途半端な時間をこれ幸いというわけだ。もし、どうしてもしたいのなら、兄たちが手配すればいいだろう。

不服そうに間を置いてから、更に兄嫁が言った。

「お位牌はこちらでもらえるんでしょ」

「いいえ、浄土真宗ではお位牌じゃなくて、過去帳ということなんだけど、それはこちらでもらいます」

すると、兄嫁は「ええっ、話が違う」と何度も言う。

(何が、「話が違う」よ。違うのはそっちでしょ)

「母が居る間はこちらにもらいます。私一人になれば、すべてお渡しします。前にそちらでも作ろうかと言っていたでしょ」

そう言うと、黙ってしまった。葬儀の日の初七日の食事も済んだ頃、お位牌だけもらいたいと私が言ったとき、兄嫁は「えっ、こちらも欲しいんだけど。そう？ それじゃあ、お位牌をもう一つ作ろうかしら」と言いつつ、兄のところに相談に行ったようだった。最終的には、遺骨もお軸も母と私が引き取ることになったわけだが……。

父が亡くなったあの日、病院に遅れてやってきて、しくしく泣きながら「何もかもさせて、ごめんね」と言った、あの兄嫁の言葉は一体何だったのか。その後も全て何もかも押し付けて、拳の果てに「お位牌を寄越せ」とは！ 「話が違う」とは！

(一体、この人は何なの！？)

目を合わそうともしない兄と妹の間を右往左往して、仲を取り持つかのようにしていた兄嫁に、少しは氷も解けるのかなと気を許しかけた瞬間もあった。が、しかし、やっぱり駄目だ。この人の性根はこんなもの。きっとあれは嘘泣き。演技でしかなかったのだ。

電話を切ってから、無性に腹が立って仕様がな。勝手すぎるでしょと言いたい。母がまだ居るのだ。母が生きている限り、過去帳はこちらに置くべきだろう。欲しいのなら、向こうでも作ればいい。どこまで親を蔑ろにすれば気が済むのだろう。

風に乗って魂は天高く... さよなら、お父さん

(十一月二十三日)

やっと、四十九日の法要の日が来た。

先週、前もって霊園に行ってお見下ししておいた。何時くらいに家を出れば、丁度よい時間に着くのか。どの道をどう行けば間違いなく行けるか。父の遺骨を抱えて、道を間違えて遅刻などすれば、大変なことになる。少し、早めに行って、手続きもしなくてはいけない。いろいろ持参すべきものをチェックして、特に遺影は途中でガラスが割れてしまうようなことがあっては縁起が悪いと思い、ダンボールとガムテープで動かないようにした。

家には整理タンスの上にごく小さな仏壇が置いてある。昔、母方の祖父が手作りしてくれたのだそうだ。中には、生まれてすぐに亡くなった長兄のお位牌があった。六十数年前の白木のものだから、すっかり黒ずんでいる。住職にお願いして、このたび父と一緒に過去帳に記載してもらうことにしている。古いお位牌はお寺に納めてもらえるという。

遺骨と遺影とお軸と、それに仏壇屋で買っておいた過去帳と長兄のお位牌と、昨日葬儀社が届けてくれたお供えのお花と……。霊園の手続きに必要な印鑑と住職に渡すお礼と……。忘れ物がないように、チェックにチェックを繰り返す。早めに出ようとしたが、母の用意に時間が掛かり、ギリギリの出発となってしまった。その霊園は隣の市の町外れにある小高い丘の上を切り開いたものだった。父や母は数年前まで毎年一、二回、お墓の周りの草むしりのため兄たちに連れ出されていた。二人が病気がちになって後は、誘わないようにと私が何度か断ったりもしたが、父が倒れる年の春も誘い出されて行ったはずの母は全く覚えがないらしい。くねくねと山道を登っていくのに、驚いたような顔をして「へえー、へえー。こんなところにあるとね」と、初めて来たようなことを言う。そうして、何とか霊園の管理事務所に丁度いい時間に着いた。

事務所で火葬許可書を提出し支払いをして、手渡された領収書を見ると、宛名が『小松京次』になっている。母の名前で作り変えてもらうように頼むと、係りの人が妙な顔をする。私は腹立たしい思いで言った。

「この人はお金を出しませんから」

父の入院から施設から葬儀まで、一切お金を出そうとしなかった兄なのだ。兄名義のこの霊園の申し込みさえ私に任せきりだ。お金を出すわけがない。手続きも終わり、住職も到着して、過去帳に記載してもらっていたとき、兄夫婦と優太と小さなひ孫二人がやってきた。

先日、下見に来たとき、お墓の掃除と準備は霊園側でするとのことだった。帰りに、ふと気になって行って見た。見晴るかすばかりの広大な霊園だ。随分前に買ったものだから、区画番号の一桁台の一区画にただ一つ、小松家の墓は草茫々の状態であった。空のまま残っていたのはうちだけだったのだろう。家に母を残している私に時間の余裕もなく、兄嫁が電話で当日早めに来て草むしりすると言っていたしと思い、そのまま帰った。果たして、彼らは早く来て草むしりしたのやらどうやら。どうも、そんな様子には見えないが……。

法要が終わり、納骨のためお墓に。

住職がとてもよくしてくださった。霊園の人によると、法要を済ますと納骨前に帰ってしまう宗旨のところもあるそうだ。住職が遺影やお軸を飾り、前に骨壺を置き、そして私と優太でお花

を供え……。しかし、そうこうするうちに強い風が吹き荒れた。とても、ろうそくは無理だったが、何とか線香に火をつけて、一人一人手向けた。母はあまりの強風に身を縮め寒そうに青ざめて、霊園の事務所から運んできたパイプ椅子に座り込んだまま動けない。風は母の薄くなった髪を容赦なく巻き上げている。母は蒼白の顔で目を細め、その激しく吹きつける風に必死に耐えるだけで立ち上がることもできない。やむなく、私が代わりに母の分も線香を手向けた。住職は母の様子を見て、「お経も短めにしましょう」と言われた。済むとすぐに優太に頼んで、震え上がっている母を私の軽に乗せてもらった。住職にはお布施などを渡し、お軸と遺影を預け、深々とお辞儀をして御礼を言った。いまだきの僧侶は気軽なもので、丁度今から葬儀社に行くところなのでついでに返しておきましょうと、遺影の額まで預かってくれた。ひょいと荷台に置くのに「割れませんか？」と心配して聞くと、「ああ、これはプラスチックですから」と笑った。

(何だ。嚴重にダンボールに入れなくてよかったのか)

住職は軽自動車を自分で運転して去っていった。

実はこの住職は今年のあの事件があった際、私自身独りになったときにどうなるのだろうと不安を抱え、人に紹介してもらって相談に行ったそのお寺の住職なのだ。事情を聞いてくださり、その際にはそのお寺で永代供養をしてもらうことになっている。なので、この霊園にはもう来ない。父には悪いが、お墓参りはしないからねと心の中ですでに話してきた。

父の葬儀では兄たちに任せたので、葬儀社が手配した僧侶が来たのだが、何もかもこちらに押し付けられることになって困ってしまい、住職に相談をした。快く引き受けてくださり、本当にお世話になった。こんなことなら、葬儀の初めからお願いすればよかったが……。

「郷山霊園の納骨までこちらがすることになりましたので。私は入れないお墓ですが」

「ああ、その霊園なら私もよく行きます。そこの部屋を借りて法要をすればいいでしょう」

すべての事情を知っている住職はどういう思いで兄たちを見たのだろう。そういえば、初めてお寺に行って話をしたとき、初めはにこやかに笑顔で応対していた住職が次第に痛ましそうな顔になって言ったものだ。

「お兄さんは何かの病気ですか？ これからも施設や病院にお金がかかることでしょうし。家はそのためにも売れませんよ」

住職の高齢の母親も入院中で、兄弟が交代で世話しているという。施設に入れず、《胃ろう》をすればこのまま病院に居られるというので、そうすることにしたのだそうだ。私はそのときはじめて《胃ろう》というものを知った。《胃ろう》とは脳卒中や重度の認知症などで口から食事が取れなくなった際に、胃に穴を開けて流動食を流し込み栄養管理を行うことだという。嚥下が出来なくなった患者の胃に穴を開けて、液体栄養剤を入れる管を取り付け、栄養分を流し続けるのだ。

「そこまで、しなくてはいけないものでしょうか？」と聞いた。

「しかし、家族としてはそうするしかありません」

私も病院で体験したように、病院での治療を拒めば退院を迫られるのだ。しかし、引き取ってくれる施設もすぐには見つからない。それに、「命に係わりますよ」と責められれば、家族の立

場としては拒否することができなくなる。死んでしまっはかわいそうとも家族は思う。そうして、本人の意思は不明のまま、延命治療が施されることになる。しかし、それって治療じゃないだろうと思う。治らないじゃないか。悲惨な状態をただ長引かせるだけじゃないか。それどころか、更に悲惨な状態にしてしまう。もし、その患者に意識があれば、それを本心から望むものだろうか。私だったら叫ぶだろう。

「こんな嫌だ！ 静かに死なせてくれ！」と。

『かわいそう』とは一体何だろう。死んでしまうのがかわいそうなのか。こんな悲惨な状態で生きた屍にしてしまうことのほうがよっぽどかわいそうではないのか。

『延命』というが、命とは何なのか。人は命をもらってこの世に生まれ、そのときが来れば命を失う。定められているのであろうその死期を『延命』と称して、近代医学は人の医療技術を持って延ばそうとする。沢山の管を身体に挿入し、意識もない人間を植物と化してしまう。もうすでに、人の出生を操作してきた人類は人の死も操作しているのだ。こう考えてくると、何だか恐ろしくなる。人はいずれ死ぬ。それは当たり前のこと。自然と穏やかに老衰で大往生する。それこそ、すばらしいことなのじゃないか。

だから、私は十年前から尊厳死協会に入り、父と母も最近になって入会させた。父母は前々から延命治療は嫌がっていたから。死ぬときはころっと死にたいと言っていた。もう高齢だから、病院もそこまでしないだろうとも言っていた。しかし、最近は違うのだ。病院でも施設でさえも高齢者に延命治療をしている。現に、楠木ホームにも《胃ろう》をした寝たきりの入所者がたくさん居たのだ。こんな不幸な高齢者ばかり増やして、一体長寿の国と誇れるのだろうか。今は『自然死』ではなく、『不自然生』が溢れている。

人は最後まで人らしくありたい。死に様こそ生き様だと思う。自分の意思さえ示せない状態で、人の手を煩わせて下の世話までされて、挙句の果てはスパゲッティ症候群で生きながらえるなんて、真っ平ご免だ。それは人間の『生』ではあるまい。

住職から《胃ろう》の話聞いた後、テレビなどでその実態を知った。高齢者の場合、しばらくすると寝たきりのまま全く意識もなくなり、悲惨な状態になってしまうという。つまり、植物状態だ。それを広めた医師自身が今では後悔していると言っていた。やはり、今の医療はどこか間違っていると思ったものだ。

小柄で気さくな住職は親切なことに、母がお墓の前で座るパイプ椅子まで小脇に抱えて運んでくれた。兄嫁は連れてきた小さな孫二人に手を取られて、何の役にも立たない。

兄嫁が帰り際、「この後は？」と懲りもせずに聞く。私は元気よく「帰ります」と答えた。すると、「墓石の横に書き入れるんじゃないの？ あれはどうなるの？」と言う。

(そんなの知るもんか)

「私は知らないよ。ここの人に聞けば？」

そう言って彼らを残し、そそくさと母と二人、車で霊園を後にした。納骨のときに吹き荒れた突風はいつの間にか治まっている。

帰り道、私は何度安堵の声を上げたことだろう。ため息と共に。

「あー。済んだー。やっと、無事に終わったー」

「そうやねえ」

「あー。よかったー。全て滞りなく、終わったね！」

「ほんとやねえ」

「あー。ほっとしたー」

「そうやねえ」

母は相槌を打つのが上手だ。しばらく走っては安堵の声を上げる私に、母はその都度相槌を打った。葬儀から納骨まで、ちゃんと済ませた。これで、私の役目は果たした。

納骨のとき、あのろうそくに火も灯せない強風を吹かせたのは、父だったのだろうと思う。父はきっとあの旋風に乗って天に駆け上ったに違いない。今後、私はお寺にお参りに行くつもりでお墓参りはしないので、お墓に手を合わせたとき、父の遺骨にさよならとお別れをした。父は心を合わせれば、これからはいつでも私のそばに来てくれる。四十九日の今日まで一日も欠かさず、お供えと線香を上げた。手を合わせて、成仏してください、極楽浄土に往生してくださいと祈った。母はたまに線香を上げていた。こちらに遺骨を持ってきて良かったと今では思う。母は毎日父の遺骨と大きな遺影を見ることで、現実を認識できただろう。

昨日、司法書士の斉藤氏に電話を入れた。諸手続きの進捗具合を兄たちに会う前に聞いておきたかったのだ。不動産の変更手続きは済んだとのことだった。では、兄からも委任状はちゃんと返っていたのですねと確認するとすぐに返送されてきたとのこと。父が遺言書を残していたとは初めて知ったはずだ。驚いたに違いない。父の遺言書を前に、兄たちは一体どういう話をしたのだろうか。人一倍体裁を気にする彼らだ。専門家が入ったことで、恫喝して奪うのは諦めたかもしれない。

今までは不安で母の病気や認知症の進み具合も知られなくなかった。これ幸いと毒牙を剥いてきそうだったから。しかしもう、これで安心だ。どんなに彼らが勝手に家を処分したいと思っても、出来やしない。これからは、母と二人穏やかに暮らせる。母が亡くなる時は兄が喪主だから、向こうがどのように言ってくるかは分からない。が、納骨まではちゃんとしてやろうと思う。後の墓参りはしない。私が一緒には入れないことは母も承知のはずだから。

「兄たちがこの先どんなに悪かったと謝ってきても、絶対一緒の墓に入るのは、こちらから御免被るから。あんな狭い中でボコボコにされたくないもの。だから、お母さん。何も言わないでいいからね」と釘を刺している。

それを聞いたとき、母は「もう、どうしてそんなかねえ」と、ただ嘆くだけだ。

我ながら、自分の心の矛盾には気が付いている。あの二月二十八日のあと、兄に一言でも「言い過ぎた。悪かった」と言ってもらいたかった。だからといって、許せたかどうかは分からないが、少しは傷が癒えたかもしれない。しかし、その後全く詫びの言葉は無かった。それどころか、兄の態度を見れば、その後も私に対する憎しみは続いていたと思われる。これほど憎まれるようなことを私はしたのだろうか、いつも自分を責めてしまう。人に相談するたびに、こんな目に遭う自分が恥ずかしく、情けなく、辛い思いをした。住職に相談をしたときも、自分の煩惱を曝け出すみたいに思った。しかし、仕方がない。理不尽には断固、立ち向かわなければならない。

通夜の前に、優太と未樹が写真を取りに来たとき、未樹との口論の中で、お墓の話をおぼろ

した。私があのお墓に入る気がないことを、明言しておきたかったのだ。後で、兄たちとその話が出たはずだと思う。少なくとも、未樹から兄嫁には伝わったはず。それでも、霊園の手続きから納骨まで、何から何まで私に押し付けてきた。父のためにすることは厭わないが、彼らの性根が許せない。何と厚かましい人たちだろうと思う。母は「たった二人きりの兄妹なのに」と嘆く。私に言わせれば、そのたった一人の妹に、そんな仕打ちをしたことに良心の呵責はないのか。そんな兄に無性に腹が立つ。この先、どんなに謝られても、もうこの傷ついた心は癒えないし、あの墓に入る気は毛の先ほどもない。しかしそれでも、父や母が兄たちに対し、私のための抗議をしてくれていたなら、どんなに嬉しかったことだろう。そう、抗議だけでもしてほしかったのだ。そうすれば、多少は気が晴れたかもしれない。しかし、すでにそれも諦めた。

庭の山茶花が満開だ。父がこよなく愛した庭には目白や名も知らない鳥たちがやってきて、いい声で鳴いている。私はクラシックが大好きで毎日のように聞くと、ときに鳥のさえずりを聞くと何にも勝る名曲だと思う。

今年もあと一週間になった。母は介護保険の区分変更で要介護一となり、週三回のデイサービスが可能になった。家に居るときは午前中十時近くまで布団の中で、遅い日は昼近くまで起きてこない。午後も食事以外はテレビを見ながらコタツで横になっている毎日だ。時々心臓がおかしいと訴えるが、最近ではもう少し生きられるみたいだと言い出した。デイサービス先では、楽しくおしゃべりをしているようだ。連絡ノートには、いつも笑顔で饒舌で……とある。多弁も認知症の症状のひとつらしいし、どんな作話をしているものやらとも思うが、本人が楽しくやっているのならよしとしよう。

先月の初め、母がトイレで倒れたときには正直死んだのかと思った。まだ、父の四十九日も済んでいないのに何てことだ、と狼狽した。呼んでも答えない血の気のない顔はそうとしか思えなかった。あの時、もしかしたら父が連れて行こうとしていたのかもしれないと思う。寂しくて道連れに。

その日のうちに回復した母は、後日こんな話をした。二度も同じ夢を見たのだと。綺麗な景色のところに白い服を着た母の両親や姉たちがずらり並んでいた。その中で母の父親、つまり私の祖父がまだここに来るのは早いと言ったという。また、そこに父の姿はなかったと。あれは四十九日の法要の前で、そのとき父は母のそばにいたのかもしれない。そして、一緒に連れて行こうとしたのだろう。

あれから、母も落ち着いた。母が父の元に行くのもそう遠い日ではないかもしれない。来年には八十七歳になる。進行性のアルツハイマーと診断されて、この先どうなっていくのだろうと不安はある。せめて余生を楽しく穏やかに過ごしてほしいと思う。そして、母を見送る日までは私も頑張って生きなければと思う。それが済めば、私は誰にも知らせず、小さなアパートに引っ越して、この家は兄たちのかねての希望通り売り払い、折半することになる。それでいい。それから、もう誰にも煩わされることのない私だけの生活を、また新たに始めることにしよう。